

野草雜記・野鳥雜記

野鳥雜記

柳田國男

青空文庫

野鳥雜記

一

暫らく少年と共に郊外の家に住むことになって、改めて天然を
見なおすような心持が出て来た。少なくとも今までの觀察の、大
抵は通りすがりのものだったことを感ずる。旅は読書と同じく
他人の經驗を聴き、出来るだけ多くの想像を以て、その空隙を
補綴しなければならぬ。自分の如き代々の村人の末でも、ほんの

僅わずかな間の学問生活によつて、もうこれほどまでに概念のしもべにならうとしている。これは忘れたというよりも最初から談かたらうとしなかつたためであらう。今において始めて野の鳥の徒いたずらに饒じ舌ようぜつでなかつたことを考えざるを得ない。

二

畠はたけに耕す人々の、朝にはまだ蕾つぼみと見て通つた雑草が、夕方には咲き切つて蝶の来ているのを見出すように、時は幾かえりも同じ処を、眺めている者にのみ神秘を説くのであつた。静かに聴いていると我々の雀すずめの声は、毎日のように成長し変化して行く。ある

日はけたたましい啼なき声こゑを立てて、彼等の大事件を報じ合おうと
 している。これが人間でいえば物語であつて、集めまたは編纂へんさん
 して歴史となるべきものであろうが、あれを構成して行くめいめ
 いの悩みと歡よろこびとの交渉配合が、こんなに人生の片寄つた一小部
 分であつたことを、今までは頓とんと心付かずにいた。

三

雲雀ひばりが方々の空で鳴いている。多くはこれも自分の畠はしを持って
 いて、他処よそへ出て行かぬ時ばかり、最も自由に嘯さえずり得るものらし
 い。一つ一つに流義りゅうぎというようなものがあつて、出来るならば名

を付けてやりたい気がする。ある者はいかにもブマであつて、朝も夕方も少しでも調子をかえず、土の上において空の声を啼いたりする。そうかと思うと精確におりる時、立つとき、横に行く時と歌いかえ、高さによつて次々の節を変えるものがある。籠かごに入れて飼ひ始めてから、人は漸ようやくその巧拙こうせつを聴分け、価の差等を設けようとするが、もし差等があるならば疑いもなく持つて生れたものであつた。こんな東京の近くの、真似まねならば幾らでも出来る土地に住みながら、一生涯下手に啼いて、暮してしまふ雲雀もあるのを見れば、親が教えるということとは師弟とはまた別のもので、鳥屋が名鳥の籠の隣へ雛ひなを連れて来て、好い調子を学び習わしめようとするのは、一つにはただ天分の試み、今一つは外界を遮しやだ

断して、仮に幼ない者にこれを親かと思わしめるだけの細工であつたかも知れぬ。

四

だから雛を育てることのむつかしい雁がんなどのおとりは、かつてそうし 周ゆうの寓言ぐうげんにもあつたように、その鳴声の遺伝がたちまちに食われると愛せられるとの境を区別する。美濃から信濃にかけては秋に入ると、鶉つぐみの売買が盛んであるが、好いオトリの何年かを飼ひ馴らしたものは、ただの仲間のこうじづけ 鶉こうじづけ 漬づけになる鶉の、何千羽を集めたよりも高い価を持っている。それが決して教育の力ではな

く、単に偶然にその声の囀に適することが発見せられて、多数の中から稀まれに一つ、取残して珍重せられたというに過ぎぬ。専門の鑑定家の話を聴いて見ると、声の佳よいというのも決して鶉たちのために佳いのではない。よく鳴く鳥でもその声が悲しければ、空を行く群がうかうかと降りては来ない。籠にいながら籠を忘れて、ただ食糧と水との豊かなることに満足してさも楽しそうに歌っている、しからばここで休もうと多くの渡り鳥が、網を張り渡した夜の明け方の小松原へ、ばらばらと飛んで来て捕えられるのである。文人で言うならば病的天才である。ここいらの野の雲雀の群には、そういう標準から鳴声の善悪を批判せられるような心配は幸いにしてまだないばかりか、彼等の仲間だけでは頓馬とんまを極上

々と、きめていたところで致し方はないのである。

五

少なくとも下手はお構いなしに、精一杯に彼等は鳴いている。それをまた我々が色々と意味を付けて聴こうとしていたのである。自分などの小さい頃には、雲雀は

テンマデノボロウ、テンマデノボロウ

と啼くものと思っていたから、麦畠のへりの土にいなながら、そういう鳴き方をするのを聴くと、何かなまけ者の夢のようでおかしかった。それからまたあの羽を互いに傾けつつ下って来る声を

オリヨウ、オリヨウオリヨウオリヨウ

と聴く習いがあつた故ゆえに、たまたまそれが行動と一致しないと、今でもあの雲雀はどうかしていると、思わざるを得ないのである。面倒に考えて来るとこうした批評家のもつ先例の集積は、目に見えぬ自然らしさを以て法則の力を支持するようでもあるが、果はたしてしからば何故なにゆえに突如として、非難せらるべき雲雀をこの世の中に、出現せしめたかという問題が残る。いやこれはとんでもない理屈になつたが、とにかくに我々の故郷の小鳥は、ただそれぞれに人間の心持ちだけを鳴いていたのである。

六

つばめ
燕が軒の端に来て囀っているのを聴くと、あれは

ツチクテムシクテクチシーブイ

というのだと思っていた。土を食い虫を食い口が渋くなったという
ことを、彼もまた中国の田舎の方言を以て談かたつていたのである。
画眉ほおじろ鳥が杉や川かわやなぎ楊などの最上端にとまって、青い天地を眺め
つつ啼く声まで、我々には

イツピツケイジョウツカマツリソロ

というように聴えた。もちろんこれは寺小屋に行く子供などの、
邪推といえは邪推のようなものであった。明けても暮れても手習
いの文句の、調子の面白いところを口癖にするのを、後には聞き

覚えて鳥の癖に真似をする。それが例の蒙もうぎゆう求もとを囀せうるといふ諺ことわざの引続きであつて、しかも句としては新らしかった。『物類ぶつるい』
 称呼こうこ』は安永年間の書物であるが、あの中には関東で「一筆啓
 上せしめ候」、遠とおとうみ江国えこくにおいては

ツントイツツブニシユマケタ

というところがある。小玉銀五粒と二朱負けたというのだから、これは
 明らかに博奕ばくちのことで、今でも信州の大河原おおがわらの奥などでは、そ
 ういう無教育な鳴き方をするように伝えられる。同じ頃にまた薩さつ
 州しゅうの方では

オラガトトハ三八二十四

と、頬ほお白しろが啼ないていたということである。このトトはもちろ

亭主のことで、若い嫁御さんをひやかした言葉のようだが、しかも丁寧ていねいに三八二十四と、九九の声を添そえてあるのは、そういう暗記をしていた連中、即ちすなわやはり子供らの通弁であつた。

七

秋の蟋蟀こおろぎの「肩すそさせ裾刺せ、寒さが来るぞ」でも、さては梟ふくろうの五郎助奉公ごろうすけ、珠数掛鳩じゆずかけぼとの年とし寄来いも、それぞれにこれを聴いて特に心を動かす人があつたのである。そうして大抵は老人か女か子供、忙がしい働き手はそんなことを考えている余裕もないから、世の中が段々ませて来ると、もう鳥虫の歌は今日の舶来の

歌の如く、意味は何でも構わぬという音楽になるのである。私はこれを忘れてしまわぬうちにと思つて、少しずつ集めて置いたものである。こういう話のついでにぼつぼつと思ひ出すならば、いかるがという鳥がヒジリコキーと啼いたというのも、古い時代の戯れ言葉かと思われる。ヒジリは上しようにん人で女房はないはずであるのに、時々はその聖ひじりの児こというものがいたのである。キーは調子を高く別に発声するから、恐らくは嘲あざける意味に聴えたのであろう。地方によつてはこの鳥を三光さんこうちよう鳥ともいつて、「月星つきほし日ひ」と啼くというのが、信州の諏訪すわ・筑摩ちくまではミノカサキー、奥州のどこかの田舎ではアケベエキー、即ち紅あかい衣きを著よと聴いていた時代もあった。四月山々の花のゆつたりと咲く頃に、なつ

かしい心持を以てこの鳥の枝に遊ぶのを、見ていた子供たちの姿まで目に浮ぶようである。

八

これとは反対に時ほととぎす鳥の啼き声には、どういうわけでか哀愁を催すような話が多く伴のうている。昔名古屋の近くの村で、五つ六つばかりの男の子が、人に連れられて物ものまい詣りに行く途中、頻しきりにこの鳥の啼く声を聴いて、一人で嬉しそうに笑っていた。どうして笑うかと人が尋ねると、それでもあの鳥が「ととさへ、かかさへ」と啼くものをといたというのは、親のない児であつ

たのであろう。その年麻疹ましんを病んでその子は死んだと、真澄ますみの奥州の紀行の中に書いてある。郭公かつこうは時鳥めすの雌などという俗説もあるが、これがまた同じように冥土めいどの鳥であった。古い物語に母一人子一人、夕の山路を物淋ものさびしく通っていると、早来はやこ早来この鳥が啼いた。そうして心付いて見ると、背の幼な児は死んでいたという。今では我々の耳にはカツコウとばかり聞えるが、ハヤコもしくはアコという以前の語音に近かったために、特にあの鳴声を怖れていたものと思われる。他の小鳥が寝処を捜す時刻になつてから、この二色の鳥ばかりが際限もなく鳴いて来る故に、憂うれいある者は殊ことに耳そぼだを敬そぼだてざるを得なかつたのである。

九

それがまたちようど昔の農民たちの間に、子供の頃聴いた爺姥の物語を、想い出す刻限でもあつたのであろう。驚くばかりの沢た

くさん

山の昔話が、時鳥と郭公とについてのみ保存せられている。そうして広い地域に流伝して、しかもその啼声の聴きようと、これに基づくこの鳥の異名だけは、土地ごとに少しずつ変っている。

誰でも自分の生れた土地のみの、つまらぬ話のように聞き流してはいるが、昔々時鳥と郭公は兄弟でまたは姉妹で、誤つて一方を殺して悔い嘆いて鳥になつたという類の口碑こうひが、少なくとも国半分に拡がっているのである。以前もその一部分を比較して見たこ

とがあるから、ここには簡略に異名だけを述べるのだが、信州の各郡でオトツトコイシ、またはオトツトキツタカキヨキヨキヨ、越後に接した郡でオトツトコロシもしくはオトトツツキツタ、土地によつてはホチヨカケタ、東京府下の西部山村でも、あるいはオトツトツキツチヨと啼くといひ、またはオトハラツキツチヨと啼くともいふが、何と鳴こうとも話は大抵同じである。青森県などは広い区域にわたつて、この鳥をコナベヤキという処があり、秋田でも北部はナベコドリという異名がある。昔これも兄弟の二人があつて、兄が出て働いている留守に、第一人小鍋立てをして楽しんでいるところへ、兄が還かえつて来たのでそつちへ隠れこつちへ隠れて、食べるだけ食つてしまふと背中が裂けて死んで時鳥に

なつた。だから鳴く声が

アチャトデタ、コチャトデタ、ボツトサケタ
というのだという昔話もある。

一〇

鳥が我々の前に来て最も自由に物を言う動物であることは、恐らくは昔話の特に彼等のためにいつまでも成長した理由の一つであろう。昔話の管理者はかなり久しい以前から、老人とその孫たちであった。そうして彼等にはまた昔話の、時刻というものがあつたらしいのである。椰子やしの葉蔭に横たわつて日を過す人々は別

として、働かねばならぬ温帯の国の田舎では、日の夕暮はただこれ等の人々にのみ寂しかった。兄姉はまだ野仕事から還らず、母は勝手元に火焚き水汲みまたは片付け物に屈托くつたくをしている間、省みられざる者は土間の猫雞にわとり、それから窓に立ち軒の柱にもたれて、雲や丘の樹の取留めとりともない景色を、眺めていることの出来る人たちであつた。年寄がいなければ子供仲間こどもで、物蔭を怖れて遠くへは行かずに、心ばかりを誰よりも自由に、働かそうとしたのもこの時刻であつた。それが百万回以上も積重つみかさねられて、ここに色々の村の文学が出来た。螢ほたるや蝙蝠こうもりは言うに及ばず、雁がんでも鴉からすでも五位鷺ごいさぎでも、彼等に喚びよかけられる多くの鳥は、大抵は皆夕の空の旅人であつた。喧嘩けんかもよくしたが歌もこの際において歌

われた。何百と算かぞえられる子守唄の類を見ても、大部分は日のく
だりから、黄昏たそがれ近くまでの産物であった。昔話の主人公となつ
た梟や時鳥、東北の野山ではカツコウや馬追うまおい鳥どりが、いずれも暮
れかかつてから啼きしきる鳥であつたことは、私には些すこしも偶然
とは思われぬ。

一一

殊に時鳥には絵に描かれるあの形から、思い付いたような話は
一つもない。中部地方の人々には珍めずらしいが、いわゆるコナベヤ
キまたはナベコ鳥の物語は奥羽おううには弘く行われていたらしい。下

北半島のある村々の少年は、我々がカラスカラスと歌うように、時鳥を見ると次のような詞を繰返していた。

小鍋焼きよ

そちやとでた、あちや飛でた

誰に小鍋隠された

即ち弟が兄に隠して小鍋立てをしていて、それを隠そうとして腹が裂けたという話は、あるいは今一つの山の薯いもの話などと、混同してからああなったのかも知れぬが、少なくともこの鳥がさも急いで、森から岡へ空を横ぎって飛ぶ声を聴いてそつちへ飛んで行つたと叫ぶように、考え出した者があつたのである。羽後大うごおおだ館てにはこの鳥はいたって少ないが、試みに何と啼くかと尋ねて

見ると、やはりまた

アチャトデタン・コチヤントデタン

と啼くそうだと言った。それから鹿角郡かづのの宮川村、または南部の野の辺地へじでも盛岡でも、アチャトデタカと啼くという人が多かつた。即ち小鍋隠しのおかしな昔話も、基づくところはこの鳥の啼く声であつたのである。

一一一

それよりもなお一段と有名なホンゾンカケタカ。これもあの声をそう解して後に徐々として物語の空想は伸びまた彩いろどられたよう

である。森口清一君の説によれば、紀州の有田一郡でもこの系統の話は五つまであつて、いずれも奥州の鍋子鳥と同じく、この鳥の前生の因縁を説くものであつた。百舌もずと時鳥とは古い友人であるが、百舌が唐から本尊の掛図を盗んで来たのを知つて、いつも時鳥が「本尊掛けたか」と啼く故に、これに閉口して時鳥の啼く時節だけは、百舌は黙つてゐるという話。あるいはまた時鳥が百舌に金を預けて、御本尊を求めてくれと頼んだ。それを買わずに酒を飲んでしまった故に、今でも百舌という鳥の顔は赤い。時鳥が「本尊買うたか」と啼くと面目次第もないので、その頃だけは百舌はどこかに隠れて出て来ないという話などもある。

しかし時鳥の声の聴きようとしては、これはいかにも面白いに相異ないが、話は子供にとつて幾分か込入っている。それというのは百舌と時鳥との関係が、実は今一つ以前から既にあつて、それをここまで持つて来るために、やや不自然なつぎあわ継合せがしてあるからである。伊予の大洲おおすのあたりでは、百舌は友人の時鳥に昔から借りがあつて、それを返弁するために時々かえるは蛙などを捕つて、枯枝のさきに突刺つきさして置く約束をした。時鳥はそれを催促して、今でもトツテカケタカと啼くのだといつている。俊としより頼けんしよやあ顯けん昭あうの盛んに古歌を解説した時代には、果して京都でもそう啼い

たものか否かは知らぬが、少なくともこの話だけは源平以前からあつた。「五月ばかりにもずまろ、もろくのもし小鳥若くは蛙などを捕りて、木の枝などに貫ぬき置くことあり。是これをもす鴟の速はやにえ贄とは云ふなり。時鳥に借りしをわきまふると也」と顕昭が言つていれば、俊頼もまた時鳥の啼く五月頃は、百舌は沈黙して垣根などをつたいあるき、ただ時々声低く「ほとゝぎすこそ」と喚よぶばかりだなどといっている。はやにえというのは新鮮なる貢ぎ物、即ち魚類などを貴人に献ずるために昼夜の飛脚を走らせることをいうらしいが、それを百舌から時鳥に向つて、進上せねばならぬというような何か一つの話が、もうあの時代の歌人等の耳に入るまで、広く日本にはもてはやされていたのであつた。

一四

あるいはまたこれを「もずのくつで」ともいう者があつた。

『八雲御抄』には単に「もずのくつで、我身がはりに蛙やうの物を、物に刺して置くなり」とばかりあるが、これも同じく時鳥に向つて、支払われなければならぬ沓くつの代価であつたことは、後々の童話が十分にこれを証明する。例えばこれも紀州の吉野川の流域で、今も行われている語り草の一つに、昔時鳥は馬の沓を造る職人で、百舌はその友人の馬方であつた。何なんべん遍となく時鳥の作つた沓を借かりたお倒して、その代錢を払うのを怠つたために今以て

百舌は蛙その他の虫類を取つて来て、これを樹の枝に串刺にして置いて忘れる。そうして時鳥に餌を供しているのは、昔不義理をした罰であるというそうである。百舌が生き餌を木に刺して忘れてしまうことは、誰でも簡単に観察し得るだろうが、それを時鳥が後から廻つて食うかどうかは、そう容易には実験するわけに行かない。ましてやそれを昔の馬の沓の弁償であるなどとは、空に想像することはむづかしい話であつた。これはこの鳥の異名を沓くつてどり手鳥という如く、かつてはトツテカケタカの代りに、「沓手掛

から段々に鳥が人間であつた前の生を、こういう風に想像するようになったのであらうと思う。しかも移り變つて本尊掛けたかと

聞く世の中になつても、なお百舌と時鳥との交渉は絶えなかつたのである。それから推して考えて見ると、ずっと以前にも別になおこれと類した他の話があつたのかも知れぬが、少なくとも沓手鳥の異名のもと、即ち百舌に対して馬の沓の代価をはたるといふ話は、あの啼き声をクツテと聴くようになって後に、始めて発生したものに相異なるのである。

一五

稚児おさなごの最も敬けいけん虔なる伝統主義、あれどもなきが如き作者意識を以てして、なおこれだけ人望のある昔物語がいつの間にか消

え改まり、もしくは新たに美しい芽を吹いたのである。昔と名の付くもの必ずしも古物でない。我々はむしろ常に珍らしく驚くべきものを求めていた。ただ幸いにして童子の世界においては、それが彼等の心臓に近く幾らでも転がっていったというばかりである。野の鳥が以前は人間であり、または今でも人の如き心を持って、その思いを我々に語ろうとしているかという想像は、単に大古以来のある人類の癖というよりも、むしろ代々の小児たちの、新たな二葉の夢と言った方がよいのかも知れぬ。道の教えが果して天地の自然ならば、これとなんらの交渉もなしに成長することは出来なかつたはずである。彼等の不思議の国はほうばく茫漠たるものではあつたが、しかも説法伝道の労を仰がずして、自ら夕方の窓に

凭よつて、進んで「かくり世」の消息を問わんとしたのも彼等であつた。あの簡単な時鳥の一声を、これほど色々にもまた意味深く、解釈しようとするには準備を要する。そうしてその準備もまた歴代の少年少女が、大切に積み重ねて姥翁になつてから、後に來る者に引継いで行つたものばかりでいわゆるちりよ智慮ある人々は一向にこれに干渉していないのであつた。

一六

しかし彼等のいわけない空想にも、やはり大昔以来の隠れたる制限はあつた。日本に馬の沓作りという職業が現れて後、始めて

沓手鳥の異名は認められたに相違ないが、それを前世の馬方が生れ替つて、負い目を返すという物語と結び付けたのは、依然として歌に詠まれるシデノタオサ、もしくは浄瑠璃じようるりの「冥途めいどの鳥」の、引続き以外の何物でもなかつた。北信のある山村では、あの声をオツトコイシと聴いて、妬ねたみ深い女房の魂が化してこの鳥と成つたという説があり、一方には東京近くの青梅おうめ・八王子あたりの田舎では、継子ままこのひがみから疑つて弟を殺したと称して、オトノドツキツチヨと啼きまわるといふ話がある。谷がちがい水の流れの異なるにつれて、聴きようは幾通りにもかわっているが。それを解説した物語はほぼ一樣で、いづれもかつて人間であつた頃の誤りを悔い悲しみ、我とその罪ざいごう業を名乗つて子供等の前に来

て啼くというのであつた。二人ある兄弟の一方が素直で優しく、一方がねじけて荒々しかつたというなども、いたつて古い昔物語の型である。その争いの原因が通例は山の薯いもで、それがちようど時鳥の山の木に飛びかわす頃に、芽を出し蔓つるを延ばしてありかを人に知らせる、単純な我々の食物であつたことを考えると、年に一度の定まつた季節が来るごとに、これを思い出し語り出した人間の言葉の方こそ、かえつて野の鳥の声よりも更に自然さらなものであつた。

能登^{のと}・越^{えつちゆう}中の境あたりの時鳥は、「弟恋し、掘つて煮て食

わそ」と啼いていた。これも山の薯の話であつたことは説明をす
るまでもあるまい。奥州各地の昔話においては、心のひがんだ兄
は盲目であつた。妹の掘つて煮て食わせた山の薯が、あまりに旨^{うま}
いのでかえつて邪推をして、妹はもつと旨いのを食っているだろ
うと思つた。そうして包^{ほうちゆう}丁^{ちゆう}を以て親切な妹を殺したところが、
それが先^まず鳥になつてガンコ・ガンコと啼いて飛去つたという。
ガンコというのは多分頭の意味で、薯の筋だらけの悪い部分はい
うのである。即ち私が食べていたのはガンコだガンコだというと、
さてはそうだつたかと悔い歎いて、盲の兄も鳥となり、ホチヨカ
ケタと啼いて飛び、今でも山の薯の芽を出す頃になると、こうし

て互いに昔の事を語るのだというのである。自分の想像では郭公と時鳥の混同、今でも多くの田舎でカツコウを時鳥の雌めすだと思つてゐるのは、こういう昔話によつて誤られたものであるうと思つ。小さい者に聴かせる話としては、鳥の争いは兄弟とした方が解しやすいが、諸国の例には親と子、妻と夫というものも少なくはない。要点はむしろ前の生の罪業によつて、鳥となつていつまでも啼いてゐるといふにあつたので、それにはカツコウは百舌などと違つて、同じ季節に里近くへ来るといふだけでなく、夕闇のやや深くなるまで、悲しい声を立てて啼きかわし飛びかわす習性さえ、よく時鳥と似ている故に、いよいよ夫婦兄妹の靈魂が鳥になつたという話に似つかわしかつたのである。

一八

昔も昔話が小児ばかりの戯れであつたなら、あるいはこんな細かなことまで考えて置く必要はないのかも知れぬが、自分にはそうと考えられぬ理由がある。信ずる人がもう尠すくなくなつて、聴衆を無智文盲の幼童に求めた以前、久しい間夜の鳥は成人にも怖れられた。鶴ぬえは単に未明の空を飛んで鳴くために、その声を聴いた者は呪言を唱え、鷺ふくろうも梟も魔の鳥として、その異常な挙動を見た者は祭をした。前に掲げた時鳥のトトサヘカカサヘ（父へ母へ）も、聴く人はこれを孤児の死ぬ前兆と考えた。郭公を早来鳥はやこどりと

名づけて人が畏れたのも、ハヤコーをかの国への招きの如く感じ
たからである。あるいはハコ鳥とも称して魂は箱の中に、管理せ
られ得るものの如き信仰をさえ養つていた。

鳥が突如として天空の一角から、我々の眼の前に現れて啼くの
を見て、神の使のように思うのは自然である。人の心がこの軀からだを
見棄てて後まで、夢に現れまたしばしばまぼろしに姿を示すのを、
魂が異形に宿を移してなお存在するためと推測したのがもし自然
であるならば、それを野の鳥の声殊ことに清く、人の休息しまたは静
かに物思う刻限を測つて、訪れ来る者に求めようとしたのも、怪
しむ余地は殆ほとんどないのである。ただ凡人は自ら公治こうやちよう長を以て任
ずることは出来ぬ。その語を通訳するにはおのずから術がなくて

はならぬ。故に我々の祖先はその心情の最も小兒に近かつた時代に、特に謹んで野の鳥の昔話を聴いたのみならず、更に忠実にこれを記憶して、次に来る者に教えて置こうとしたのであった。そうしてこれを説きまた一致して耳を傾ける心持を、我々は名づけて面白いといったのである。「面白い」は人の顔が一つの光に向つて、一斉に照らされる形を意味したらしい。そういう顔をして共同の興味を感じ得る者は、今ではもうごく小さな子供より他にはなくなつたのである。

鳥の話は百舌と時鳥、あるいは時鳥と郭公の友であり同胞であつたという話の如く、大抵は善い鳥と悪い鳥との比較対照を以て彩られている。馬の沓屋と馬方との話に、一番よく似ているのは梟からすと鳥との話である。昔は梟は染物屋で、鳥は真白な羽をした美しい鳥であつた。そのせつかくの白い衣裳を、一つ流行文様に染めましようと思つて、梟紺屋こうや あつちに逃えたところが、梟は粗忽そこつで真黒々に染めてしまった。鳥は腹を立て梟は面目ながつて、日中鳥の出であるく時刻には、梟は樹の蔭に隠れて決して出て来ない。たまたまその居処を鳥が見付けると、寄つてたかつていじめ抜くのはそのためだといつている。この話の頓とんさい才ある者の発明であることは認められるが、もしそうならば「沓手掛けたか」の物語が

既に出来た後、どうしてまたその同じ古い形を追おうとしたのか。要するに老人や童児には、特に前生の因縁を以て鳥類の生活習性を解説しようという要求があつて、それが無意識に彼等の Why's o Stories の傾向を指定したのである。日本にはこの類の動物説話が、存外乏しいかの如く考えられたのは誤つてゐる。ただこれが西洋のよく開けた国と比べて、こちらにはまだ統一があり、従つて単調を免れぬというだけで、それ故にまた一段と我々の中においては、どうして民間の説話が成長し分裂し、もしくは世のいわゆる文芸化を受けて行くかを、察し知ることが容易なのである。

例えば時鳥の童話の今一つの様式として、これも紀州の有田で次のようなものが採集せられている。昔雀と時鳥と百舌とは三人の兄弟であった。母が病気で死のうとしていた時、雀は知らせを聞いて一番先さきにかけてつけた。時鳥はお化粧けしょうをしていて、母の臨終に間に合わず、何なに故ゆえに遅く来たかと雀が小言をいうと、「もう本尊たてたか、建ててなければ急ぐにや」と言い返した。百舌は不幸を知りながら一番おくれてやって来て、棺に納めてある母の顔を見たい見たいとだだをこねたので、姉の時鳥に静かにせよと叱られた。それだから雀は親孝行の報いで、一年中里にいて食物が最も多く、時鳥は後おくれて来た故に春の末にやっと出て来る。

百舌は時鳥に叱られたから、今でも隠れまわつて時鳥が啼かぬうにならぬと出て来ない。

この話の継ぎ合せであることは他の地方の例と比べて見なくともよくわかる。殊ことに羽の色に何の特徴もない時鳥に、お化粧を説くということがおかしく、本尊建てたかも関係が甚はなはだ薄い。しかしとにかくに親の死に目に逢つた逢わぬという話は、不思議に全国に弘く行われている。我々の知っている最も普通の形では雀と燕きつつきと啄木鳥の三兄弟となつている。この中で啄木鳥の化粧が一番念入りであるが、そのために親の臨終の日に最もおくれてやつて来た。雀はちようどお齒黒を附けかけていたが、急いで頬ほっぺたの汚れているのも拭かずに、飛んで来て介抱をしたので褒ほめられ、

燕は黒くろ繻子じゆすの引掛け帯などをして、いるうちに、少し遅くなつてろくろく碌々死水も取らなかつた。それが今の世まで雀は頬に墨が付いていても常に穀物にあり付き、燕は姿こそよいが忙しく飛廻つて虫しか食べられず、啄木鳥は伊達だてな衣裳を着ていても常に木を叩いて苦勞をする。三人三様の幸福もすべて前生の報いだといふのである。土地によつては啄木鳥は見られず、あるいは別の鳥をこの仲間に入れようとした例もあるか知らぬが、先まづこういうのが整つた形といつてよろしい。

近代の親子嫁姑の共に住む社会において、これが適切なる教訓譚として人望を博したことは、雀の異名を孝行鳥という地方が、少なくともいのを見ても察せられる。これと相隣りする雨蛙の不孝者が、せめては亡き親の最終の望みを容れ^いようとして、かえってその真意に反して水の岸に埋めた。それで雨降る日には泣くのだという話などは、確かに転用でありまた計画ある道話^{どうわ}であるために、あるいはこの三つの鳥の物語なども、新たに考え深い先輩の製作したものの如く、速断する人がないとも言われぬが。鳥の前身譚だけは前にも列挙したように、少しも道德味のないものが幾らもあつて、民話は久しい間別の経路を辿^{たど}つていたのである。しかも時鳥の話には、童児があの中空の声を聴いて、次々に物語の

外形を改めて行く機会があつたが、孝行譚の方にはそのような方の冥めい想そうはないはずであるのに、かくまで芸術化した近代と調和して、しかも前生の因縁を語る点において、他の多くの鳥の話と、著しい共通を持つのは不思議だと思つていた。

ところが偶然なる手掛りがあつて、今私はその原由げんゆを見出そうとしてゐる。磐城いわきの上遠野かとおの附近に住む人から、一友人への通信の中に、あの地方のワカが神しん明めいの祭をする時に、雀の孝行、燕の不孝の童話と、同じ内容の歌詞を唱えるといつて、その文言の一部までも報告して来た。ワカは仙台領以北でオカミといい、南部領ではモリコともまたイタコともいう巫女ふじよのことであるが、関東以南のイチコ・梓あずさ神子さみこ・大弓などという婦人と違うことは、弓や

幣束へいそくの代りに木に刻んだ二つの人形を手に持つことで、その人形を奥郡ではオシラガミ、阿武隈水域あぶくまではシンメサマというのである。ワカの輩がもし果して鳥類前生の説話に参加していたとすれば、この程度の開展は必ずしも意外でない。彼等は単に文字を使用せぬという一点を除いて、当代のいわゆる大衆作家と同じ行き方をしようとした作家であった。即ち前の方からは時代の趣味、予期せられた通念に引張られ、しかも目に見えぬ伝統の綱を以て、その空想のうしろ帯つなを繋つながしめて、いわば硝子箱ガラスの中に泳いで、生きていたのが彼等であった。彼等が語るということは種子があることを意味する。そうしてその種子のいつから始まったかは、彼女等自身もまた知らないのである。しかし最近の興味の中心が、

妖女と劍けんきよう 侠やく と宝物さがしであるに反して、昔の聴衆は幽界の

消息と、因果応報のことわりとを悦よろこんだ。すなわち目に一丁字いつていじ

なきこれ等の女性文人が、特に物識ものしりとして尊ばれた根拠である。

これが福島県下のある一村の偶然でなかつたことは、近頃漸ようやく

のことでこれを確たしかめることが出来た。南部のイタコなどの経文と

称して読み上げるものは、長者の姫と名馬との恋物語、後に二つ

の靈魂は天上に昇り、再びこの土に降くだつて蚕かいこの神になつたという、

神怪を極めた由来記であるが、現在普通のオシラ神はその影響を

受けて、馬と美女との頭にそのいわゆる桑の木人形を彫刻してい

る。しかもそれ以外に今一つ古い形として、別に鳥頭とりがしらという

オシラ神があつて、その根原はなお不明である。八戸はちのへのイタコ

などの記憶する雀燕の歌物語は、まだ仔細には聴取ききとっていないが、主として鳥類のかつて人であつた時の事を説くというから、恐らく以前これを以てオシラ遊びの経文とした時代があつて、それが木像の形の上に影響したのではないかと思つてゐる。

二二一

奥州のオシラサマには取子とりこと名づけて、多くの少年少女の特別な保護を受ける者があつた。それが祭の日には座つらに列なつて神と共に一日を遊んだ。イタコの歌語りが大きな印象を、彼等に残したことは想像に余りがある。仮に時鳥の小鍋焼きの話などが、こ

の日の耳学問の記念ではなかつたとしても、その感化がなければ
ボツトサケタという啼き声は出て来まい。土地によりまた時代に
つれて、次から次へと幾らでも奇抜な聴きようをしていながら、
それが結局はことごとく魂の苦悶くもんであり、あの世の音信であると
いうことに帰著きちやくするのは、単独に幼ない者だけの経験ではな
かつた証拠ではないか。

だからもしこの物寂しい黄昏たそがれの感動が、自然に人の空想を死
の国に誘うたものとしたら、それは我々がまだ子供の如く、為すな
こともなくして静かな夕暮を過すことの出来た大昔から、そうい
う心持を持もちつづけていたのである。しかもそれから後の子供等の
観察の相違に伴うて、次第に時鳥の昔話は變つて来た。ある村

では克明に古い形をもと需め、他の村では新しいものが珍重せられて、それをまた忘れようとさえしているのである。少年の天地はもちろん広くまた明るくはなつて来たが、それと同時に彼等の働くべき仕事はなくなつた。新時代の童話はただ料理したご馳走ちそうの如く、おまけに飽きられて既に腐つて行こうとしている。

△何を書いて見ようかをはじめ始から考えずに、段々書いて行くうちにこんな話になつた。一いったん旦これで止めて置くが、きつとまた書いて見たくなるだろうと思う。(筆者)

鳥の名と昔話

一 水こい鳥

鳥と我々の祖先とは、今よりもずっと親しい交際をしていたことが、彼等の名前からでも想像し得られると私は思う。鳥の名前は確かに人間の贈り物で、それも二人や三人の志ではなかったはずだからである。そうしてその記憶の久しく残っていることは、

更さらにまた以前の親しみの、近い頃まで続いていたことを語るのだから、それをもう一度思い出すということは、鳥によつて我々の親たちの生活を新たに知ることにもなるのである。私はこういう心持もつを以て「鳥の名と昔話」を集めて見ようとしている。静かな山近くの村里に住む諸君の、援助を求めたいものである。

赤シヨウビン一名深山みやまシヨウビンが、歌に詠まれた水恋鳥みずこいどりのことだという説は、関東の方でも信じている人が多い。普通の会話には用いにくい言葉だが、本を読まぬ人でもこの名はよく知っている。こういう耳の方言の保存は多分はその背後にある昔話の力であろうと思う。もつともその昔話にも時代につれて、少しずつの変化はあつたようだが、大体に鳥の挙動や啼なきごえ声の特徴と結

び付いたものは古くからあつた形と見てもよいようである。鳥にはどういふわけか親に不孝をしたという話が多い。三河の北設きたした楽郡らの山村では、水恋鳥は親に死水を遣やらなかつた罰で、自分でも水が飲めぬようになった。真赤な胸の毛が水に映つて、近づいて飲もうとすると水が火に見えるという（『旅と伝説』二巻一號）。それから下流の長篠ながしの附近でも、この鳥前生しゅうとめに姑を虐待して、その報むくいを以て鳥に生れた。谷の流れに飲むことが出来ないのわずで、僅かに雨露を口に受けて渴をしのぎ、いつも水恋しと啼いてゐるのだというが（『郷土研究』二巻一二号）、人によつては話が少し異なつて、前生は女で馬に水をくれるのを怠り、そのため馬が死んだから、罪を被つて水恋鳥になつたというふうである

（『三州横山話』）。

この方が一段と原因が特殊だから、前の形であつたらうかと思
 うが、今はまだ確かにそういう始めた動機を見つけることが出来
 ない。野州の一部でこの鳥をトウガラシゴマというのは（『本草
 綱目啓蒙』卷四三）、啼声こまじりが駒鳥こまじりに似て羽色が赤いからである
 うが、会津の大沼地方でも、また九州の南端でも、共にこれをた
 だコマドリともいう所を見ると（川口氏）、直接にあの声を駒の
 嘶いななきに似ていると感じて、馬の聯れんそう想そうを起した者もあつたのかも
 知れない。東京から見えている津つ久井くい地方の山村でも、水恋鳥と
 いう名は人がよく知っているにもかかわらず、別にこれをバクロ
 ノカカという俗称がある。昔ある博ばく勞ろうの女房、邪じゃ見けんで馬を乾ほ

し殺してその罰で馬と化し、終始雨ばかり待っているという話は、大よその他の地方も同じである（『相州内郷村話』）。信州の木曾きそ溪だにでもある家の馬飼童うまかいわらわが、情なまけて水を忘れて主人の馬を死なせ、それから水が火になって飲むことが出来ず、辛かううじて木葉の雫しずくをのどうる濡うるで咽のどをのど沾うるおすようになったといつて、やはりこの鳥の雨を待ち兼ねかるが如ごとき啼な声を説明している（『小谷口碑集』）。しかしそういう話も、必ずしも啼声と結び附いたものだけでない。奥州地方の馬追鳥うまおいどりを始め、馬と少年との話も色々あるのである。同じ信州でも白馬山の麓ふもとのあたりでは、その牧童は死して雲雀ひばりになつたといっている。今でもこの鳥は主人への言いわけの言葉「水ハホントニクレタンネ」という文句をくり返して、終日空に上つて

は水のありかを捜しているというから（同上）、ここでも水が飲めぬという昔話があったらしいのである。鳥は一般に雨降り前に多く啼くためか、雨の話にもまた色々の鳥が参与している。鳶とびや鳩はとが親不孝で親の墓を水のほとりに設け、雨が降るたびにその墓が流れはしないかと憂うれえて啼くという話は方々にあるが、なおそれ以外にも雨を待つという鳥の話はある。たとえば能登のとの鹿島郡かしまで六七月の頃にチーフレー、チーフレーと啼く鳥を慈悲じひしんちよう心鳥ちようだというが、その点は私には判断が出来ない。昔石崎の漁村に貰もらわれて来た子供が、毎日朝から晩まで干鰯ほしかの番をさせられ、雨が降る時ばかり僅かな間休むことが出来た。それで死んでからこの鳥となつて、いつも少し降れと啼いているのだという話になつてい

る（郡誌）。

赤シヨウビンの啼く季節は十日位のもので、雨蛙がすきで捕つて食う故に、^{ゆえ}雨の日には殊に^{こと}活躍するのだと竹野氏はいつている（『野の鳥の生活』）。これは正しい観察であろうと思うが、とにかく雨の降り出す前に立って、さも待ち兼ねたようにまた悦び^{よろこ}そぞろくように、急に声を立てる情景は感動を与えずにはいられなかつたので、自然にこういう話は成長し、また流布したものかと思われる。会津の飯豊山麓^{いいでさんろく}では、啼声によつてマメコロバシという名もあるが、普通にはこれをアマゴイドリと呼び、この鳥が啼けば雨が降るからというのは（『耶麻郡誌』）、実際は降りそうになると啼くことを意味するのであろう。利根^{とね}の上流の川場

附近でミズハカリドリというのは（川口氏）、あるいは雨降る中を飛びまわるからの名であろうが。下野しもつけの山村でミズホシドリ、またはアマガエルともいう処があるのは（『本草啓蒙』）、仮に啼声の類似から出た名であるとしても、なお竹野君の説と合致する。土佐の幡多郡はたでは方言をミズヨリ、同郡檮原村ゆすはらではまたミズヨロというそうだが（川口氏）、『本草啓蒙』には既に山城の一部でも、ミズヨロということを録しているから、近頃の語ではなかったのである。ミズヨロは多分啼声を写したもので、なお想像を進めて見れば、これにも水を悦ぶという意味が持たせてあったのかも知れぬ。

山形県の莊しょうない内地方では、この鳥をまたアマケロと呼んでお

り、ここにも例の通り馬喰ばくろうのかかあとという昔話が伝わっている（『土の香』一四号）。ケロは啼声を擬した名であることうたが疑がいがない。隣の越後でもまたシヨウビンはキヨロロまたナンバン鳥とも称し（『新潟県天産誌』）、そのナンバンはとうがらし蕃椒とうがらしのことである。三河地方でも水恋鳥はヒヨロローンと鳴くといい、岩手県南部においてもナンバンドリの啼く声は、ヒヨウロローと聴えるといつている（『東磐井郡誌』）。秋田県も一般にナンバンドリであるが、またその声によってテロロと呼ぶ土地も多く、かくのたて角館かくのたて附近ではテロロが鳴けば天気が好くなるというそうである（武藤鉄城君）。栃木県の一部にはこの鳥をキヨモリという処はたがあることを、これも『本草啓蒙』に録しているが、果して現在まで伝わ

っているかどうか。もちろんこれは平たいらのきよもり清盛が火の病ということを知った者でなければ付けられぬ名ではあるが、ここにも胸の羽が水に映って火に見えるという話が、かつて行われていたことを推測せしめるだけでなく、事によるとこれも啼声のケロロ・キョロロが、こういう異名を誘い出す元であつたかと思う。そう考へて行くと土佐や山城のミズヨロの語も偶然ではないようである。

熊本県の阿蘇あそ地方では、チヨユミドリというのがこの鳥のことらしいが、啼声が少しちがっている。近頃はもう姿を見たり声を聴いたりする折も少ないだろうから、話ばかりが伝わればこれくらいの変化は免れないのであろう。いつも川の端に多くいる鳥で、

辛夷こぶしの花の咲く頃に啼くといっている。前の生で親に偽って、飼
 牛に水を飲ませなかった者が、死んで生れ変つてこの鳥になった。
 チヨユミはその人間であつた時の名だというが、これもあるいは
 キヨモリの類かも知れない。その牛を川の端に埋めて、牛が流れ
 はせぬかと見てあるくというのは、この地方でいうアマガクの話、
 即ち前すなわに挙げたとびふこう鳶不孝の昔話との混同かと思うが、それにし
 ても雨が降ると啼くという話はあつたのである。川に沿うて下る時
 は川の音のようにゴーウゴーウと啼き、川を上るときにはキキキ
 キと啼くという点は、テロロ・キヨロロとは一致しないけれども、
 やはり川上には水が一滴もないので、下つて来るとはいつている
 のである（『民俗学』四卷七号）。どういふ鳥かということを確認

かめてからでない^{ひごごかのし}と何とも断言し得ぬが、南の山続きの肥後五箇莊^{よう}などには、三河とよく似た話が残っている。奥州南部領などでは、親不孝鳥というのが時^{ほととぎす}鳥のことであるに反して、この地方の山村では、水恋鳥を親不孝鳥と呼んでいるのである。

ナンバンドリという名の行われている区域は、北は津軽の果^{はて}にまで及んでいる。十和田湖^{とわだ}の附近ではトンガラシドリコ、日光の周囲にもトウガラシドリの異名があるのを見ると、命名の動機は赤いからであったことは明か^{あきら}であるが、北秋田の方では羽が赤いから蕃椒鳥だというに反して、東磐井郡^{ひがしいわい}では嘴^{くちばし}が真紅で蕃椒に似ているからといい、鳩より小さくして茶褐色だとあるのが(郡誌)、何だか山シヨウビンの方にも取れる。しかし啼声のヒヨウ

ロローは赤シヨウビンでなければならぬ。鹿角郡かのづのなどでも体が赤いからナンバンドリだといっている（内田武志君）。北秋田地方ではまたの名をテロロもしくはヒヨウスドリ、青森県に行くとヒドリという方が普通であった（『薄の出湯』）。ヒドリは下北半島の海近い山でも、晩春初夏に朝早くよく啼いた。色が赤いから火鳥であつたらうと思ふが、その名に伴うて不吉な聯想れんそうもあつて、必ずしも人望の多い鳥ではなかつた。津軽地方ではまた赤シヨウビンをジゴクドリあるいはケカチドリともいう。ケカチは飢渴きかつの字音から出来た語で、東日本は一帶に凶年のことを意味している。ケカチの年ばかり多くこの鳥が出るわけはないから、単にこの鳥をその前兆として忌み怖れたのが起りかと思ふ。九州

の方でも彦ひこさん山の周囲の村などでは、赤シヨウビンをニイレという方言があり、この鳥が人家に入れば死人があるといった。人家へは滅多めったに入つて来ることがなからうが、啼声を聴いただけでもその前兆であるようにいい、午前に鳴けば若い者、午後ならば老人が死ぬなどとさえいう者があつた（安部幸六氏）。ニイレという語の語義は明かでないが、沖繩諸島にはニイラ・ニライまたはニラヤという語があつて、いわゆる根の国を意味し、また竜宮の代りにも用いられる。あるいはこれもまた時鳥のように、冥土めいどの鳥ということかも知れぬ。豊後ぶんごの竹田附近にはヒトダマという鳥がある。嘴大にして赤く、羽の端には蒼味あおみがある。赤シヨウビンかという者もあるが、山シヨウビンかも知れない。神原村こうばるなど

ではこの鳥が啼けば人が死ぬといっている（川口氏）。気味のよくない話には相違ないが、鳥を霊ある者また不幸の警告者と見る例はこればかりでない。空から来る故に遠い国の使と解し、もしくは亡き人々の仮の姿とも見たので、それ故に「前生は人」という昔話が、数おおく生れたのである。奥羽各地でいうマオドリや、中部山村のニヨヒドリの類には、声のみ聴いて姿を見たことのないもの、即ち動物学上の問題でない鳥は幾つかある。それに比べるとミヤマシヨウビンなどは、日本一番の派手な鳥、緑の樹の蔭で最も目に立つ鳥で、その声もまた決して憂鬱ゆううつでないのだが、いかんせん毎年その数は乏しくなり、かつその消息があまりにも突如とつとしている故に、終には逢う人の胸を轟とどろかせ、こういう俗信

の次第に成長することを制止することが出来なかつたのである。

終りにこれは自分の領分でないが、少しばかり分類学上の赤シヨウビンを擁護ようごしてやりたいと思う。この一科の形めずらしい諸鳥は、通例カワセミ即ち翡翠ひすいを以て総代としているようだが、これは後世に入つてこの鳥のみが数多く、いわゆる赤シヨウビンが深山に隠れて、尋常でなくなつたためかと思う。全国を見渡してカワセミを意味する方言は最も数多く、あるいは水恋鳥に数倍するかと思うが、その中で殊に大きな区域で行われているのはシヨウビンの一語であり、これがまた赤シヨウビンの名の元でもある。そのシヨウビンも川せみのセミも、共に大昔のソニてんかから転訛した語音であることは、狩谷かりやえきさい榎齋の『箋註和名鈔』にも既に

つまびら
 詳かに説いている。『和名抄』の時代には曾比そび、それが『あいのう 囊抄しょう』には少微しょうびとなり、近世に入つては少鬢しょうびんともなつたが、
 なお播磨はりまでは将人しょうにん・伯耆ほうぎ・出雲いずもでは初人しよにん、備前びぜん・美作みまさかで
 は初爾しよにといつて、最初の蘇邇そにの形を遺のこしていると述べてある。今
 日の方言分布に照して見て、大体に狩谷翁の挙げた通りである上
 に、関東東北にはソウナという例も弘く、宮城秋田等のスナゴド
 リの如きも、更にそのソナから進化したことが察せられる。故に
 もし名を正すとなれば、ヤマセビ・カワセミよりもシヨウビンの
 方が古いにしえに近く、それが訛なまりとして排斥せられるとすれば、いつそ
 ソニドリと呼ぶより他はないのである。ところが現在のカワセミ
 なるものが、果して大昔のソニであつたか否かには疑うたがいがある。

『万葉集』の歌にはソニ鳥の青き衣とある故に、これで多くの人
はもう安心しているようだが、奈良朝だから間違いをしないとい
う、証拠などは一つもないのである。ソニは引離して見ればいず
れも赤いという意味しかもっていない。始めてこの語を鳥の名に
応用した時には、やはり赤シヨウビンの方の名であつたのを、形
状習性のよく似た同類に押拵めていたために、次第に青い衣の里
馴れた魚かわせみ狗が、最も多くソニと呼ばれるようになったとも見ら
れる。もしそうだとすると、元のソニは名を取られたのである。
そうして赤シヨウビンなどと二重の形容を受けているのである。
イブセンの芝居の医師ストツクマンの言い草ではないが、数が少
ないということは、何かにつけて損だと思ふ。ソニを戸ものまさ者とす

るといふ有名な神代紀の記事は、我^{わが}民族の信仰生活の歴史を尋ねる人々のために、相応に重要な史料である。喪のある家で口寄せを立てて、死霊の言を聴く風習は、今なお田舎には正式に行われている。これと同一の行事が夙^{つと}に天稚彦^{あめわかひこ}の神代にもあつたことは、僅かにこの記録によつて明かになるのであるが、その尸者が青い衣を着ていたか、または赤々と染めた衣を着ていたかは、今日の学問ではまだ知ることが出来ぬわけである。

二 行々子

近世の俳人たちに、妙^{ぎようぎようし}に行々子という鳥の名は気に入つたらし

く、江戸では殊にこれを句にした者が多いようであるが、一時の流行であつたと見えて、『七部集』などにはまだ一句も出ていない。そうして元来どこでこの文字が生れたかも、明かには知れないのである。私たちが聴いている限りでは、今の関東の田舎はほぼ一円に、ケエケエシまたはケケスというのが「おおよしきり」の方言で、静岡県に行くときヤキヤス、播磨の自分の故郷ではコチンともいつていたが、ケケスはなお近江おうみの湖畔、阿波あわの吉野川流域、丹波等たんばにもあつて弘い名称である。行々子に近い音で呼ばれているのは、九州の方では福岡県のギョギョウシもしくはギョウギョウセン、佐賀県のギョギョス、東の方では越後でキヨキヨシ、青森県の津軽地方でチヨチヨジ、それから秋田県の北部に

チヨンチヨジンまたはギョギョジという語があるのみである。最近に八郎潟はちろうがたのほとりで生れた者が訪ねて来て、いつしよに岡の麓ふもとの蘆原あしはらをあるいて、この鳥の囀さえずりを聴いたのだが、この人々ははつきりとジの音を濁にごつて呼んでいた。

行々子という名前は、まさかこれ等の遠方の土地から借りて来たものではなからうと思う。いずれ双方とも啼声から出た語には相違ないが、多分は以前多くの土地に、こういう二種以上の称呼が併存していた時期があつて、後に主としてその一つだけが用いられ、他の一方が忘れられたのであろう。『裏見寒話うらみかんわ』を見ると、古くは甲州にも割葦よしきりをカラシという方言があつた。一つだけ聴くとやや変だが、宮城県などは一円に今でもカラカラジ、その北

に続く旧南部領はガラガイシ・ガラガラスまたはガラガイデ、秋田県にもカラガラスという鴉からすのような名があり、『青森県総覧』には五種六種の地方名が列記してあつて、しかも土地によつてはその幾つかを共に知っている。たとえば西津軽郡七ツ石の子供言葉に、

チヨチヨジ、カラカラジ

竹原の雀

おらもチヨチヨジに負けねでしゃべろ

というのがあるが（『津軽口碑集』）、普通は片方ばかりを使つていると見えて、よくしゃべる者を評して、「チヨチヨジのあだまさ鈴こゆい附けたようだ」というたこととえ言が、この附近には弘

く行われている。ケケス・ケエケエシに今は統一した関東の田舎にも、もう一つの呼び方がつい近い頃までであったので、それが俳諧者流の愛用する所となると、かえって児女日常の言葉には向かなくなつたものと思われる。行々子はまことに気の利いた文字かも知らぬが、それこそぎようぎようしくて、俗衆は敬遠せざるを得なかつたろう。

以上の外ほかに、この小鳥の地方名には、全く系統を異にしたものが現在もなお二つ以上あつて、ヨシキリ・ヨシワラスズメなどというものはその一つである。享保二十年に成つた『備前産物帳』という写本に、ムギウラシ、割葦鳥ギョギヨシのことをいうと出ている。故友島村知章君の『岡山方言』を見ると、現在はムギワ

ラスズメというのが普通で、麦の熟する前に来てヒュヒュヒュカチカチカチと啼くと説明している。熟する前に啼くのでは、むぎわ麦ら藁では理に合わないから、多分二百年の間に麦ウラシがこう變化したのであろう。ムギウラシとヨシワラ雀とが融合すれば、こんな形になるのも自然である。ウラスというのは熟させることで、即ちあたかもこの鳥の声に促されては、麦がウレズにいられぬというような昔の民間曆思想の産物とも認められる。しかし若夏のようや麦漸く黄ばもうという頃に、里近くへ来て啼く鳥は他にも数多い。だから僅かばかり西に離れて芸州の高田郡などに行くと、麦ウラシは即ちすなわ雲雀のことであり（郡誌）、今はどうあるか知らぬが対岸の香川県あたりでは、かつこう郭公を麦ウラシと呼んでいたことが、

らんざん
蘭山先生の『本草啓蒙』に見えている。もつと異なつた例としては、壺岐いぎでは梟ふくろうをムギウマセドリといい、この鳥が啼き始めるとと麦がウンデ（熟して）来ると伝えている。各地の命名がこのように思い思いで、弘い一致のないということは、たとえ二世紀前の写本に出ておろうとも、やはりその頃の一種の新語であつたことを意味するものである。

ヨシキリという名なども今日は標準語に編入せられているが、それはただ文化の中心に近い地方の、近世の発案というに過ぎなかつたかも知れぬ。漢名の剖葦ぼういもあの鳴声の物騒がしく、葦あしを裂く音のようだという形容らしいから、もし偶然ばらばちよつともしろい内外の一致だと言つてよいけれども、私にはどうやらそ

れ等を既に知っていた人の、ほんやく翻譯かの如き感じがする。語韻がさつぱりとしていてかつ四音声であるということは、歌謡や語りものには都合がよいので流行も容易であつたらうが、葦をキルという語は少しばかり無理である。ヨシワラスズメという名はその前からあつて、多分ヨシキリの理解記憶を助けたのであろう。スズメという語は本来は小鳥の総称で、今でもやぶ藪スズメ（あおじ）だのカナスズメ（せきれい鶺鴒）だのという方言は多く、これを差別するためには今日の軒の雀をサトスズメ・ホクロスズメまたはマスズメなどと呼んでいる。蘆荻ろてきの間ばかりに棲すむ小鳥だから、ヨシワラスズメといったのは自然である。

しかしそれとてもまた一つの異名で、ヨシキリもムギウラシも

まだ生れなかつた以前、京阪江戸を含んだ広い日本の版図には、簡単にあの啼声を模擬したギョギョシ系統の言葉が行われていて、俳諧の行々子はただこれを漢字にしたまでの手柄であり、他の一方ケケス・カラガイデという類の多くの方言は、何も知らずにこれを保存していたのかと思う。鳥類は昔の方が数も多くまた永く続けて啼き、人のその声に耳を傾けている余裕も、たしかに今よりは多かつただけでなく、それになんらかの意味あるものと解して、名称をその間に求めようとした念慮も、古人は我々よりも遙かに強烈なものを持つていたのである。

その証拠というのも物々しいが、行々子は全国の隅々にわたつて、その名とちな因みのある一定の昔話をもち伝えている。名前が地

方ごとに変つて来るに伴のうて、話も追々おいおいに興味を薄めてはいるが、伝承の力は誠まことに恐ろしいばかりで、心を留めて見れば幽かすかながら、方々にその痕跡こんせきがある。たとえばこの鳥をココチンなどという私の郷里でも、子供の頃に父から聴いた前生譚げろうが一つあつた。昔々ココチンはあるお屋敷に奉公をしていた下郎げろうであつた。主人の草鞋わらじをたつた半足盗んだばかりで、罪せられて打首になつた。それで鳥に生れかわつて、今でもワランジカタシデクビキラレと啼くのだ云々。私にはこの昔話がいつまでも腑ふに落ちなかつた。というわけはどこで何べん聴いて見ても、何としてもワランジカタシとは聞えなかつたからである。ところが近年になつて青森県八戸市はちのへの新聞にあの地方のいわゆるガラガイシが

ジヨウリカタバラ、キラバキレ

と啼くというが、いかなる由来であろうかと設問した人があるの
で、こいつは面白いと気をつけていると、暫しばらく経つてからその
答が投稿せられた。そうしてこれが最も詳細に昔話の元の姿を伝
え、またあの啼き声を適切に説明していたのである。簡単にその
筋をいうと、昔々ある処に長興寺というお寺があつた。その寺
男が和おし尚しょうの伴をして行く途中、主人の草履ぞうりを片一方落してしま
つた。それが不埒ふらちだといふので打首になり、下男は死んで行々子
になつた。それ故に今でもこの鳥は

チヨコウジ、チヨコウジ

ゾウリカタアシナンダンダイ

キラバキレ、キレキレキレ

と啼くのだという。もちろん最初にはあの啼声をこう聴いて、次々にこの説話をまとめ上げたものであり、言わば第一次の話し手は鳥だったとも言えるのだが、それにした所で不思議なのは、同じ言い伝えが中国の村里にも及んで、なお履物はきものの片足という点を、失わずにいたということである。しかもこれがただ南北二箇処だけの一致であった場合は、また何とか手短かの解釈も出来るが、後々気をつけていると中間の例はまだそちこちにある。たとえば羽後の仙うご北せんぼく地方では、この鳥は

常光寺常光寺

ケエズケエズ

と啼くといい、文句は忘れてしまっているけれども、お寺の名だけがよく似ている。栃木県の一部にも、たしかまた草履を片足盗んで斬られたという話があり、顛末てんまつは少し入組いりくんでいたが、寺の名は長松寺とか何とかいっている。捜したらまだまだ見つかることと思うが、東京近くの武州保谷村ほうやでも、

ケエケエズケエケエズ

坊主の頭でクルクルクル

と啼くといって、依然としてなおお寺との縁は切れない。

もつと変った例では同じ南部領でも九戸郡くのへ及び上閉伊郡かみへいの一部分に、割葦はその前生に不品行な娘だったという、少しばかりオブリインな昔話がある。萱原かやはらの中に寝たために萱の葉で尻を切

り、それで今でもイテテテと啼いて、そういう処を飛びまわるのだという笑話であつて、殺されたのではないが切つたという条はなお残っている。これなどはほんの思い付きに、田舎の曾呂利そろりが
みなみかんばら
 南蒲原郡の子供言葉に、剖葦の鳴声だと言つて、それと三分二以上同じものが伝わっているのみならず別にまた屁へひり爺の昔話の一変形として、小鳥が娘の腹に飛び入つて、そういう唄を歌つたというものも採集せられている（『昔話研究』二号）。こんなたわいもない戯れごとまでが、なおその発端を遠々しい昔に持つていたのである。

私の行々子観は次の通りである。この言葉は現在にはほぼ俳諧者

流の専売の如くなっているが、それがかつてこの小鳥の普通の名であつた時代は相応に遠くまた久しく、ちやうど我々の間に説話の叙述法が、自由な躍進を許された時代と重なつていた。人は小鳥が前生を啼いて語るといふ、古い信仰にはなお囚とらわれていながら、それを出来るだけ奇抜にまた写實的に、話して見ようといふ努力をしていた。あの一風かわつたヨシキリの声によつて、下郎の絶望した斬れ斬れ斬れの罵ののしりの語を空想し、更にありそなお寺の名を取添えて、一場の哀話を組立てたなどは、これもまた日本特産の中世の大衆文芸であつたらうと思ふ。

梟の啼声

「家の光」の編輯者へんしゅうしゃから、何か夏の晩の椽えんさき先などで、子供や女たちといっしょに読んで面白いような、話はないかという相談を受けた、それは幾らでも捜したらあると思う。

しかし話は長くなってしかたがない。私は今非常に用が多い。だからここには問題だけ出して置こう。この雑誌の読者は何万人

とあるはずだから、その中から追々おいおいに跡を継いで話をする
ことにしたら賑やかにぎでよかろうと思う。そうしてもし自分の誤まつて
いる点などが、そのついでを以て訂正もつしてもらうことが出来たら、
学問のためにも大きな利益である。実際子供たちの話から、我々
の学び得ることは多いのである。そこで先まず最初には梟ふくろうの話をし
て見よう。

自分たちは今ちようど日本語の歴史を考えている所である。千
年以前の日本語と、今日我々の使っている言葉との間には、かな
り著しい変化がある。それがどうしてこのように変ったかを説明
するには、やはり一つ一つの物の名から始めて行かなければなら
ぬ。それがまた随分ずいぶんと興味のある仕事なのである。その中でも

鳥の名は最も久しい間、田舎に住む少年たちの面白がる題目であった。そんなものを忘れてたり考えて見なくなったりすると、てき面に村の生活が淋しくなる。だからそれを思い出すことは、一つの大なる復興にもなるのである。

そういう理屈はどうでもいいとして、梟の昔の日本語はツクであった。それがいつの間にかフクロウと変っている。どういう事情からそう変化したかというと、じつとあの鳥の啼くな声を聴いているうちに、子供たちが誰いうとなく、この名を採用することになって、それに大人も反対をしなかつたものである。鳥とか虫とかの名前は、大抵たいていはこうした簡単な理由から出来ているが、それが古くなって意味が少し不明になる頃には、子供はまた新らし

い次の名をこしらえて、彼等仲間の話の種にするのである。

大人には到底とうてい考えられぬことだが、あれは何と言っているのだらうかという疑問は、今でも鳥や虫に対して子供が持っている。つまり閑ひまが多いからでもあらうが、耳を澄ましていつまでも聴いていると、後にはその言葉がきまつて来て、外ほかに解釈のしようもなくなつてしまい、それが自然に名前ともなれば、またこれに伴なう唄にも話にもなつて来るものらしい。

实例で説明するならば、東京の附近から信州北国にかけて、梟の啼き声が

ノリツケホーセ

と聴える地方はいたつて弘い。そうして子供はこの鳥の名を、ノ

リツケとも呼んでいるのである。あしたはお天気だ、洗濯物に糊のりを付けて乾ほすによい日だと、教えてくれるように想像をしたのが、実際はしばしば雨降りのこともあつて、そんな予報が当るはずもない。そこでしかつめらしく説明をして、ノリスリオークと啼く時が晴天、ノリトリオーケと啼くときが雨天などと、ちよつと聴くとなるほどそうかと思うようなことを言つた人もあつたが、あれは大人の冗談というもので、子供たちはそんなことまでは考えない。

つまりは鼻の啼き声が二段になつていて、ホホという高い声の部分が、何だかホーセとも聴えるので、その他の低い声のぐずぐずとした部分を、糊付けとでもいうのだろうか、想像して見た

だけである。著物きものを洗つて糊を附けて著ることは、随分古くからの我々の風習らしいが、百姓の衣類の麻糸が細くなり、または木綿で織つたものを用いるようになって、その風が非常に盛んになつたのはやつと二百年ぐらい前からの事である。故ゆえにこういう意味に梟の声を聴くことになつたのも、そう古い話ではないように思われる。

富山県の田舎には、ノーツキホーホと啼くという処もある。仙台などではノラスケホーホと啼くといつてゐるそうだ。ノラスケは多分なまけ者ということであろう。昔から梟のホーホは、人を馬鹿にしたような声に聴えたと見えて、こういう種類の解釈をして、面白がった例が幾らもある。一人で林の陰の暗い路などを還かえ

る者はやや敵意を含んだようなホーホを聴かされると、腹が立つよりはむしろ心細く感じたかも知れぬが、村にいて多くの人と共にこの声を聴く子供ならば、誰かそこらに梟にひやかされてもよいような、ノラスケがいるものと想像して、おかしがってこの声を聴いていたことと思われる。

伊勢から三河・遠州の方面にかけては、この鳥をゴロスケと呼ぶ村が多い。そうしてあの啼声を説明して

ホーホ

五郎助どうした

酒でも飲んだか

と啼くのだと、教えてもらっていた子供もあつた。もちろんそん

な長たらしい啼きようはせぬのだが、ホーホと五郎助だけではま
だはつきりとせぬ故に、子供を愛する年よりなどが、おどけた通
弁をしたのであった。大抵の子供はこれを聴いて、笑つて夕方の
淋^{さび}しさを忘れたであろうが、親がそんな事も考えずに、五郎助と
いう名を付けてくれた少年だけは、きつとそのたびにいやな思い
をしたことであろう。

静岡県の方では、梟のことをある村はゴロスケといい、また他
の村ではゴロシチともいつている。

五郎七ほうこう

ただ奉公

と啼くという話もあった。あるいはこの鳥をゴロツチヨともいう

処がある。また千葉県から茨城県へかけてはゴロットホーコーと啼くと子供たちはいう。多くの農民の子弟は学校へ行く代りに、奉公に出て働くのが近い頃までの習いであつたから、梟もやはりそういう啼き方をしたのである。岡山県の西の方へ行くと

ぼろ着て奉公しよ

という歌がある。幾ら貧乏人の児でも始めて奉公に出るときには、少しはさっぱりとした著物を著て行くのに、それをひやかしてこんなことをいう。だから梟は子供たちには好かれなかつたらしいが、実際はあの喉を鳴らすような低い声が、何だか五郎七・五郎助といい、または檻ぼろ著てという風に、聴えたのだから仕方がない。

栃木県の宇都宮附近では、梟のことをボロスケといい、またその啼き声をボロキチといっている。それから西の方へ行つて見ると、和歌山県から徳島県、香川県広島県などではこの鳥の名をフルツクといい、

フルウツクの子

糊をすり置け

あすは日より

と啼くなどともいつていた。ツクというのは古くからの名だが、あれもやはり啼き声から出たものかと思う。その他茨城でもホロスケといい、山口県の大島でボロコキといい、筑後の柳河やながわでゴロクソというなどは、いずれも皆同じことであろう。大島のボロ

コキはボロキテトウコイ、破れた衣物で早く来いと啼くといい、筑後ではゴロクソヘーゾ、すなわ即ち何だか平造という人を、馬鹿にしたような啼き声である。

だから私はフクロウという名前も、元は自分で啼き始めたものと思う。名古屋の近くの人はこの鳥を、ホクロクという。秋田県でも男おが鹿半島ではフクログと呼んでいる。何かそれ相応の文句があつたのであろうが、私はまだ聴いておらぬ。東北でまた梟のこ

モホ

秋田県大館おおだて

モオドリ

青森県弘前ひろさき

オーホ

岩手県盛岡

などというのは、これもまたホーホという高い声の形容である。それを他の国で何と知っているかと尋ねて見ると

コヘイドリ

栃木県

ゴヘイ

茨城県一部

コウゾウ

福岡県

ドウコウ

佐賀県

コオズウ

大分県

コウゾウ、コウズウドリ

熊本県

などというのが多く、いつでも梟はその声を聴いて怖ろしがるよ
うな、小僧たちの名ばかりを喚よんでいたようである。鹿児島県に
も色々の名前があるが、小さい子供のだだをこねる時などは、

「この人取って食おう」と啼くという説もあつて、だから梟のことをトツクオとも名づけていた。

諸君の田舎にはまだ色々の名前があり、歌があり話があることと思う。私の生れた中国の村では、以前は梟のことをコジヨロと
いつていた。そうしてあの啼き声を

コジヨロ

戻つてねんころせ

というように解していた。小女郎というのは小さな女の児のことである。もう夕方になつた。家に還つて寝よかえということをし、昔の人はこういつたものらしいので、他の地方に比べると甚だ上品な、はなはかつ心のやさしい梟であつたと思つてゐる。コーゾーといつて啼

いたという村でも、多分は必ずしも取って食おうというような、怖ろしいことばかりは言わなかつたものと思う。

以前の子供はまだ色々の話を知っていた。それをもう覚えていゝる者がなくなつて、名前ばかり残つたのである。一体この鳥は巢を作るのが面倒で、大木のうつろの中に寝るのだけれども、冬の晩は寒くて仕方がないから、「夜が明けたら巢作ろう」と啼いてゐるのだという話もあつた。そうして朝になると忘れてしまふともいつている。即ちフクロウをツクロウと聴き取つて、こんな想像をした子供もあつたのだ。それから推測すると、次に挙げて置く梟の異名にも、必ず何かこれに伴なう歌があり、また話もあつたことと思う。それを知っている人がまだあるなら、今一度子供

たちに話して聴かせたらどうであらうか。

キドジユ

鹿児島県

コーキチコイ

島根県美濃郡みのの

キロク

岐阜県山県郡やまがた

ボンスケドリ

滋賀県野洲郡やす

オクンボ

静岡県志太郡しだ

トリオイ

三重県白子しろこ

九州の鳥

一

多くの友人は笑って信じなかつたけれども、私は今でも九州の鳥の言葉が、少しばかり東国とちがっているように思っている。たとえば球磨郡くまの五木いっきでは、終日雨の旅宿うぐいすで鶯うぐいすの声ばかり聴いて暮したことがあったが、ホケキヨと三音に鳴くのは二十回に一度

くらいなもので、普通はきまつて四声ずつ続けていた。時鳥ほととぎす

なども始めに間を置いて二音、それから例の「かけたか」を言うのが、関東の方では当り前となっていたのだが、この節東京郊外の私の村などを啼ないて通るものは、それさえ節約して大抵たいていは

「かけた」きり、時にはキヨキヨとただ二音だけで行つてしまふ

ような気の早いのもある。ところが九州では大隅おおすみ・日向ひゆうがの海

岸で、里のはずれのアコウの木の高い梢こずえなどに、腰をおろし悠々

と啼いていたものは、いずれもよく聴いていると五音であった。

これはあるいは樹にいる場合と、空を飛ぶ折とは感情が別なのかも知らぬが、以前日光の山の寺で、庭の木に来てうるさいほど啼いた時にも、やはり関東の時鳥は四音にしか啼かなかつたことを

思うと、今では既にまた土地土地の、彼等の方言が出来ているらしいのである。

鳥の言葉にも地理があり歴史があることは、我々はつとに家々の鶏においてこれを経験している。チャボと名古屋交趾コーチンとを並べて鳴かせて見ても、神代の常世とこよの長鳴鳥ながなきどりの声音を、想像することはむづかしい。単に生れが異なる故ゆえにその声がちがうとすれば、時を同じくせぬものの間にも、また若干の変化はある方が自然である。現に今日はコロクと鳴く鴉からすも少なく、カケロとうたう鶏などは探してもいないのである。都の時鳥もヘドトギスの狂歌の出来た頃までは、まだ南九州の如く克明ごくとに我名わがなを啼ないでいたかも知らぬ。仮にそうだとすると約そむに背いたのは彼等であつて、古

人の命名法は必ずしも不精確ではなかつたのである。

二

私などの生れた中国のある村では、梟ふくろうの名はコジヨロであつた。それはあの鳥が初夜近くなると、「小女郎、戻つて寝んころせ」と啼いて、遊び浮かれています小娘をからかうというのだが、話ばかりであつて終ついにそういう風に聴きなす折はなかつた。梟にも何か面白いな「ぐぜり」のあることは事実だけれども、通例はその声が非常に低く、夜深く背戸の樹にとまって枕元で啼くような家でないと、それまでを記憶することが出来なかつたのである。だ

からあのホーホという大きな声ばかりに、色々の意味を持たせて聴くようになった。例えば「糊のりつけ」という名は、ホーセー（乾せ）と聴いた人たちの想像で、それからまた「あすは天気」と鳴くのだとまでいった。関東東国の村の子どもが、これを「奉公」と聴いたのは哀れであつたが、それに伴つて五郎七少年ごろうしちの身の上話などが、空想せられたのは面白いと思う。九州ではやや弘い区域にわたつて、この声をコーゾーと聴くのが普通であつた。

小僧、鼻くそくうかあ

こういう幾分か教訓味を帯びた、軽いちようしやう嘲笑ちやうしやうに解釈した土地もあつたけれども、終始は意地の悪い、殊ことに子供を嚇おどそうとする鳥として、わざと家庭用に残して置いたかと思ふ地方が多かつた

のである。

これが当世の童話文学なるものの、一の起原であつたらうといふ想像は、もう恐らくは多くの人が抱いていることと思う。子供は梟が何と啼くかを教えてもらつて、決してそうかと言つて黙つてしまうものではない。必ずその後から「なあぜ」と「どうして」を連発して、満足するまでの説明を要求する。そうなると親たちはうろ覚えの中から、半分は手製の昔話を持出し、ないしは即興の一篇を創作して、それが傑作ならば永く後代に伝わることもあつたかも知れぬからである。しかも自分などの驚いているのは、そういう思い思いの咄嗟とつさの趣向かと思ふ昔話に、なお見遁みのがし得ない共通の動機のようなものがあつて、それが殆どほとん日本の全国に一

貫している事である。単に頑がんぜはない聴衆の好奇心を充みたすためならば、入って行く必要もなかったらうと思う説明に入っていることである。これには何か隠れたる約束があるのではないか。即ち天すなわ然はむしろ各地の鳥の言葉を、ちがった聴きように誘おうとしているにかかわらず、歴史はいつも根強い暗示を以て、我々の解釈を一方に引付けているのではないか。もしそうだとすれば童話そのものの今日の定義は、当然變つて来なければならぬ。私はこの推測の當っているか否かを知るために、今まで意外に顧みられなかつた九州の鳥の昔話が、これから諸君の努力によつて採集せられて来るのを待っているのである。

三

梟は何と言って啼くかという問題は、今から四十年も前に「日本」という新聞で、その答を全国から募集したことがある。この鳥の地方名は大抵は啼き声が元で、中国と四国とはやや弘い区域にわたってフルツクであるが、一たび九州に入ると殆ど土地ごとに名が違っている。比較的多く行われているのは小僧鳥であるが、それでも「鼻くそ」を「かなくそ」といつて見たり、また「かれくそ食うか」という処もある。肥前ひぜんの南高来郡みなみたかきの一部などでは、
こーぞーかれ草食うか

というそうで、これに伴うて鳥と小僧との童話があつたという

が、長崎はもう別で、

コーぞー、この月やどーかー

といい、すなわちまた金貸の霊、死して梟となるといふ昔話があったのである。これと同じような例はまだ幾らもあつて、それを並べて見るときつと面白いのだが、余り話が長くなりそうだからここには割愛する。独り梟ひとという一種の鳥だけに限らず、九州は全体に他の地方と比べて、鳥の昔話が豊富であるように思われる。豊富ということは村と村、もしくは家と家との間にも言い伝えの変化があることで、前にもいふ通り、話の基調までが別なのではない。これは恐らく輸送が古く行われ、保存が久しく続いたことを意味するので、仮に最初から各地独立して発生したものであつ

たら、かくまで一致しているはずがないわけだ、と私は思っている。

いずれの民族においても、動物の説話は最も古く、従つてまた出^{でどころ}処原産地の確かめ難いものとなつている。實際日本でもいかなる種類の人が運搬したものか、これほど全国的な鳥の話が、今ではすべて実生^{みば}えの如く、村々の土と結び付いているために、あるいは大昔一つの炉にあたつていた時からあつたのを、持つて別れて来たようにも考え、あるいはまた偶然に人の空想が、一致したように想像している者もあると思うが、それは両方とも証拠の入用なことであつた。人によつてはまたこれと反対に、何でもかでも昔話と言へば、すべて説教僧が法談の資料に、持つてあるい

て残して行ったものと、思っている者もあるらしいが、これも簡単に承認し難いことである。

もちろんこれだけの一致は偶然というわけには行かぬが、同時にまた地方ごとに必ず少しずつの変化を見るということも、やはりまた隠れたる原因があつたのである。その原因を発見するためには、何と言つても事実をもつと多く、集めて見ることが順序である。ところが自分たちは遠方に住んでいて、そういう機会が得にくいのかも知れぬが、今まで一向いっこうに九州の鳥の話をお聴いていない。たまに珍めずらしい「鳥の言葉」があるので、どうしてそういうのかと子供らしく尋ねて見ても、私も知らぬと言つて、殆ど答えてくれた人はないのである。あるいは九州の諸君が殊ことにこうい

う昔話を、下らぬことだと考えておられるのかも知れない。もしそうだとするとほんとうに忘れてしまわぬうちに、決してその採集が無意義でないことを、話して見る必要があるかと思う。昔話を最も多く持っている鳥は時鳥、それに次では梟であるけれども、余り長くなるからこの二つは後まわしにしよう。そうしてもう少し簡単なものから、段々に比較を進めて見ようと思う。

四

この類の昔話は、妙にいつまでも心の底にしみ込んで消えぬものである。年を取ってから思い出す機会の多いものである。それ

には相当の理由があるのだが、普通は自分だけがそうなのかと思つて、話し合う者が少ないのである。耶馬溪やばけい附近の人ならば皆知つて、話しかうと思う。あの地方の山で初夏の夕方に、淋さびしい声で啼く獵師鳥という鳥がある。東の方では何という鳥であろうか、ここでは「獵師来い、黒来い」といつて啼く故に、獵師鳥というのだといつてゐる。昔々春の末にある一人の狩人が、黒いぬという狗をつれて狩に入り、彦山ひこさんに近い山の中で鹿を見つけた。それが彦山権現の神鹿であることを知らずに、七日七夜の間追ひつゝ終ついに射留めることが出来ず、その鹿も獵師も狗も、共に疲れて平田の岩屋という処まで来て倒れてしまった。獵師には美しい孝行な娘があつた。毎日毎日父の行くえを捜して、山中を尋ねまわつ

ていたが、悲歎の余りに発狂して父と狗との名を喚びつづけて死んでしまった。それから毎年その季節になると、この鳥が出て来て「獵師来い、黒来い」と啼くので、娘がその鳥になったといい伝えるようになったといい、誰でもこの鳥の姿だけは、見たものがないとも言っている（『郷土研究』三卷六号）。その神鹿の蹄ひづめの痕あと、及び犬岩・握飯岩などの遺跡もあると言うから、とにかく土地では実際あったこととして伝えていたので、化して鳥となる点はいわぬけれども、かつて井上哲次郎氏の作として有名であった「孝女白菊」なども、あるいはこの昔話を現代化したのではなかったかと思う。

今日の人の考えからいうと、せっかくこのような美談を伝えて

おりながら、石になったの鳥に化したのと、信じ難いことを付け添えたのは不本意かも知れぬが、実際はその方が元は主であつた。山に奇妙な形をした石がなく、また夏ごとにこの鳥が啼かなかつたならば、この一話の永世に伝わらなかつたのは固もとより、あるいは最初からこれを説く者もなかつたかも知れない。事蹟はそれほどにまで遠い幽かすかな記憶であつて、ただ年々の鳥の声ばかりが、現実に人の心を動かしておつたのである。けだし九州には土著どちやくの久しい山村も多いことだから、同じ話はなお色々の変化を以て、阿蘇あそや山国やまくにだに谷以外にも行われているに違いない、それを比べて見れば必ず新たに心付くことがあるうと思うが、その仕事はまだこれからである。そこで私は試みに遠く離れた土地の例を引いて、

この想像の必ずしも空なものでないことを認めてもらおうとするのである。

東北には特にこの類の鳥の話が多い。その一つは南みなみ会津あいづの山々に啼くモナクナ鳥、これなども啼く声がちがうから別な鳥だろうと思うが、やはりまた父を尋ねに行つた獵師の話になっている。昔この辺の村に老いたる狩人があつて、元七・黒七という二人の子供を持っていた。父は山に入つて大岩に打たれて死んだのを知らず、その二人の子が山へ探しに出て、これも終に還かえつて来なかつた。その魂こんばく魄が化して鳥となり、今でもモナークナーと啼いて山中を飛びまわるといつている。モナクナは即ち元七・黒七の呼名らしいから、あるいは父の方が子を尋ねているのかも知れぬ

が、話はとにかくこう伝わっている（『話の世界』大正九年六月号）。人が鳥になることが実際はない事だとすれば、少なくともある一つの鳥の話の話を聴いて、親子相慕うの情を聯想する習性が、北と南との住民に共通していたという、証拠にはなるのである。

五

しかもその中間にも飛び飛びの例があるから、単なる偶然の一致とは言われないのである。瀬戸内海では讃岐さぬきの小豆島しょうどしまなどにおいて、梟のことをヨシトクといっているが、これにも半分まで同じ話がある。昔ある村に母と二人の娘が住んでいて、その娘の

名は姉がヨシ、妹がトクであつた。ある時大水が出て二人の子の姿が見えなくなり、母はそれを悲しんで死んで鳥となつた。今でも夏の夜が来ると、每晚暗い中からヨシトクと呼ぶのは、その母親のなつた鳥であるという（川野正雄君、『小豆島民俗誌』）。

都会の地に住む人々は、今ではもう闇夜や黄昏時たそがれどきの淋しさを理解せぬと同時に、人を喚ぶという声を聞く事が稀まれになつたが、

以前の生活にはそれが通例であり、また最も大切な耳の働きでもあつた。そうして宵よいあかつき 曉のいたつて静かな時刻に、村里近くま

で啼きあるく鳥の言葉は、妙にこの人を喚ぶ声と、間拍子が似ておつたらしいのである。それが恐らくは我々をして耳を傾けしめ、何か簡單なる日本語を、その中から聴き出し得るように、思わせ

た一つの原因でもあろうが、まだそれだけでは親を尋ねる子、もしくは子を失つて悲しむ親の話の、かように流布する理由を説明し難いのである。もつとも土地によつて必ずしも親子の關係とも限つていない。例えば『遠野物語』においては長者の娘、男が山へ行つて還つて来ぬのを慕うて、化して鳥になつてオットーン、オットーンと啼きあるくという口碑こうひを載せ、薄暮に深山の中でこの声を聴くと、限りもない哀愁を催すと記している。同じ地方にはまた馬追鳥うまおいどりという鳥もあつた。昔ある長者の家に奉公して、馬飼をしていた少年が、山に多くの馬を放して夕方連れて戻ろうとすると、一匹だけどうしても見えない。それを心配して夜どおし山の中を探しているうちに、これも鳥になつて今でもアーホー

・アーホーと啼きあるくといっている。つまりいずれも皆その声の鳥なることを知りつつも、何か人間の悲しい言葉であるかの如く、解せずにはいられなかつたことは一つである。

遠野の馬追鳥は時鳥に似て少しく大きく、羽の色は赤に茶を帯び、肩には馬の手綱のような縞しま、胸のあたりには馬の口籠くつこに似たる紋様があるという。アーホーはこの地方の牧童が馬を集める喚び声であつて、他では必ずしもそうは言わぬから、他処よそではもうその話は通用せぬわけである。ところが何かわけのあることと見えて、妙に馬を失つたと言ういい伝えばかりが、方々の田舎に鳥の声と伴なつて残っている。九州でもあるいはそうでないかと思ふが、自分はまだ一向に聴いていない。中部日本ではいわゆる北

アルプスの麓ふもとの谷に、雲雀ひばりは元馬飼であつたという話がある。馬に水をくれなかつたのでその馬が死んだ。それで自分も死して鳥となり、空高く上つて常に水の在処あつかを探している。そうしてその啼く声は、ミズハホントニクレタンネと、いうのだとも語られてゐる（『小谷口碑集』）。同じ信州でも木曾川の流域に入ると、これがまた水恋鳥みずこいどりの話になつてゐた。水恋鳥は前生馬を乾ほし殺した罰で、鳥になつて一生水に恋い焦がれて飛びまわらねばならぬ。せつかく流れや水溜りを見つけても、自分の胸の毛の赤い色が水に映り、火のように見えるので飲むことが出来ない。それ故にいつも空に向つて雨を喚んで啼くのだといつてゐる。武蔵に接した相模さがみの山村においてもこの水恋鳥を「博ばく勞ろうのかか」とい

ている。昔この鳥は邪じやけん見な女で、夫の留守に水もくれなかつたために馬が渴して死んでしまった。その罰で鳥になつたと言つて、それから後段は木曾と同じ話である（『相州内郷村話』）。

六

全体に夕方や雨の前に啼く鳥の声は、何となく物悲しく聴えるものだが、殊ことに水恋鳥のヒヨロロンヒヨロロンと啼くのは、あの世のたよりのように感じられるという人が多い。それだから自然にこの類の話も出来たのであろうが、不思議なのはこの馬を粗末にした報い、そうでなければ親不孝の罪でという風に、原因がお

およそ定^{さだま}っていたことである。三河の長篠^{ながしの}の古戦場に近い村にも、水恋鳥は前の生は女で、馬に水を遣^やることを怠^{なげ}つたからという話があるが（『三州横山話』）、人によつてはまた姑^{しゅうとめ}を虐^{やくた}待^いした悪い嫁であつたともいつており、僅^{わず}かに雨露によつて渴^{かわ}を凌^{しの}ぎ、常に水恋しと啼くといふことは同じである（『郷土研究』二巻七号）。それから北の方の山村に入つて行つても、親に死水を与えなかつた罰で、鳥になつてから自分も水を飲むことが出来ぬという話は、なお弘く行われているので（『旅と伝説』二巻一号）、恐らくこの鳥が雨の前に鳴き、また胸の毛が火のようであつたという以外に、あの啼声の中からも、以前は幽界の言葉を聞いていたものかと思われる。

しかし話は必ずしも鳥の言葉に基づかず、むしろ我々の聴きよ
うの方が、話によつて色々に変つて来たことは、梟や時鳥の例を
見てもよくわかる。親に不孝な鳥という昔話なども、鳶とび・燕つばめ・啄き
木鳥つつきその他多くの鳥類いきに行わたつて、ただ啼き声だけが變つた点
であることは、雲雀や水恋鳥の馬を殺した話も同じであつた。つ
まりはかの

父母の頻しきりに恋し雉子きじの聲

という俳句のように、とかく夕暮方の鳥の声を聴くと、自然に胸
に浮ぶ感情には、夙はやくから定つた型の如きものがあつたらしいの
である。

近頃私の聞いた青森県八戸はちのへ附近の口碑に、山鳩やまばとの啼く声は

テデコーケー、即ち「父よ粉を食え」と啼くのだという話がある。昔々ひどい凶作の年に、父は山畑すきこふに鋤踏みに出ており、母は家いりむぎにいて炒麦の粉を搗ついた。それを子供に持たせて遣やつた所が、途中の小川を渡ろうとしてその粉をこぼし、それを川の雑魚ざこが浮いて来て食った。子供は面白いので今度はわざと少しこぼすと、雑魚がもやもやと浮いて来て食つてしまう。またこぼすとまた来て食う。そんなことをするうちに時が経って、哀れ父は餓うえて山畠で死んでしまった。少年はこれを悔い悲しんで、たちまち山鳩になつたというので、今でもその季節が来るとこういつて啼くと伝えられている（『奥南新報』）。

テデコーケー、（父よ粉を食え）

アツパーツーター（母が搗いた）

この一つの例だけを見ると、誰しも話はあるの山鳩の鳴く声によつて、思い付かれたものと考えるのであるが、実際はそうでなかつたのである。全然同じ話というわけではないが、これとほぼ似通うた話は、郭かつこう公についても語られている。たとえば甲州の精しょう進湖ようしこに近い山村では、カツコウ鳥はもと悪い継母ままははであつた。どうかして継子を苦しめようと思つて、ある日山畠へ麦刈に行つている処へ、子供が弁当を持って来ると、上へ登れば下の方に行き、降りて来ればまた上の方へ行つていて、早く持つて来ぬかと何度も叱るので、しまいには疲れきつて子供は死んだ。その罰で鳥になつて毎年麦を刈る頃、山畠の附近を上下し、八千八声まで

啼かぬと口に蛆うじがわくということである（『甲斐昔話集』）。紀州こうやの高野の麓ともしづちの輶ともづち淵村あたりでは、昔木樵きこりがあつて三人の男の子を持つていた。母は継母でその子たちを憎み、ある日弁当を持たせて父のいる山へ遣り、そつと路傍に隠れていて三人を谷へ突き落してしまった。父はその子を探しに日の暮まで、山の中を尋ねまわり、終に郭公という鳥になった。それだから今でもワコーワコーと啼きつつ淋しい山の中を飛んであるのだと伝えている（『土俗と伝説』）。そうなると全く南会津のモナクナ鳥や、豊前の山奥の「獵師来い黒来い」と同じ話の土地ごとの変化であつたのである。

七

太平洋に面した東上総ひがしかずきの村々で、クラッコ鳥といっているのも、やはりこの郭公くわくこうのことであつたらしい。昔おくらという女がただ一人、田の畔くろに幼児を寝させて置いて田の草を取っていると、不意に驚わしが来てその子を攫つかんで飛んで行つてしまった。驚いて跡を追うたが尋ねようもなく、自分もそのまま鳥になつて、毎年夏になるとクラッコクラッコと、啼きつつ山や野を飛びまわる。この鳥の足が片方は黒く、片方は白いのは、よごれた股ももひき引を半分脱ぎかけたまま、飛んで行つたからであるという（『南総の俚俗』）。おくらが自分の子をクラッコと喚んであるくのも妙だが、

この話は決して突如として始まったものではなかった。隅田川・桜川・柏崎^{かしわざき}・三井寺等^{みいでら}の十数篇の謡曲を始めとして、近くは駿州の姥ヶ池^{うば}、下野足利^{しもつけあしかが}の水使^{みずし}の淵、または仙台の小鶴が池の伝説の如く、子を失った親の悲しみを取扱った民間の文芸ほど、久しくもまた力強く、我々の心を支配したものはなかったのである。その中でも驚がつかんで遠くの国まで、連れて行った子が成長したという昔話などは、次々形を変えて千年以上も続いている。それを忘れかけてはまた幽かに思い出し、そうして新しい話に語りかえて行く機縁が、やはりこの折々の鳥の声であったとすれば、人間は決して書物に書き誌^{しる}され、もしくは学者に説明せられることのみによって、祖先の思想感情を相続していたのではなかった。

いかに時代が進み人の心が改まっても、到底とうてい絶ち切れない親子の縁、生を隔てて相思う骨肉の情愛の如きは、むしろこういう天然の記録によつて、文字を解せざる万人に読みかつ嘆かれていたのである。

殊に郭公や時鳥は、親を慕い子をおも懐わしめる鳥であつた。昔の「はこ鳥」という簡単な言葉の中にも、人を動かす深秘の意味があつたかと思うが、箱と信仰との関係などは、むしろ訓話くんこを業とする学者のこうきゆう攷究に任せて置いた方がよいと思う。それから転じてまた「はやこ鳥」という名も出た。かつて夕暮方に幼児を背に負うて、山路を行く若い母があつた。早来はやこ・早来と啼く鳥の声を聴いて、悲しく怖ろしく道を急いでいると、いつの間にかその

背の子が死んでいた。これは『藻塩草』もしおぐさという本にある話で、多分知っている人も多いであろう。近世の例としては菅江真澄翁すがえますみの日記、若い頃尾張で聴いたといつて次のような話を載せている。五つか六つになる男の子が、人に負われて物詣りものまいに行く路で、頻りに時鳥しきの声を聞いて一人で笑っている。どうして笑うかとはたの者が問うと、あの鳥が「ととさへ、かかさへ」と啼くからというので、つれ立つ者もいっしょになって笑ったが、その子はほとんどなく麻疹ましんをわずらって死んだと言うことである。多分はもう親のない児であったのであろう。支那でも時鳥を蜀帝しよくていの魂という伝えがあるために、日本の「しでの田おさ」はその翻譯ほんやくであろうという人もあったが、なんぼ翻譯ほんやくずきの日本でも、こんなこ

とをまで訳して見たところが、弘く平民の間に通用するはずがない。おまけに我々の昔話は、時鳥ばかりか郭公の方にも及んでいたのである。この二つは共に夕暮に鳴く鳥ではあるが、一方は高い樹に住んで空を飛ぶ故か、今でも都市に近づき文学に親しみを持っている。郭公はこれに反して低い林に遊ぶ性質があつて、もう私たちの郊外の村にも段々と少なくなつた。そうしてこの二種類を混同する説が、古くから行われていたのである。

翡翠の歎き

一

杉村楚人冠すぎむらそじんかん氏は、巢箱主義の新たなる使徒である。彼の我孫あび子この村莊そんそうは園は森林の如くごと、晴れたる朝に先生斧おのを提げて下り立ち、数十本の無用の樹を斫り倒すと、その中に往々にして自然の鳥の巢を見出すという実状なるにもかかわらず、更に邸内さくらに総

計十二箇の巢箱を配置し、その箱の板にはヘットなどを塗り附けて、いとも熱心に雀すずめ以上の羽客を歓迎しているのである。吾人窃ごしんそかに憂うれうらくは、昔国中の牢ろうにん人が競うて大阪城に馳はせ集まつた如く、いやしくも空中の音楽師の自由なる者の限り、ことごとく湖畔の白馬城に身を投じて、いよいよ以もつて浮世の金網と鳥籠とりかごとの束縛を、必要とするに至るなきか。すなわちまたこの際巢箱の全国的普及を、切望して止まざる所以ゆえんである。

ただし幸いなることには、小鳥に対する先生の好意には、著しい厚薄こうはくがある。その愛憎には若干の偏頗へんぱがある。カワセミという奴ばかりは、實際困るのだといっている。巢箱の大屋さんから、あの飄逸ひょういつなる尻尾しっぽのない鳥だけが、疎うとまれているのである。

それはまたどうしてかと尋ねて見ると、池に飼つてある魚を狙つて、始末にいけないという話であつた。

二

水豊かなる関東の丘の陰に居住する者の快樂の一つは、しばしばこの鳥の姿を見ることである。あの声あの飛び方の奇抜きばつなるは別として、その羽毛の彩色に至つては、確かに等とうりん倫を絶してゐる。これは疑う所もなく熱帯樹林の天然から、小さき一断片の飛び散びちつてここにあるものである。魚類ならばホノルルの水族館の如く、辛苦して硝子ガラスの水槽の中に養わざる限りは、常に西海の珊瑚さんご

瑚あんしょう暗礁の底深く隠れ、銛もりも刺さし網あみもその力及ばず、到底とうてい東
 部日本の雪氷の地方まで、我々に追ついで随ずいし来る見込はないのだが、
 独ひとりカワセミだけは多分我々の先祖の移住に先だち、夙つとにこの島
 国に入り来つて異郷の風物と同化し、殊ことにそのおかしな嘴くちばしと尻尾
 とを以て、遠くから存在を我々に知らしめ、これによつて寂しい
 太陽の子孫たちを慰安し、永く南方常とこなつ夏の故郷を思念すること
 を得せしめるのである。燕つばめの春を待つて漸ようやく我々を訪おとうのに比べ
 て、より以上の忠誠を認めて遣やらねばならぬ、それがこのように
 有力なる愛鳥者から、新たに忌み嫌われなければならぬというの
 は、仮ぜに是非ひもない自然の運であつたとしても、なお深く嗟さたん歎す
 べきことではある。

嫌いなら嫌いでそれも結構と言つてよいが、好いじゃないか君の家の泉水に、ほんの小雑魚こざこを年にもう七十ぴきか、八十尾ほども余分に飼つて置いて、彼奴に自由自在に狙わせて、遊ばせて見たらどんなものだ。冗談を言つてはいけない。金魚を捕つて食うのだよ。せつかく大事にして育てている金魚を、時々せしめて行くからけしからぬと申すのだとある。

三

なに。カワセミが金魚をくわえて行くか。

なるほど誰やらを金魚の刺身に譬たとえた如く、あれは食品として

人間すらなお断念している魚類だ。かつて大町桂月君等は薦の温泉で食つたという話だが、少なくとも美味求真でない事だけは明白だ。それを何ぞや小児が餅菓子もちがしを鑑定するように、徒らいたずらに皮相の色彩に誘惑せられて、選択は当を失するのみならず、終ついに先生の怒いかりを買いうに至つては、翡翠かわせみの無智浅慮むちせんりよは誠まことに憫あわれむに堪たえざるものがある。

しかもひるがえ翻ひるがえつて他の一面、古い天然うに倦うまんとする人間の目から見ると、実はまたこれほど斬ざん新しん新奇ざんしん拔しんなる取合せはないのである。和漢古今の画と文学とを通じて、ないしは繊細の美を誇りとする印度インド・波斯ペルシアの芸術の中を求めても、恐らくはこの如き光景はなかつた。光あるコバルト色の羽をした、首ばかりのような形の鳥

が、丹色にいろの小魚を長い嘴ついのさきにに啄つばんで、水の上を飛び渡ると
 いうような絵様えようは、いまだかつて人の空想にも浮ばなかつたと思
 う。

僕が楚人冠であつたら、土工の許す限りま先ず庭中に幾つもの池
 を穿うがち、水を浅く面を広々として、安物の数物の大和金魚をその
 中にうんと放し、少なくとも下しも総そう一国のカワセミが評判を聞い
 て集まり来きたり、赤い金魚をくわえて右往左往すること、あたかも
 友禅ゆうぜんの染紋様そめもようの如くなることを飽かず眺め興じたであらう。
 惜しいかな好漢、胸中百卷の書を蔵すといえども、樂しむ所もつぱは專
 ら水墨雲煙すいぼくうんえんの変化にあつて、こういう極彩色に対しては、存
 外ぐわいに趣味が淡かつた。

四

かつて聴く徳大寺の某大臣、寢殿に鳶居させじとて、屋の上に網を張らしめたという話がある。即ち人間の非巢箱主義の巨魁であつたが、しかも鳶の居たるばかり何ほどの事かあらんなどと、
 一 旦は批難をした法師原も、後にその目的が池の蛙の保護にあることを知つて我を折つた。誠に徳虫魚に及ぶは尊い所業に相異ないが、しかもその間に人を本意とした親疎内外の差別観がなかつたならば、このように無造作に、一方の生命を愛惜するためばかりに、他の一方の存在を憎むことは出来なかつたのではないか

と思う。

けだし物の命を取らねば生きられぬものと、食われてはたまらぬ者との仲に立つては、仏すらも取捨の裁決にお迷いなされた。終には御自身の股ももの肉を割愛して、餓うえ求むる者に与え去らしめたというが如き、姑息こそく弥縫びほうの解決手段の外ほかに、この悲しむべき利害の大衝突を、永遠に調和せしむる策を見出し得ぎったのである。語を換えて言うならば、おれの池のおれの金魚が大切といえどもかくも、単に金魚が可愛そうだということは、一般にカワセミを納得せしむる理由としては不十分だと思う。

五

その上に被害者が、もし見にくい池の蛙などであつたら、果し
てこの弱肉強食の現実に当面して、能く同一程度の義憤を起し得
たかどうかも、また大なる疑問である。

なるほど池の蛙は惜しげもなく沢山たくさんに、毎年の春は生れて来
る。しかし金魚の出産率は実はこれよりも遙かに大きいので、鯉にしん
や鰻かつおなどと同じように、全く最初から食われるため死ぬただけ
に、生命を開始するといつてもよい者が大部分なのである。大和
の郡山こおりやまの旧城跡、三笠みかさ・春日かすがと向き合いの暖い岡に、広い池
を幾つも掘つて、この中に孵化ふかする金魚の子の数は、百万が単位
である。その飼主の柳沢伯が、世に知られた統計学者であるのも、

何だか渋い皮肉のように感ぜられる。

この池の中から町の金魚屋が、小さなタマを以てやたらにすくい上げ、荷桶に入れて担い出すときに、やつとの事で金魚の微弱なる生存の価値は発生する。それから次々に山坂を越えて、関東の田舎まで運ばれるに至り、始めてカワセミに対抗して主張せらるべき、何物かが現われるのである。本源に溯れば利欲に専らもっぱある商人、ないしは物ずきの殿様があるために、美しい翡翠たちが楽には取って食うことを許されず、困窮することにもなるのである。どちらが弱肉だか知れたものではない。

六

しかしそんならそうかといつて、丸々カワセミの放恣ほうしを黙認もくにんすること、出来ない世の中にもうなつてしまった。たしか幸堂こうどう得知とくちの句であつたが、

幾ら食うものか棄て置け稻雀

江戸座の俳諧にはいつも敬服すべき輕妙はあるが、その代り村の生活に対する同情は不足であつた。もしこうして雀の食いしん坊を寛容したなら、全国の秋において二三百萬石の收穫は違うだろう。幾ら食うものかどころではないのである。二百萬石は今日の相場で、一箇の大学でありまたは一艘そうの戦艦である。これは棄て置かない方が確かによいのだ。

北齋ほくさいなどの読み本の挿画には、田舎の豊饒ほうじょうを写し出そうとする、きまつて鳴子なるこに頓とんじやく著せぬらしい雀の大群が描いてある。全くこれは結果と原因との取違えであつて、この通りにして棄て置いても、まだ余裕がありそうだというだけで、実は雀の一族の大繁栄が、隠れたる後代の禍根かこんであることを知らぬのであつた。雀を絵に描いて豊年万作の図と題するが如き人々が、政治を預つていた故ゆえに農村は衰えたのである。

七

妙まに纏まとまりが悪くなつたが、何としてなりとももうこの一篇を

終ろう。

かかるとがゆえに、雀は百姓たちの生れながらの敵である。鷺もからすなわしろ鳥も苗代を荒らすによつて、農民はこれを憎んでいる。正月松の内のめでたい朝も、鳥追いと称して野らに出て大声にわめき、あたま切つて尻尾切つて、塩に漬けて俵につめて、西の海に流すといふような怖しい宣言をする。皆これ白馬城主の金魚に対する憐憫を、今一つ下層の穀物にまで推おしひろ拡めたものであつた。しかもそのような憎らしいことを言いながら、雪解け春来りきた水盈ちみ稲茂り、やがて秋の風に黄金の穂が波うつ時が来ると、僅わずかばかりの充足に心まで酔いかれて、かえつて村雀と共に踊り歌うのである。国富が増殖して生命があり余ると、將軍が兵を用いたが

つたのと同じように、人は案外無慾で、財宝でもやや不用のものが出来ると、無意味にこれを散じて見たくなるらしいが、ただこの節はそんな場合が、昔に比べて大分少なくなっただけである。

八

浜で漁師が地曳網じびきあみを揚げる時などには、今でも子供や老女が来て盗むのみか、事によると飛びまわる鷗かもめの数が、魚の数よりも多いかと思う折もある。梨の實の出盛りに庭阪に行き、または葡萄酒どうしゆの仕入時にローヌの溪たになどがあるいて見ると、盗まれて見なければ豊年の悦喜えつきが、徹底せぬような顔した人がいる。極端な

場合になると、旅人を捕えて酔い倒れしめざれば止まず、あるいは信州などの十一月には、昔は少なくとも一人の乞食を、食責めにして殺さなければ、済まぬと考えた日さえあつた。最近までも我々の間には残つていた饗宴きようえんというものの基調は浪費であつた。貴人長者の羨まるうらやる所以は、土蔵の戸口に検束が緩くゆるして、台所の隅には怠け者の、飯時だけ起きて来るような男が、幾人も転がっていることに過ぎなかつた。黄金時代の太平と称するものも、ありようは特別の奇跡でなかつた。ただこんな気楽さが趣意もなく繰返されているうちに、多勢の中から名工も詩人も出たので、結局する所は庭前の池の金魚に、竜田たつただの唐錦からにしきだのと名を附けて、朝夕その頭数を勘定しているような世中よのなかになつては、

もうカワセミも安閑^{あんかん}として、ヒイーなどとは啼いてはいられないのである。

天下の小鳥をことごとく巣箱に保護して見たら、かえって生活闘争は激烈になって来るのではないか。平和とは単に山林に生き残った者の間だけの、差引勘定の名ではなかつたか。もしそうだったら今少し考えて見なければならぬ。故にカワセミの問題は今なお未解決である。

絵になる鳥

ある年の五月、アルプという川の岸の岡に、用もない読書の日を送っていたことがあった。氷河の氷の下を出て来てからまだ二時間とかにしかならぬという急流で、赤く濁ったつめたい水であったが、両岸は川かわ楊やなぎの古木の林になっていて、ちょうどその梢こずえが旅館の庭の、緑の芝生と平らであった。なごやかな風の吹く

日には、その楊の花が川の方から、際限もなく飛んで来て、雪のように空にただようている。以前も一度 上シャンハイ 海 郊外の工場を見に行つた折に、いわゆる 柳りゅうじよ 絮の漂々たる行くえを見送つたことがあつたが、総体に旅客でない者は、土地のこういう毎年の風物には、深く心を留めようとはせぬらしい。

しかしそれはただ人間だけの話で、小鳥はこういう風の吹く日になると、妙にその挙動が常のようでなかつた。たて横にこの楊の花の飛び散る中に入つて行つて、口を開けてその綿を啄つばもうとする。それをどうするのかと思つてなお気を付けていると、いずれも庭の樹木の茂つた蔭に入つて、今ちようど落成しかかつている彼等の新家庭の、新らしい敷物にするらしいのであつた。ホ

テルの庭の南に向いた岡の端は、石を欄干らんかんにした見晴し台にな
 つていて、そこにはささやかなる泉があつた。それとは直角に七
 葉樹ちようじゆの並木が三列に植えられ、既に盛り上がるように沢山たくさんの
 花の芽を持っている。どれもこれも六七十年の逞たくましい喬木きようぼく
 であつた。鳥どもは多く巢をその梢に托していると見えて、そち
 こちに嬉しそうに家普請やぶしんの歌の聲が聞えるが、物にまぎれてその
 在処ありかがよくはわからなかつた。

ところがどうしたものでたつた一つがい、しかも羽の
 色の白い小鳥が、並木の一番端の地に附くような低い枝の中ほど
 に巢を掛けてゐる。僅わずかばかりその枝を引き撓たわめると、地上に立
 つていても巢の中を見ることが出来た。巢の底には例の楊の綿を

厚く敷いて、薄うすねず鼠色の小さな卵が二つ生んである、それがほどなく四つになつて、親鳥がその上に坐り、人が近よつても遁にげぬようになつてしまつた。折々更こうたい代に入つていて、一方が戻つて来るのを待兼ねまちかぬるようにして、飛んで行くのが雄であつた。氣を付けて見ると、この方が少しばかり尾が太い。庭掃き老人がそこを通るから、試みに名を尋ねて見た。多分 Verdier という鳥だと思ふが確かなことは知らないと答える。英語では Goldfinch という鳥だと、また一人の青年が教えてくれたが、これも怪しいものであつた。後に鳥譜を出して比べて見ると、似ているのは大ききだけで、羽の色などは双方ともこの巢の鳥とは同じでなかつた。がとにかくに幾らもこの辺にはいる鳥ではあつたらしい。

この頃家に十姉妹じゅうしまつを飼うようになってから、その小さな目を見るたびに、いつでも私はあの時のことを想い出す。ちようどの目をして七葉樹上の彼等も、また私を見たのであった。少しの反抗もない警戒に、一分ぶの懇願こんがんをまじえたような目であった。どうしてそのような近々と私たちを見るのかと、訝いぶかるような心持も感じられぬことはなかった。そこで自分は出来るだけ遠くから、また尻尾しっぽの方からばかり、いるかないかを見ようとしたのであった。風の吹く日には尻尾は必ず風下の方へ向いた巢の外へ突出つきたしていた。そうしていつ行つて見ても、殆どほとんその尻尾の出ている時はなかったのである。英国に留学して鳥を研究している蜂須賀君はちすかが遣やつて来て、何日目に雛ひなになるかを知らせてくれと頼

んで行つたが、余り遠慮をしていたのでとうとうそれを確めることすら出来なかつた。

おまけにこの鳥の巢の秘密が、次第に同宿の間に知れ渡つて来た。私の目的は全く保護にあつたのだが、心なくその木の蔭に立つ者を制しようとしたために、かえつて多くの人の話の種になり、中には娘たちを案内して、そろそろと見物に行く男もあつた。そのうちに和蘭オランダの外交官だという人の細君が、いたずらそうな男の児ばかり、四五人も連れて遣つて来た。頬ほおの赤い眼のくるくるとした子守娘が、事実上の餓鬼がき大将としてこれを引率している。これはとんでもない敵軍が押寄せたものだ、ひとり鳥以上の不安を抱いておつたところが、果せるかなその次の日の昼過ぎには、

もうその巢は空っぽになっていた。何でも昨日の朝とかから、親鳥は餌を運び始めていたというが、私はとうとう様子を見ずにしまった。そんな小さな目も見えぬものを、彼等は取とり下おろしてどうしたというのであろうか。尋ねて見ようにも言葉は通ぜず、さもさもそんな事は冤罪えんざいであるかの如くごと、平気な顔をして一日中その樹の下を飛びまわって、もう次の日にはいずれへか出発してしまった。

私の話は前置きが長くて、本文はかえって僅かしかかないが、書いて見たいと思うことはこのあとの経験である。ホテルには毎日午前のうち、寂しいといってもよいほど静かなる少しの時刻がある。私はその際ふと窓外の鳥の声を聴きつけて、庭に下りてま

た昨日の七葉樹の蔭に行つて見たが、巢は殆ど元のままであつて、その上の枝に二羽の親鳥が、半ば身を傾けてじつとしてその巢の中を覗のぞいていた。何とも言われぬ位にその形があわれであつた。そこで始めて心付いたことは、古来東方の故郷の国において、人が深くも考えずに粉ふんぼん本を伝えていた、絵様えようというものにも基づく所があるということであつた。獣には普通子を連れた形、右往左往に遊び戯れるのを、それとなく見守つている処を絵にしているが、いわゆる花鳥には往々にしてこの日の午前の Verdiar のような姿がある。それを単なる配合の面白さから、選び出して写したようにこれまでは考えられていた。即ち画すなわは人間の美しいという尺度が定まつて後に、それを自然にあてはめて合格したのを採

つたものと、多くの歴史家は説明するのであるが、もう自分等はそれを信じなくてもよいと思つた。夢で見たものまぼろしで感動したことが、強く残つていなければ神の像は描かれぬ如く、かつてある日の物の哀れというものが、自然に我手を役してその面影を再現させようとしたのが、言わば我々の技芸の始はじめであつた。写生の真に迫るといふことは、恐らくは単に心の鏡の澄みきつていたことを意味する以上に、更さらにそれ自身の光というものがあつて、特に力強くある物を照そうとした結果であらうと思つた。鳥が人間の魂の兄弟であることを信じていた者は前代には多かつた。従つて同じ親子の愛情にしても、彼等の感じたものは格別に理解しやすかつたので、彼等のこんな簡単な巢うかがを窺うような形までが、永

く記念の像を後代に遺すことになつたのではないかと思つた。

旅人が殊ことに鳥類の声姿に、心を引かれるのも由来があることらしい。これも芸術の起原論と同様に、美しいということとはむしろ結果であつて、以前は今よりも一段と彼等の挙動によつて、学び心づくことが多かつたために、これをよそよそしく眺めることが出来なかつたのかも知れぬ。私はまたある時、アメリカ亜米利加の曠野こうやを過ぎていて、二羽の闘う小鳥が中空に向き合つて、羽ばたきをする姿の美しいシンメトリーを見たことがある。古い鏡の絵や錦の模様の中に、これは何度となく見馴れている形であつた。鶴の稲穂の国々の伝説を記憶する者には、いわゆるまつくいづる松喰鶴まれのの絵様も、単なる空想の所産とは思われない。たとえその実験は稀まれにしか得

られなくとも、やはり最初はこれによつて、何か貴重なる啓示を
与えられた名残であることは、まんじ卍字も十字架も異なる所はなかつ
たのである。

烏勸請の事

一

これは三好さんの話である。

雲仙^{うんぜん}

の国立公園のゴルフ場では、たった一つだけ困ることが

ある。あの山の烏^{からす}は横合からやって来て、飛んでいる球をくわえ

て行ってしまう。それでキャディの任務があそこでは一つ余分に

なっている。打出すと同時にわいわいと大声でわめき立てて、皆してその鳥を逐おい払わないと、毎々大事な球を取られてしまうからだという。

自分はこの話を聴いて、思わず本当ですかと言わなければならぬほど驚いた。しかもそういう心当りは正にあるのである。同じ経験は日本でならば、今後もまだ他の地方でも得られるかも知れない。そうして外国のゴルフ場には、恐らくはあまりないことであらうと思う。これは動物にも国史があるという、非常に大切な問題の糸口である。僅わずかにわかっているだけでも一応は記述して置く方がよい。

それでまず試みに四五人の仲間の寄より合あいの席で、どんな印象を

与えるかと思つてこの話をして見た所が、早速にまた新たなる知識を一つ添えることが出来た。友人の榊木敏君は、雲仙の西麓、おぼま小浜という海岸の村の人であつた。それはいかにもあり得ることだと同君はいうのである。榊木君等の少年の頃には、円まるい平たい小石を拾つて、烏の群を目がけて投付ける遊びがあつた。そうすると烏は飛んで来てそれをくわえようとする。つまり雲仙のゴルフ場が開けるよりもずっと前から、島原の烏どもは皆そんな練習をしていたわけである。今でも子供たちは同じ遊びをしているかも知れない。行つて聴けばすぐにわかることだが、榊木君などの頃にはその石を投げながら

烏かんじよう猫かんじよう

といふ詞ことばを唱なえていた。そうしてそのカンジョウを子供心に「食わぬぞ」という意味に解とけていたそうである。

そうすると「この石は餅もちのような形をしているが、石だから食うわけには行くまい」と、嘲あざけるつもりであつたのか。ただしはまたこれは餅だが食たわないかと、欺あざむくような氣持であつたものか。

いずれであつたかが問題になるが、そういう細かな点までは確かめ難いのみならず、この解釈も実は誤解であつたらしいのである。今までの子供の遊戯は、大抵たいていは成人の所作の模倣であつた。これも多分は古い時代に、餅を烏に投げ与えた際の唱なえ言ことで、烏勸かんじよう請すなわは即ち烏を迎えて、饗きよう応おうをするといふ意味であつたのを、後には口拍子に猫勸請を付添えたものと思われる。

自分はそういつて独りひとで感心していると、傍からまた注意をした者がある。関東の子供等は今でも烏の空を行くのを見ると

烏はかアかア勘三郎

雀はちゆうちゆう忠三郎

とんびは熊野のかね叩たたき

百日たたいて麦一升

などと、何も投げずにただこういつて囃はやすが、文句の長くなつたのは面白くであつて、この勘三郎も本来は烏勸請、即ち烏を招待する時の言葉から出たものかも知れぬという。なるほどそれもまた一つの発見かも知れぬが、これにはなお一応東京近郊のゴルフ場でも、折々は飛ぶ球をくわえに来る烏があるか否かを確かめ

てから、問題にしても遅くはない。近頃の考証家中には言葉ばかりを気にする人もあるが、言葉ほどこじつけやすいものはないのである。言葉は傍証であつて事実の根拠が確かめられた後に、それと思ひ合せていよいよ間違ひがないという時の役にしか立たぬものである。

我々がここで考えて見なければならぬのは、島原半島の鳥のゴルフの球をくわえに来る技術は、果して兒童のはた悪戯いたずらの円い平たい小石ばかりで、これを養成することが出来たかどうかである。これには今一つ以前の久しい期間、投げて食わされるのがご馳走ちそうの餅であつた時代が続いて、今なお空中に投げられる円くて白いものを、飛んで来てくわえる習性が生じたのではないかというこ

とである。人間が今のよう^{ひつぱく}に逼迫するよりも前から、もう九州ではこの鳥祭は絶えている。子供と鳥だけがその古い契約を、僅か片端だけでもなお憶^{おぼ}えているのではないか。この点がまず究められなければならぬのである。

二

ポンソンビ・フエーヌ君は英国から遣^やつて来て、もう二十年近くも日本の神道を研究している。この頃は鳥^{とり}喰^ばみ^の神^の事^{しんじ}に深い興味を抱いて、書物で知っただけの場所は、片っ端から尋ねてある。熱^{あつた}田神宮で行われる鳥食いの古式は、

この春も拝観して来た。名古屋の南の郊外が煙突の林になってしまつてからは、もう肝腎かんじんの鳥が参列してくれない。式は型ばかりになつて空しくお祭の供物をもてあましていくという。宮司の桑原さんは考え深い人だ。今にいずれかへ祭場を移される他はあるまいと私も思っている。それから近江おうみの多賀たが大社、あそこでは毎日鳥に神供じんぐを与える行事が、今でもまだ続いている。安芸あきの宮島の女夫鳥めおとは、一年に一度しか祭を享うけぬことになつているが、時々七浦回りの信心者の船が供えものをする。熊野は素もとより日本一の鳥の楽土だが、なおこの以外にも何ヶ所とか、鳥祭のあるお社やしをポンソソビ君は知っている。もつとどこかにないだろうか。あるなら行つて見たいのだがというご相談である。

いいやまだ一向に私などは調べていません、東京では今頃やつと、国際文化の会というようなものが出来る所なのに、よくも貴方一人でそういう仕事を始めたものですね。これは何とかしてお手伝をしなければならぬと、それから色々関係のありそうなことを話し合っているうちに、かの雲仙のゴルフ場の一件なども出て来たわけである。烏に食物を与えるお社は、府県にはまだ幾らでもありそうに思われる。単に我々が構いつけなかつたために、現在はお答えをすることが出来ないだけである。近頃目に付いたたつた一つの例は『防長史学』という雑誌（二巻一号）に、玖珂^{くが}郡^{はしらの}柱野村杉森大明神の、御烏喰神事というのを報じている。旧曆九月十三日の朝、餅を二重ねと米の粉を餅の形にしたもの一重ね、

それにその朝の飯・しる・菜を添えて、社の前なる御供石ごくういしの上に置くと、即時に烏二羽きた来つてこれを食う。ただしけがれがある時は烏来らずして石の上に腐り、また他の鳥獣も食わぬというが、無論そういう場合はめつたにないのであろう。

この烏がただ二羽ということは、宮島でも伝えられていて人がよく知っている。いつでも一つがいに限つて出て来るということが信じられ、相続烏が出来ると親は熊野へ還かえつて行くとさえいう者がある。これにも何か理由のあることらしいが、私などにはまだ説明することが出来ない。関東の方でも那須なすの矢又村やまたの鷲とりのこ子神社に、二羽鳥というのが山中七不思議の一つに数えられているそうだが（『下野神社沿革史』卷八）、これも恐らくお社の祭な

り、または信心の参詣者なりの供え物を、出て来てご馳走になる当番の如きものであつたらしく、土地ではその二羽鳥をミサキともいつているとのことである。

ミサキ鳥という言葉は、また宮島でも熊野でも聴くことがある。ミサキは先鋒であり、従つて神々の代表者というような意味ではなかつたらうか。とにかくに人民ともつとも多く接触する神靈に、その名を用いた例が他にも沢山たくさんある。これによつて思い合せることは、西の方の諸県では現在は村共同に、鎮守ちんじゆの社において行ふ鳥祭を、東北や越後は今も家々で、個々に営んでいるのが多いことである。言いかえれば、鳥は餅をふるまわれる機会が、この方面では西部の同類よりもずっと多いらしいのである。

福島県たいら平附近の例をいうと、正月十一日の農立ての日の朝、今年なわしろ苗代にしようと思ふ田に行つて初はつぐわ鋤をいれ、三所に餅と神み酒・洗あらいよね米とを供えて、これを早わせ稲・中なかくて稲・晚おくて稲の三通りに見立てて置く。そうして大きな声でオミサギ・オミサギと喚よぶと、直すぐに鳥が飛んで来てその餅をくわえて行く。どの餅を先に持つて行くかを見て、三種いずれの稲が本年は当り作であるかを決するのだそうである（『民族』一卷二号）。常には憎んで追い散らす鳥でも、こういう改まった式の日だけはオミサキであつた。

気仙^{けせん}地方にもオミサキツリという語がある。社寺に参つて供えた散^{さんまい}米を、烏がついばむことをそういうのだそうである。正月の式の日には限らず、山や墓所に上げて置く食物なども、烏が取りに来るのを追わぬのみか、かえつて食つてくれないと気にするのである。これもそういう場合に限つて、烏を一種のミサキと見ていたものと解せられる。ただしミサキガラスというのは、茨城県などではハシボソガラスのことであつて、ハシブトの方はクソガラスという方言もあり、この仲間には入っていないらしいが、果して雲仙の山でもそうした差別があるかどうか。また宮島あたりのミサキはどうであろうか。この点を一応當つて置きたいと思つている。

正月に烏に餅を食わせる風習は方々にあるが、同じ東北でも土地によつてその式は少しずつ變つてゐる。青森県の東の部分では、これを初山掛けといい、正月八日の早朝に行う村が多いけれども、その初山も四日にする所、十一日にする所などが他にはある。

普通に行われているのは餅を一種の藁わらづと苞とに入れて、屋敷まわりの一定の樹の枝に引掛けて置き、それから大きな声で烏を喚ぶのである。その言葉が村によりまた家によつて、色々變つてゐるのが私には面白い。北秋田の扇おうぎた田たあたりから、鹿角郡かづのにかけてはポーポーといつてゐた。これは鷹たかつかいが鷹を呼ぶ時にもそういつたそうだから、烏だけに限つた語ではないらしい。青森県の上北部ではシナイシナイ、もしくはコーロコロという家もある。

シナイはまたスナイとも聞え、スナイチカイと唱える例もあるから、多分苗を結ぶ稲わらのことであろう。餅を包んだ藁苞しまを蔵しまつて置いて、田植の日の苗束に用いる風習があつたらしいのである。
 はちのへ
 八戸附近の烏喚びの言葉は、ロウロウというのがもつとも多いが、家によつてはまたシナイシナイ、シナイローというものもあり、あるいはただカアカアという人もある。越後の古志郡こしにはカツカラカツカラと呼ぶ村もあり、福島県などにはカラスカラスとばかりいう所もある。東京近くの農村にも、折々はこの正月の烏祭をするものがあるが、これもカラスというだけで、他の合言葉はもう使わぬらしい。

餅を引掛けて置く樹にも、以前は定まった約束があつたかと思

われる。今でも里はずれの一本の老木、もしくは山の口元のある樹まで持つて行つて掛け、歸りにその樹の片枝を伐^きつて来て、わざわざそれを燃してお茶をわかして飲む土地もある。初山即ち若木採りの儀式と結びついているので、この木を山の神様、鳥を山の神のお使と思つている者の多いのも、相応にいわれ因縁のあることである。しかしそうなるとその餅の苞を、山や里はずれまで持つては行かずに、めいめいの屋敷の外にある樹木にただ引かけて置いて鳥を喚ぶことが、何だか説明しにくいように思う人もあるか知らぬが、これは全く餅を鳥にやったという事実が、家に取りつては大切な記念だからで、いわばその証拠に正月の間だけ、受取状のようにして眼につく所に掲げるのだらうと思う。

それで次にはこの藁製の入れ物の名を、村々で何というかも尋ねて見る必要がある。誰か我^{わがくに}邦にもポンソンビさんの如き人が現われて、丹念に各地の例を比較してくれるとよいがと思う。私の知っているだけでは、山形秋田の海岸ではこれをノサ、これを樹につるす行事をノサカケという。その日は正月四日でありまた二日にする処もあり、鳥が取りに来るか否かをもう省みない土地もあるが、とにかくに藁できれいに飾り物を作り、それに色々の供物を結び付けて、神の樹の枝に掛けに行く風は、^{しようない}荘内以北^{ゆり}由利の海岸も一様である。越後も多分そうであろうと思う。これを鳥よりも里の子供が楽しみにして、すぐに後から取りに行くことは、近畿地方の鳥塚の風習、もしくは^{あつみ}渥美半島の山神祭などと

も似ている。

四

岩手青森の旧南部領でも、ノサもしくは又サという語があつて、正月八日の前夜に又サウチをする。打つというのはわらでその又サをこしらえることで、これには必ず烏にやる餅を挟むことになつてゐる。三戸^{さんのへ}郡の村々では、又サといつても通ずるが、あるいはこれはヒサゲトシナという家もある。トシナは年繩で、東京でいう注連繩^{しめなわ}のことを意味し、ヒサゲは手に持つて提げることである。普通の年繩はただ張り渡すばかりだが、初山掛けに用いる

ものだけは、下げて行かれるように取手がつけてある。それを自分などは挟んだ餅を投げるための装置だろうと想像しているのである。

現在の鳥祭では、投げ遣らずにただぶら下げて置いて、自由にくわえて行かせる例の方が多いが、以前は鳥の挙動を見るために、空中に向ってほうり投げるのが普通であったのではないかと思う。秋田県北部などの、鳥をポーポーと喚んでいる地方では、その藁製の飾り物をポツポカラといっている。これには三つの乳を付けて、大小三個の丸餅をその穴に挿み、これを振回して餅を投げ飛ばすのである。そうして後にそのわら飾りを樹に引掛け、その枝を少しばかり折って帰って来るといふ（『民俗学』四卷二号）。

関東の田舎の子供たちは、石投げの遊びにもこれとよく似た装置のものを用いていた。餅を烏に遣るために発明せられた技術でもあるまいが、石を投げるよりも正月に餅をこうして投げる方が、心理学的にも何倍か愉快であり、また大人もこの日ばかりは少年の心持にかえって、昔の腕前を示そうとしたことであろう。置いて取らせるようになったのは、烏の警戒心の増加だけでなく、あるいはこの石投げ武芸の衰微のためだろうかと私は思う。

こういう風に解しなければ、かの雲仙ゴルフ場などの、奇現象は説明することが出来ない。正月に烏を祭る風は九州にはもう絶えてしまったらしく、神社の儀式としても有名なものはないようだが、なお烏だけは何十代か前の親々が、かつて空中の餅をつい

ばんだ經驗を相続して、今でも白い小さな円いものの飛ぶのを見ると、大急ぎに出て来てくわえ去ろうとする特殊の習性を現わすのである。人がミサキを信じてこれを饗きょうせんとし、烏の本能的な貪どん食しよくを以もつて、神が祭を享けたまうしるしとする思想が、もしも中頃から発達して来たものならば、烏の環境はこれに伴うて改まり、その生活は變化したのである。即ち烏にもまた一國限りの、種族の歴史というものがあつたのである。

日本の烏の風習に大きな特徴のあることは、つとにエドワード・モールス翁なども深い注意を払っている。どこの田舎へ行つても彼等は人に興味をもち、殊ことに我々の手元や拳動をいつでも横目で見守り、時には近よつて立聴きでもしようとするかと思うこと

がある。これをモールス翁は日本人の徳が、無心の鳥獸までをなつけているように、一人で合点して敬服しておられるが、他にもまだ一つの隠れたる理由はあつたので、それだからまた雲仙の球拾いの子供などが難儀をするのである。この頃大分流行^{はや}つてきた動物心理の研究なども、面白い仕事であるだけに、このモールス翁の真似^{まね}はさせたくないと思う。

鳥が横着であつたり悪^{わる}賢^{がし}こかつたりするのにも、西洋には西洋だけの理由があり、日本にはまた日本限りの、隠れたる原因があるのかも知れない。個々の動物が出現以来、たった一つの道しか生きなかつたように、きめてかかるのが出発点であるとしたら、この研究も実は心細い。鳥にだつてやはり土地ごとの歴史はあり、

それがまた後々の生存条件をきめている。なるほど彼等の間には歴史家なく、無論また記録もない。それが人類とちがうといえちがうのだが、その人類の内にだつて、九割以上は記録などは伝わつていやしない。それを歴史がなかつたものの如く、考えることはもう許されないのである。

雲仙の烏がゴルフの球を盗むには、この国限りの永い由緒があり、また新らしい誤解があつた。一いったん旦の遺伝はその原因が消えると、再びまた薄れてもよかつたのだが、子供たちがいつまでも烏勸請の遊戯を覚えていて、それを今日のゴルフの時代まで持越して来たのである。子供の所業は烏どもの歴史の上には、太閤やナポレオンほどの力があつた。

初鳥のことなど

鳥はあのような悪らしいにく面構つらがまえの鳥だが、それでも丸つきり来なくなってしまうと、正月は殊ことに思い出さずにはいられない。近世の歳時記さいじきには、ただ早天の鳴き声のみを賞美し、絵では日の出前に五羽か六羽、黒く飛んでいるところを描いて、まず初春の景物としたものであつたが、その簡略な景物すらも、今では実景

ではなくなつてしまつた。

最初にはこれが万まんざい歳の太夫たゆう以上に、我々の正月とは深い関係のあつたことを、鳥の方でももうとづくに忘れてゐる。雪の多い東北の村だけでは、旧の暦の二日の朝、あるいは四日の朝にする土地もあるが、農家の主人が自分の田の畔くろに出て行つて、食物を鳥に与える風習がまだ残つてゐる。土佐や九州の在所でも、事によると同じことをしているかも知れない。本来は山の神への供物を、鳥がお使に來て持つて行くものと思つたのか。とにかくそれが食い残されることを非常に嫌つて、早くご馳走ちそうをするために、この日は朝起きの競争をした。そうしてまた鳥を喚よぶ単純な唱え言葉もあつたのである。不思議な話ではあるが、その「からす來

うい」という喚び声を聞きつけて、必ず山々の鳥が降りて来て、白いシトギを口にくわえてあちこちへ飛びあるいた。村によつては食物を三所に分けておいて、今年は早中晩稲のいずれが宜よろしいかを、占なつて見ようとすする習慣もあつた。これが恐らくは初期の俳諧のいわゆる初はつがらす鳥なるものであつたろうと思う。

田畠に遠い城下町の民家では、多分はその食物を屋根の上などへ運んで置いて、やはり大きな声を挙げて、鳥を招き寄せたことがあつたらしい。人間は勝手な者で常は憎んで追つていながら、用のある時ばかりはこの通りちやほやした。それと同じような待遇を受けたものが、他にもまだ色々ある。鼠ねずみなども松の内だけは「よめが君きみ」などといって、三日の晩または地方によつて六日の

晩に、最もよく出る通路に食物を器に入れて、出しておく家が各地にある。信州ではこれを嫁御の年越しなどという者もあつて、彼等にもこうして「おせち」に坐つて年を取らせるのだといつているが、これも口をつけずに朝まで残してあると、やはり不吉の兆きざしとして気にかけたものであつた。

牛や犬・猫・鶏には、もちろん銘めいめい々の年取りがあつたのみならず、同じ晩はまた道具の年越と称して、白うすや箕みや枘ますの類まで、一とところに集めて鏡かがみもち餅もちを供える風が、實際はまだ決して稀まれでない。こういう家々の正月が、いかに晴々と心の改まるものであつたかを考えると、自分たちの年始状と初刷との中に、ごろんと寝ころんでいるような新年の、徒つれづれ然なものであることに始めて

心づくのである。

私の家などは町から五里、隣は枯^{かれ}薄^{すすき}の空屋敷であつて、どの窓からも一本ずつ、かなり大きな松の樹が見える。海からさほど遠くないためか、空が真青で折々通つて行く雲が、洗つたように白く光っている。そういうさっぱりした日影の下に坐つていても、何だか物が一つ足りないような気がするのは、考えて見ると鳥が来ないからであつた。鳶^{とび}もここへきてから三度目の冬になるが、まだ一度も舞っているのを見たことがない。こう毎日のように立川の大先輩が、えらい音を立てて飛んで来る時代になつては、幾ら頃合の林の木があつても、巢を掛けて住もうという気にはなれぬのであろう。そうすれば一つ舞つてやれというような、威勢

のいい鳶もこの辺にはいないはずである。

鳥はそれでも岡の下の、田の^{かりあと}跡まで行くと見られぬことはない。晩方には大急ぎで、黙って遠くの方へ飛んで行く一群を見ることがある。しかしかなる明け方に眼を覚まして見ても、ついぞ一回も鳥が啼^なくなど思つて聴いたことがない。彼等の正月も楽しみが少なくなつたか。これではやはり生活法を、変えて見なければならぬと思つてゐるのか。何にもせよ三馬^{さんば}の『浮世風呂』などに見るような、僅^{わず}かばかりの初春の風情までが、もう郊外に出て味わうわけには行かなくなつたのである。

この秋よく聴いたのは百舌^{もず}鳥ばかりであつた。こやつは一羽いても騒々しいから、直^すぐに遠方からでも来たなということが知れ

る。早天には普通百舌鳥の合間に、画眉鳥ほおじろの声を聴いたものであった。春のまだ深いころから夏のかかりまでは、いつもその辺のもつとも高い枝で啼き、それから暫しばらく静かで、秋は低い草むらを渡つてあるいている。この二つだけは来年もまた来るかも知れない。しかし椋鳥むくどりだけはどうやらもう見切つたらしい。椋鳥に見切られたということは、私の家にとっては実は大事件なのである。善後策を講じなければならぬ一問題が、今や突如としてこの閑居に迫つて来ているのである。

先日も電車の中で、駒場の原はらひろし熙博士に逢つて聞くと、どうも郊外の住宅では芝が枯れて困る。あの害虫ばかりは駆除のしようがないという話であった。私の庭でもこの冬のかかりに、気を

つけて見ると芝生が端の方から枯れてくる。熊手で搔かいて見たらその根のところまろに、青い虫が円まるくなつて眠つてゐる。それが半日の間に三合ばかりも捕れた。来春はこれが羽虫になつて、子を産むのだから、先まずはせつかくの芝の末期というの他はない。それから腕を組んで考えて見たことであるが、去年はどうしてこの災難のがを遁れたかと思つと、毎日今ごろは午前の暖かい時刻に、生垣を潜つて隣の空屋敷から、必ず二三羽のむく鳥が入つて来て、熱心に芝原の上で何かを食つていた。その挙動には興味があるので、ぼんやりとただ見ておつたのであつたが、彼が実際はこの小庭のために、害敵を退治してしてくれたのであつた。それが本年は朝日住宅その他、方々の普請ふしんがあつて、物の音が高く、新しい瓦かわらや

ペンキの光が空を射ている。あるいはまだご馳走の記憶があらうとも、降りて遊んで行く気にはもうなれぬのであらう。何だか知らぬが今年はずとも来ていない。その上に私の家では犬を飼いはじめたのである。

犬はこの芝生を以て自分のサロンと心得ている。しかも敷物の虫食いを少しも気にしない。そこでいよいよむく鳥が来ぬと決すれば、別に何かその労に代るものを求めなければならぬ。鶏などはどんなものだろうかとも考えている。鶏けいけん犬というから仲がよさそうなものだが、この近所には獵犬の後裔こうえいで、鶏を獲物と解しているらしき犬が沢山たくさんいる。だから飼うなら昔の山家の鶏のように、羽ばたきをして高く飛び上る種類を求めなければならぬ。

そうして日中だけは犬のいない片隅において、去年の椋鳥の代りを勤めてくれるとよいのだが、そういう在来種の卵が手に入らぬか、またはいくら鶏でもそう虫ばかり食わぬということになると、私の庭の芝は枯れなければならぬのである。

それからまだ雀と正月ということも考えているのだが、あんまり呑気のんきだから正月がもう二つもある年の話にしよう。ただ一言だけいとうと、この辺の雀は、文化住宅の生活にまだ馴れぬために、いわゆる改造の悩みに苦しみ抜いている。私の家だけは早くこの形勢を察して、軒ひさしの庇ひさしに五つばかりの巣箱を作つてやったが、雀が家いえ鳩ばとになるのは困難だと見えて、その半分はまだ空屋すきまのままである。そうしてどの家も雀の住むための瓦の隙間すきまを作らぬため

に、この村の雀は掛樋かけひに巣くつて、大雨の日には流れ落ち、または煙突の掃除をすると、三戸分ぐらいの巣が出ることも稀まれではない。それでいてまだ以前の林の木の生活には、還かえつて行こうという決心がつかぬかと思われる。人間はもう古い慣習を棄てようとしているが、雀や鳥等は妙に代りのものを作り設けたがる。そうしてそれにはまた何十代かの、新たな苦難を経なければならぬらしいのである。

鳶の別れ

交番で鼠ねずみを買上げることになってから、もうかれこれ三十年もたつたであろう。東洋の黒死病の歴史なども、この方面より筆を著けるならば文学になり得ると思う。鼠の価は最初は二錢、後に諸色しよしきの騰貴とうきと共に、改めて五錢と定められた。その間に暫く割増金附つぎの抽籤ちゆうせん券を以てもつ、鼠を引換えた時代があつた。自分の

友人に一人の好事家こうずかがあつて、こういう記念になるような紙切れを蒐集しゅうしゅうして、張り交ぜの小屏風こびょうぶを作ろうとして。吉原で發行する御遊興切符なども、品行方正なるがために最も採集に苦心をした。ある時金網の鼠捕りを買いたいというから、何で急にそんな事をするかと思うと、実はこの「鼠一匹」と書いた抽籤の番号札を、手に入れたためであつた。

七つ八つの小児が、長い尾をつまんで鼠をぶら下げ、交番の前に立つて巡査の顔を見ている光景などは、もう見る事が出来なくなつた。おまわりさんが来るといつて泣く子を嚇おどした時代から、一時は急転して飴屋あめやなどの如ごとく、警官に親しみを感じていた時もあったのである。

五錢に値上した当座であつた。東京市中には鼠を捕つて生活する職業が出来た。青山あたりには買上げてもらう目的を以て、鼠を養殖している牧場があるという評判さえあつた。それは話であつたかも知れぬが、つまりはその頃から東京という大都会全体が、一つの鼠放牧場となつたことだけは事実である。殊ことにペスト流行の兆候ある時ばかり、期間を限つて鼠の買上を実施することになれば、その中間の何年間の如きは、最も鼠算の繁栄に好都合な時であつた。人類をも包含する日本全国の動物中で、首都の鼠族ほど食糧に屈くつ托たくせぬものはないといつてよい。市民が投げ棄てる食物の余りは、彼等以外の者には到底とうてい底手の届かぬ、ドブや石垣の蔭にばかり、堆積しているからである。

猫入らずの害はとんでもない方面だけに顕あらわれたが、なお今一つの背後に隠れた影響があつた。やっぱり猫は入用である。猫ならば鼠を捕つて新しい中うちに食うから、自分も肥え太りまたその辺も片付くのだが、猫入らずでは天井裏や椽えんの下に不用なものが残る。それを片づけるのも主として鼠に任せてあるが、多分は甚はなはだ始末の悪いことで、結局は春秋の清潔法を、無意味なものにしてしまふだらうと思う。

田舎では田鼠の撲滅策として、久しい前からチブス菌せんぷを撒布することが奨励せられた。これは自然の結果、鼠の一族を殲滅せんめつして、打棄てて置けば化して土地の肥分ともなるであろうが、その筆法で町屋の鼠を始末するのは、看過すべからざる不始末である。

これを考えることなくしては殺鼠劑・驅鼠藥を売る者は、物売りとしては^{れいり}憐惻であつたかも知れぬが、少なくとも憂国の志士ではなかつた。

白昼に銀座の横町などを歩いていて、大きな鼠の走るのを見る
ことが、近年は次第に多くなつた。彼等が大古の土の中の安全な
生活に、復歸して行く傾向は著しい。これに比べると人間は旧弊
なもので、せつかくの鼠捕り器械と藥品、もしくは持つて来い引
取ろうという警察令が出ているにもかかわらず、今なお鼠を殺す
と埃溜めごみたの中へ、持つて行くだけの改良法も採用せず、依然とし
て百年以前の旧様式を墨守ぼくしゆし、これを表通りの街路の上にほう
り出して、車の輪の蹂躪じゆうりんに委ねゆだている。

教育というものは机・腰掛の中間に、子供を押込まなければ不能なるものの如く、考えたのは誤りであつた。単なる模倣を以て、なんびと何人からともなくかように無意味なる前代の斃鼠へいそ処理法を、多数の東京人は学んでいたのである。この方法たるや、かつて帝都の青空の中に、無数の鳶とびが輪を描いていた時代の遺物である。三馬の『浮世風呂』がもてはやされた世の中には、江戸はまだ一本の電線もなかつた故に、ゆえ京橋の鳶は能く小僧の揚豆腐あげとうふさえも、さらつて行くことがあつたのである。今日ではいかに勇敢なる昼鳶でも、またいかにうまそうな無毒の鼠が落ちていても、この無数の針金の間をくぐつて、これを拾いに町に降るやつがあるうか。それを一考して見ずに、鼠は町へ捨てるものだと今以て心得てい

る。実に驚き入った伝統主義ではないか。

第一にちよつと周囲を見まわしても鳶など一羽も鳴いていないでないか。広重ひろしげの世を過ぎてなお三四十年の間は、京橋・築地辺の河岸かし近くにも、材木屋があり竹屋があり、その材木のでつぺんなどには、鳶が羽を休め目を光らしていた。下品な鳶だと人が軽蔑していたのは、形ばかり鷹のように堂々としていながら、腐つたきたない食物をも念掛けて、齷齪あくせくとしてこれを拾つてあるくためであつた。今となつてはその好意は尊いものに感ぜられる。お城や山内の樅もみ・檜ひのきは、亭々ていていとして千年の緑を湛たたえているけれども、かつてこの間に静かなる居を構えて、首府の掃除役を一手に引受けていた彼等は、知らぬ間にいずれへか追ひ払われ、彼等

の活動を必要とした事情ばかり、かえって以前よりも更に痛切さらを加えたのである。進歩と名づけられる人類生存方法の変更には、しばしばかくの如き省察の不十分、また同情の欠乏を伴うていた。これを十分に考えて見ぬ以上は、今のいわゆる生活改良も要するに手前勝手である。

村の鳥

巣箱を始めて見たのは、大正六年に、青島^{チンタオ}へ遊びに行つた時であつた。あそこの公園は東海に面して、鳥の沢^{たくさん}山^{ドイツ}来^{さん}のような静かな小山であつた。それへ^{ドイツ}独逸が色々な山の樹を、日本から取寄せて植えている。巣箱はなくとも巢をかけるにちがいないと思うような処だつた。しかも巣箱をこういふ場所に設けて置けば、な

お一段と確かであろうと思つたが、今考えるとそれは誤りであつたようだ。巣箱を引掛けて置いて、それを忘れてしまふというところが、実は容易なことでないからである。

鳥にはこうして人間が始終気を付けているということが、かなり有難くないことらしい。だから木の香や刃物の香が新らしいうちは、人の家だと思ふから、覗のぞいて見ようもしない。一向いっこう平気なのは雀ぐらいなものである。私は支那から帰つてから、早速巣箱の話の内田博士などから聴き、またこれを実行しかつ友だちにも勧めたが、庭が小さいためか暫しばらくは皆空家であつた。

一人の友人は田舎にいて庭が広いので、何でも十ばかりも備え付けたらしいが、雀ばかり入りやがると舌打ちをしていた。ある

時は何だか変だと思つて、後の戸を開いて見たら、熊くまん蜂ばちが巢をくつていた。あぶなく刺される処だつたという。私は構わずほつたらかして置くに限ると思つた。

そうして自分の家の巣箱だけは、曲つても直さぬ位にして置いたところが、果はたしていつの間にか鳥が入り込み、しかもとつくの昔に立つてしまつて、もうその巢が腐れかかつていた。偶然にそれを子供が見出したのだが、雀ではどうもないようだ。頬ほ白おしろはこういう穴住居はしないし、四十雀しじゅうからならよく来るが、どうも小さい頃見た四十雀の巢ともちがう。鶯うぐいすにしては笹の葉が少しも使つてない。やつぱり雀かなアというような次第で、大よそ家主も先まずこれくらい無頓着むとんちやくであつたら、借家人も居心地がよからう

と、内心すこぶる得意であったが、よく考えて見ると、それでは何も巣箱などを、持って来てぶら下げて置く必要もないわけであった。

この砧村^{きぬた}へ移住して来た際にも、私は一応巣箱の問題を考えて見た。鳥が十和田湖^{とわだ}の姫鱒^{ひめます}のように、必ず放流せられた浜に戻つて来るものなら、何でもかでもこの庭に巣を掛ける仕組みをしなければならぬ。しかし鳥の故郷というものは、相応な広い区域であるらしい上に、少し物騒なら中途からでも立退^{たちひ}いてしまうのだ。私たちの見たいのは小鳥が小枝を運んだり、雛^{ひな}に通つて来たりするしおらしい挙動なのだが、それがこういう風では眺めていることが出来ぬのみならず、第一に箱の巣は真四角で、我々が見

たいと思つている小鳥の巢とはちがう。これはどうでも鳥が宿なしになつて、家が持てなくつて困るといふ場合に、彼等のために企ててやるべきことで、自分の楽しみにはならぬものと考えて、今以て巢箱は掛けずにいる。

ただし雀だけはまた別な取扱いをしなければならぬと思つた。彼等がこう殖えるのはよいことか悪いことかは別として、住居に困つてゐるだけは確かである。お互いの家が出来たら、次には雀の家のことも考えてやらねばならぬ。この辺の雀は勝手にちがうためか、時には実に無法な巢の作り方をする。雨樋の受口に藁などを運んで来て、雨が降るたびに直ぐに流れる。煙突の上に巢を掛けて煙がよく詰まり、ボイラーを焚いて見ると、落ちて焼け

死んでいたということも二度や三度ではない。全くこの節の新築には、軒にも庇にもひさし寄寓の場所がないから、こんなことをするのだと思った。それで最初に先ず鳩の箱の半分ほどなものを、東側の壁の上へずらりと並べて打附うちつけてやった。これは今でも利用し、また雀以外のものは利用していないようである。

次に燕つばめもまた年々苦勞をしているらしい。この村には燕は来ぬのかと思っていると、来ないのでなく高い空はよく飛んでいる。夕方に散歩をして見ると、作り芝の畠の上などを、虫を追いかけて何羽も飛びまわっている。雨あげくには真直まっすぐな新道を、低くどこまでも走って行くこともある。ただ巣だけはかける便宜がないから、どこの家を覗いて見てもかけておらぬのである。全くこ

の頃の建築は燕には不便だ。甲州あたりへ来る岩燕でもない、こんな新式の住宅地には入り込んで住めない。これは是非ぜひとも雀と同様に、そうしてなるべくは道に面した壁の上に、彼等の土の巢を載せる僅わずかな柵を作ることを、皆様にもお願い申したい。

この村が春の末から到る処、燕の児のチチチと啼なく村になったら、どの位またのんびりとした気分になるか知れない。私は今に二三の友だちと相談して、この燕柵の普及運動にかかりたいとも思っている。

他の小鳥の巣箱でも同じことで、一戸や二戸でそんなものを支弁しても、鳥の社会は我々のような個人的のものでないから、生活改良は行われない。どこでも行く先々に巣箱があつて、入ろう

と思えば入れるようになっていたら、そのうちにこの地方の小鳥の習性も少しずつは変り、高台はやがて小鳥の村ともなるかも知れない。雀もほつたらかし燕にも門戸閉鎖で、彼等が既に林か崖がけの下に、巢をくう小鳥に変化しなければならぬような状態で、単に小鳥の趣味から巣箱に珍客を招こうとしても、そんなことは私には知りませんと、小鳥の方でいうかも知れない。

小鳥の生活ぶりも、いつとなく大分変っている。巢の形なども地方によって、かなりな違いがあることは、私たちも実験している。この頃本になっている鳥の巢の写真などを見ても、鶯や四十雀のは私の見ているのとは確かに異なっている。材料や場所の関係で、巣箱にも入らぬ前から、彼等はもううちがった巢で我慢をし

つけているのである。人間は何でもする。弱い従順な小鳥位の生活を、変えてやる事が出来ぬわけではない。ただそれを自然と信じて、多くの人は変えられぬものと思つてゐると、私たちはまた余りにも孤立的で、たった一人で出来もせぬことを考へてゐるから、むだをするのである。天然も実は人類がその管理者だ。これから多くの集合の力で、計画してこれをもつと好いものに改めることにしなければならぬ。

しかしその案を立てるためには、やはり私のような愚かな失敗も経験である。今までして来たことは大抵は笑うようなくじりのみであつた。たとえばある季節には、暫らく小鳥がさっぱり来なくなつて寂しいことがある。多分食物の都合だろうと思つて、

粟^{あわ}を買つて来て机の傍に置き、思い出すたびに庭に出てそちこちに撒^まいた。そうして見ていると少年らしい雀が三四羽、さも面倒くさそうに下りて来てこれを拾っていると、直ぐにまたどこかへ行つてしまふのである。

こんな無益な手数は、少し考えれば掛けずとも済むことである。雑草の種子でも穀物でも、勝手に好みのものを選び食^えいが出来るので、言わば小鳥は台所をあちらへ移しているのである。人家の庭園へ来るのはそんなものが少なくなつて、殊^{こと}に繁殖の栄養のために、動物質の食餌^{しょくじ}をここで探すので、僅かな穀粒などは当てにしてはいないのだ。これが飼鳥と自由な鳥との、最もはつきりした生活方法の差別であるが、そんな事すら知らずに私などは、

ただ小鳥を愛していたのである。

めじろ
目白は籠かごに飼かわれると、熟柿じゆくしなどよりもかえつて薯いもを好んで食う。私は子供の頃の一冬、兄にねだつて薩摩芋さつまいもを一俵買つてもらつて、朝々その薯を一つずつ火に焼いて、半分は目白に、半分は自分で食つて暮くしていたことがある。目白の実家にはもちろん焼芋などはない。だから気楽に野で遊んでゐる小鳥は、焼芋を遣やるからといつても附ついて来ないのは当り前である。

またこの村へ来てからのことだが、春さき庭へ出て見ると芝の上に、真赤な青木の実がとんでもないところに転がっている、近い処では宅地の北の隅の二三本、ちようど出入口ではあるが、夜明けの静かな時刻に、鶉ひよどりがやつて来て啄つむらしいのである。それ

がこうして折々落ちているのを見ると、彼を招き寄せるには赤い木の実に限ると考え出した。

それから閑ひまじん人なものだから、懸命になつて赤い実のなる木を集め始めた。青木ばかりでも能がないと思ひ、またもう少しくちばし嘴の小さい小鳥も、このついでに招き寄せてやれなどと、虫のいいことをたくらんで、大よそ実のなる木なら何でも栽うえようとした。植木にかけてはむやみに慾が深いじやないかと、いわれたのもこの頃のことであつた。たつた二冬の経験だから確かでないが、同じ我々の眼には赤いというだけの樹の実でも、鳥の好みは色々であり、また鳥によつてそれぞれの趣味があるらしい。もつと沢たくさ山んに栽え比べて見なければ、目的に合わぬように思つていよい

よ慾を深くしている。

たとえばがまずみ茨

などはいいい色だが、どこで注意して見てもつい

ぞこれにたかっている小鳥を見ない。

なんてん南天

の実には鶉は花鳥の

画では附き物だが、うちの南天などはかつて省みられたことがない。梅モドキの実だけはたしかに人望がある。三四年前に庭に一

本の小さいのを栽えると、はや早その実をくわえて方々に落して歩く

鳥がある。こいつを利用してやれと思つて方々から買い集めた。

うしごめ牛込

の旧宅の隅に、篠竹の中にまじつて一本の梅モドキがあ

つた。暫らく気付かぬうちに大きくはなつたが、竹に押されてひよろひよろと一方へかしいだ、おかしな枝ぶりの樹になつてしまつた。それを持って来て庭の正面に栽えたものである。恰かっこう好は

なるほどよくないが、ちようどいいじやないか、あの横つちよの枝に鶉が来てとまつて、赤い実に恋々としている様子を見るにはといて、すこぶ頗る熱心な気構えで冬の来るのを待っていた。

ところがこっけい滑稽な経験というのは、せつかく今年はよく附いたと思う梅モドキの実が、僅かな間にめつきり少なくなっている。

ある朝早天にふと気がつくつと、窓の外に何やらばさりばさりという音がする。それが鶉鳥どのの朝飯時であった。少し小休みしてはまた枝移りをして、脇目もふらずにむさぼ貪り食っているのである。

そうしていかにも悪いことをしたように、昼間は遠くへ行つていて影も見せない。鳥にはどうやら遠くへ出て食事をする習性のあるものがある。こういうのに出逢つては梅モドキもやはり客引き

にはならない。

それでわかつたのは、この近村の路傍の家に、この木の美しく
実のつたのに、破れ傘を覆うているのがあつた。おかしな事をす
ると思つたが、こうしないと木は二朝か三朝で坊主になつてしま
うのであつた。東京の町内の三十坪か五十坪の小庭に、栽えてこ
そ梅モドキは風情を愛し得られる。たまたま紛れ込んだ鳥があつ
ても、きよときよと人に畏れておそ窓を覗き、ほんの二粒か三粒か
を取つて食うと、ぴいと啼いて飛んで行つてしまうので、そうい
う処にまたこの木の面白味があつたのだ。梅モドキは要するに市
中の愛玩あいがん用で、こんな広々とした村の庭に植えて置いて、赤い
実に日のあたる美しさを眺めよう、鳥も呼び寄せて楽しもうなど

という、虫のよいことを考えたのが誤りだった。

この村の身上は、何といつても高い数十本の雌松めまつおまつ雄松である。

やがてこれも減つて行くことだろうが、今はとにかく亭々ていていとして

て茂り栄え、またこの五六年にかなり大きくもなつた。私の家などは自分の地面には一本もなくて、落葉を掃く手数がなく、しかもどの窓を開けても正面に松があり、晴れた日ならばその木々に日が当たっている。そうしてこの樹の上で鳴く鳥は、庭へ下りて来る場合とちがつて、全く自分の在所のような顔をして、いつまでも同じ処で遊んでいるのである。お蔭で我々は色々の鳥の歌を覚え、また遠くからだがその挙動や姿勢を見た。春の末にはエナガが来る。コガラが来る。秋も暮れんとする頃には、以前は野外に

出てしか聴かなかつたカワラヒワの群が、終日ギイキリキリと啼いて遊び、時にはその透きとおつた羽根が日に照らされて見える。
椋むくどり鳥とか雲雀ひばりとかいう地面を恋しがる鳥は、もう段々退去したが、松のあるために枝移りをして、意外な野鳥までがめいめいの庭へ入つて来る。これを迎えるような新しい設備は、鳥を愛する人々の合同によつてでない^と実現されない。それにはまた案もあるのだが、余り一人で飛びまわるのも百舌鳥もずのよう^でいけない。百舌鳥は私なども実は嫌いだ。

六月の鳥

雲雀^{ひばり}は飛行機にはさまで苦しめられないが、いわゆる文化住宅には事の外閉口^{ほか}しているらしい。この辺の新築は、去年までの麦畠を乗り取ったものが多くそうして白く青く絶えず光って、彼等を寄せ付けまいとしているように見えるからである。渡り鳥なら二度と再び、こんな処に来るものかと、どこへでも引越してしま

うだろうが、雲雀だけは余りにも巢立った土地をよく覚えてい
それで同じあたりにもまた自分の児を育てて、毎日その巢の見える
空ばかりで、啼ないていようというのだから気ぜわしない。この夏
も方々に大工の音がする。止めたり立ち退いたり、子なしで暮ら
してしまふ雲雀も多いのではないかと思う。三四年前まではこの
屋根のほぼ真上で、終日啼ないているような日も時折はあつたが、
近頃は二階の南の小窓をあけて、目をさまして寝ている明け方な
どに、斜めに遠くからその声が入つて来るだけになつた。日中は
賑にぎやかな雀の鳴きに紛れてしまふ。少し横日になると杖を携えて、
一人で雲雀を聴きに出て見ることもあるが岡の端まで行くと下は
一帯の水田で、その向うにはまた隣村の同類が啼ないている。こち

らの雲雀は段々に狭くなる畠に我慢して、どうにか普通りの生活を続けようとするらしいのである。

よしきり

行々子は最初から、人の来ぬような不毛の地に拠つて、孤立の平和を保とうとする様子が見える。同じ岡つづきの僅わずかな沢に、水がじめじめとして周囲は杉、中は一面に蘆あしより外ほかの草の生えなような土地がある。獵友俱樂部クラブがその片端を使つて、夏分の射撃の練習場になっている。静かな番人の親子が野鴨のがもの子などを飼っている。そこまで出かけぬとこの鳥は聴くことが出来ない。通例五月のなかば、この蘆の芽のまだ若々しい頃に往いつて見ると、ただあちこちと雀などのように飛びまわつて、一いつこう向身を入れて囀さえずろうという様子がない。それが月を越え蘆のたけが伸びて、葉ず

れの音がさらさらさらさらとするようになる、あたかもその音を威圧するかの如き調子で、巢を持つ限りの葦切よしきりがかわるがわる鳴き立てるのである。ケケシや行々子ぎようぎようしという名も面白いが、ヨシキリという語もよく観察してある。何だつてこのように高い声を出すのか。人に聴かせるならもつと出て来てもよいに、自分はこんな谷陰の蘆の中に隠れて、しかも悠揚ゆうようとした挙動で澄まし込んで啼いている。雲雀とは豎横たてよこの差はあるが、これもやつぱり遠くで聴くように出来ている鳥であつた。殊ことに月のある夕方などに、一望限りもない村の外の蘆原で、永い一日がかりでもまだ啼き切れなかつたように、さも物々しく啼いているのを聴いて、昔の人たちが空想を描いたのも、私だけには理由があるように思

える。どこの田舎へ行つても行々子には昔話がある。首を切られた下郎の魂がこの鳥になつて、いつまでも同じ最後の悪口雑言を、くりかえしているように伝えられるのは、滑稽こっけいなようだが考えて見ると淋さびしい。

つばめ 燕はこのあたりでは宿をしている家がどこにもない。農家も折々は氣を付けて見るが、燕が土を持つて出入りする様子を見かけない。それでいて空の晴れた午後には、高いところを冴えた声で、元氣よく飛んで行く姿を見ることもあれば、時には芝作りの広い畠地の上を、羽虫を求めていつまでも飛びかわしていることもある。往来には人と同じように、道路を利用する癖がまだ残っている。自動車を通つたばかりの後の土埃つちぼこりの中を、さも用ありげ

に走つて行く影を時々見る。現在の住居は寺の堂か、お宮の軒の下などに限られているかと思うが、これだけでは追々おいおいに来なくなるだろう。巣箱を設ける位な人はこの鳥のために、今の内に壁へ板でも出しかけて、少しは親切を示してやってもよいと思う。

電線はこの頃では燕はとまらず、ただ頬ほお白しろばかりが利用している。大きな松の木などもあるのに、わざわざ窓に近い針金の上にとまって、時々は一時間も囀りつづけていることがある。多分は遠くの見える処を好むからであろうが、我々には何か人間に親しみたい風に見える。この鳥くらい物おじをせぬ快活な鳥はないと言った人があるが、なるほど冬のさ中にも里から遠くへは去らず、いつも路傍くさむらの叢の上ばかりを飛んでいる。アオジも遁にげない

鳥で、「婆たらし」などの異名があるが、これは声も羽の色も共にじみで、おまけにこの辺では妻問いの季節になつても、高い枝に飛び上つて囀ろうとしない。これに反して画眉鳥ほおじろの雄ばかりは、家庭を女に任せていつでも歌っている。そうして巢のある処から、かなり遠くまで出てあるくようである。

私はこの節朝早く目があくので、改めて雀の言葉を調べて見ようとしている。それにはこの季節が一番都合がよく、冬はただ一群の村雀となつてしまうものが、今は明あきらかに老若男女の区別を立て、その間の交渉が最も複雑になつている。僅かばかり庭をひろげてまだ家も建てず、やたらに木を栽うえたら虫を多く生じて、雀には都合のよい楽園となつた。子を養うためには滋養物が入用な

ためか、または気にいった動物質の食料が夏は豊富だからか、粟あわを撒まいて遣やつても嬉しそうな声は聴かない。ただ児雀くちばしが嘴の練習のように、時々おぼつか覚束なく拾いに来るだけである。それをまた親鳥が周りに来て、世話を焼くことは人間以上である。そうかと思うと一方では、近くの屋根さきや木の上で、二番子三番子の談合をしてゐる者も幾組がある。あるいは仲間で争いをして、はしたなく罵ののしり合い、そこへ何かが来るとそら来たと遁げて行く等、彼等の個性と表情は、目下最大限度にまで展開せられている。しかも夜のしらしらと明けて、爽さわやかな微風が緑の葉を揺ゆるがす時刻だけはどれもこれも約半時ほどの間、同じような緩ゆるい調子で同じ一つの音を上下している。それを聴いてみると人間のもう忘れてしま

つた独り言、^{ひと}即ち^{すなわ}「今日もまだ生きている」という自我の意識を、自ら問い自ら答える習慣が、ちようど我々のラジオ体操のように、まだ雀たちの間には行われているということが考えられる。

須走から

裾野すそのの会から還かえつて来たたら、何だか急にうちのまわりの鳥の聲が、多く新らしくなつたような気がする。次の早朝例の通り窓をあけて寝ていると、先まずカワセミが小さな外庭を啼ないて通つた。この丘の両側にある若蘆わかあしの原まで、出かけて聴くことにしていた才オヨシキリが、僅わずかな間だが地じざかい堺けやきの櫛くしの樹きに来て啼いた。

あれがクロツグミだと教えてもらった鳥が、あたかも復習をして
 くれるかの如く、路の突当りの大きな赤松の上で、丁寧ていねいに何度
 も何度も囀さえずっている。それよりもっと有難いと思うのは、永年
 問題になつていた私の時ほととぎす鳥が確定したこと、次にはまた七八
 年も前から、初夏の夕方には時々家のまわりで鳴くのを、雨あまがえ
 蛙るの一種かなどと思つていたのが、ヨタカという鳥の声だとわ
 かったことである。これも日数がたつとまたぼんやりとしてしま
 うのだが、幸いに早速次の晩は遣やつて来て、いよいよまちがいの
 ない、お手本通りの啼きを聴かせてくれた。年を取つても教育の
 機会は案外あるものだ。

全体に今までは聴きようも粗末であつたように思う。私の家で

はつい一月ほど前に、小さな餌箱えさばこを樹の蔭に置いて、粟あわを一ぱい入れて小鳥を誘うて見たが、雀はこの季節にはあまり穀食をせぬらしく、他の鳥も最初は一向いつこうに顧みない様子であつた。それが旅から還つて見るとすっかりからになつてゐる。お客はどうやら鸚類ひわが多いらしい。彼等の啼声が以前空を飛び、または喬たかい木の枝に休んで、仲間を待ち合せる際に発していた声と、この頃は大分ちがつた囀りを交えるようになった。あるいは家庭生活が始まつたか、または複雑になつたためかも知らぬが、とにかく囀るといつてよい位に、啼き方が悠長にまた面白そうになつた。そうして一つ処に翼を休めて、いつまでも啼いてゐるようになったのは、食物の安心からであろうと思う。富士でもそういう風に啼い

ていたよと、いつてやりたいような場合が毎度ある。私は少年の頃に、マヒワのよく馴れたのを一年ほど飼っていたことがある。カワラヒワの方は群れて飛んであるくのを見ていただけで、その大小の二種を聴き分けることは出来ないが、この頃ここへ来るのはずっと小さいから、多分は須^{すばしり}走で出逢ったコカワラヒワの方であろうと思う。それとマヒワとが餌箱以来盛んにこの小庭へ遊びに来て、絶えず裾野の一日を、記念させてくれるのであう。

今度の旅行には、精良な筆と絵具とを携えて、行かれた人が幾人もある。あの神秘に近い林の底の浅緑、雨に湿った火山の黒土を、飾り立てている色々の卵の宝玉などは、これは既に散文の領域でない。私たちの役割に残されたものは何かがあるかと思うよう

だが、幸いに因縁があつたからコカワラヒワの一些事さじを記録して置こう。須走の村の片端に、くぬぎか何かの大木が路を蔽おおうて、その高い梢こずえの三つ叉またに、サンシヨウクイが巢を掛けていた。それを見に行つてやや暫しばらく頸くびをそらし、色々評定をしてさて歸つて来ようとする、路ばたの人立ちの中から、杖をついた婆様が一人出て来る。この木にも何か巢があるようだと言つて、自分の家の出入口の、二丈余りの杉の茂つた枝を指さす。高田の昂さんがまるで若い者のように、靴をぬいで早速登つて行くと、だまつて一羽の小鳥が東の方へ飛出して行く。それがコカワラヒワであつたのである。雛ひなは昨日あたり孵かえつたかと思われるのが四ついたという。あれから半月以上にもなるから、もうまた大分成長し

たことであろう。ところがこの婆さんは子なしであつた。家も建てかえたと見えて、大きな屋敷にやや不似合な、かりぶしん仮普請のような小屋になっている。夫婦養子をしたが夫婦とも出稼ぎに行つてしまつた。そうしてただ一人、杖をつきわらぞうり藁草履をはいて、コカワラヒワの巢の下を出たり入つたりしているのである。裾野の林は広く、住心地のよさそうな緑の樹は多い。それにわざわざ村の中の、こんな小さな家の小さな木の枝に来て子を育てるのは、どういう心持であるか私にはよくわからない。果して食物がはたこの近くなら得やすいためか。それとも寂しそうな婆さんが一人にいるから、往いつて少しばかり啼いてやろうという好意でもあるのか。うちのコカワラヒワに尋ねて見たいような気がする。

雀をクラということ

一

雀をスズメと呼ぶのは古来の日本語で、それと異なるものは即すなわち皆方言と考えられているらしいが、比較によつてその速断の誤りであつたことが知れる。

現在のところでは日本海地方の一部、即ち石川富山の二県と、

越後の海上の粟あわしま島などに限られているが、以前は日本の弘い区域にわたって、スズメは一般に今いう小鳥の総称であつたらしい。トリという語は本来食用の鳥類、主として雉きじ子のことであつた。それ故ゆえに今でも鶏をトリといい、またニワトリともいうのである。漢字ではむしろ禽という方が当つている。ウオという語もこれと同様に、食用に供せられぬめだか丁班魚などには及ばなかつた。それがコトリと小の字を添えて、弘く雀の類を総括するまでには、若干の新しい推理を必要とする。だから小鳥にまた別の名があつても不思議ではないのである。

文献に現れたスズメという語とても、果はたして最初から今のスズメを意味していたかどうか、まだ必ずしも確實でない。これは雀

という漢字もまた同様である。スズメを弘く小鳥の意味に使った痕跡こんせきは、気を付けて見ると方々に遺のこっている。例えば東京などでもスズメカゴといえは小さな鳥籠とりかごのことで、時々は雀も入れるまでであるが、コトリカゴという語が出来ているために、こちらには特に粗末なものだけをそういうようになった。しかし能登のとや越えつちゆう中の村々では、総すべての小鳥籠をスズメカゴといって、他の名前はまだないのである。それからなお多くの府県を見渡しても、今日のいわゆるスズメのために、特に接頭語を副そえて他の小鳥と区別することを必要としたらしい形跡は幾らもある。その著しい例を拾って見るならば、

マスズメ

石川県河北かほく・石川等

マスズメ

千葉県望陀もうだ

マスズメ

神奈川県戸塚辺

マスズ

茨城県那珂なか・行方なめがた

これはマトリといえわしば驚おどろであり、マキといえらば羅漢松らかんしょう、もしくは土地によつては薪たきぎのことを意味すると同様に、つまりは最もよく知られている一種のスズメということで、やがてはまた単にスズメとだけいっても、この小鳥を指すようになって来た路筋を示すものである。

日本鳥学界で編へん輯しゅうした『狩獵鳥類方言』の中には、この類

の方言の十數種が載せられてある。それを一々ここに引くのは無益だが、

サトスズメ

秋田県仙北郡せんぼく

ノスズメ

千葉県海かい上郡じょう

シバスズメ、ニワスズメ

同 香取郡かとり

イエスズメ

愛媛県北宇和きたうわ

ノキスズメ

同 宇摩郡うま

の類は、特にこの小鳥が農村と交渉多く、従つてその名がマスズメともなり、またただのスズメともなつた事情を語るように思う。この中でも、千葉県はとりわけ雀と親しみを持つ人が多く住んでいたと見えて（これには必ず理由があることと思う）、まだ色々の方言が行われており、それがまたある程度まで、遠く離れた富山県などと似ている。例えば上総かずさから北へ、利根川とねを渡つて茨

城県の一部まで、雀をノキバという村が沢山たくさんある。これは疑いもなく軒端のきばスズメの省略であつて、他には紛れる語がない故に、暫しばらく言い馴れて後に、後を切つて簡単にしたものである。ところが北国の方でも婦負ねい・射水いみずの二郡の境では、雀をノキバノオバサンなどという処があるのである。毎日毎日家の軒に来てとまつて、口やかましく囀さえずるところから、子供や女たちがいつの間にか、戯れに名を付けることになつたのだらうが、これはそう古くからの事ではなからうと思つている。

雀だけではないが富山という県は、妙に一つの動植物に色々の方言を付与する風がある。もちろん一人または一家一村で、その多くの名詞をかわるがわる使用してはいるのではなく、単に隣同士

の部落が、別々の言葉を持っているというだけであろうが、それは要するに弘い区域にわたって、一つの用語が確定する以前から、即ちスズメという語に一致するより前から、この一種のスズメに何か特別の名前を与えたいという人たちが、僅かな仲間限りで色々と呼んで見た結果であつて、むつかしく言うならば言語の発達に比べて、住民の心の働きのほうが、一足前へ進んでいたということになるのかも知れぬ。

沖縄県などは離れ島が多いから、やはりこういう標準語の欠乏から、地方限りの新語を多く作っているのも自然だが、内地の方でも処々に孤立して、こうした現象を呈するのは注意すべきことである。富山県については田村栄太郎君が、興味を以て多くの実

例を集めてくれた。それを試みに自分の考えで整理して見ると、大体三通りか四通りの命名動機が、入り交つて働いているように思われる。その一つは雀の服装から出た名前前で、高岡市のバンドリスズメがそれである。バンドリとは藁わらで製した一種の蓑みののことで、雀の毛の色とむくむくした様子とが、あたかもバンドリを着ているように見えたからそういうと考えられている。これから転じてはバンチクという村もあり、伏木ふしきの港に行くとき普通にはバンチャといっているが、チクとかチャとかは多分啼なき声こゑに基いたあだ名の如ごときものである。次にはこの県の氷見郡ひみから、能登半島にかけてポットスズメという小児語がある。自分の推測では、これは同じような観察から出た語で、蓑でも着たような丸くなった

姿が、特に他のスズメ（小鳥）と違っていた故に、これをポツトスズメと呼んだものと思う。これと聯れん想そうするのは神奈川県の三浦郡などで、今でも雀をフクラということである。フクラスズメの語は既に謡曲の「放ほう下か僧そう」の歌にも見えており、普通には冬の雀がまん丸くふくれている故に、この名が出来たものと考えられているのである。しかし単語の新作は随ずい分ぶん複雑な心の働きであるから、必ずしもたった一つの事由から、始まったものと断定することは出来ない。殊ことに幾つとない異称が周囲の地に行われ、どれかその中の一つを採用しようという場合には、暗々あんあん裡りにその選択を左右した微細の力があつたことは確かだが、自分の観た所では言語には変化の痕跡があつて、今あるものについてその元の

力の何であつたかを、ある程度までは推測することが出来るようである。例えば右にいうフクラスズメの如き、これが人望あり従つて永く残つた理由は、単に他の小鳥の形の引締まつているに比べて、雀ばかりが蓑でも着たように丸くふくれている特徴を、適切に形容したからというだけに止とどまらず、別にまた口の脇が黒いから（一）、及びクラという名前が昔あつたから（二）という事情も、手伝つてゐることは明かあきらかであるのみならず、始めてこの名が出来た時、この名を付けた人の心持は、必ずしも今これを使用する人々の想像しているものと、同じであつたかどうかも確かではないのである。

方言はかえっていずれとも解し得るような種類のものが、久しく保存せられるに好都合であったのかも知れない。今一つの例をいえばバンチクとバンチャは、明かにバンドリスズメの変化であり、そのバンドリは雀のことであつたが、これが行われるには他の一方において、同じ富山県の北の方の境に近く、ババスズメあるいは訛なまつてバワスズムなどの語が流行していたことが、間接に声援していたものとも考えられる。

あるいはこの反対の側から、バンチャなどという語が既にあつたために、婆雀などの名が新あらたに出来やすかつたとも考え得るが、

後者についても別に前に挙げたノキバノオバサンなどの例があつて、決して他の一方から誤り転じたものでないことだけは確かであり、言わば二つの根原から、こんな語音の採用が有力に支援せられたのである。あまり話が長くならぬように、表によつて互いに縁のありそうな語を比較して見ると、

バンドリスズメ

越中高岡

バンチャ

同 伏木

バンチク

同 氷見その他

ババスズメ

同 しもにかわ 下新川郡

ノキバノオバサン

同 婦負・射水一部

オハグロスズメ

同 婦負郡以東

クチグロ

同 富山市

ヘソクロ

しもうさゆうき 下総結城・しもだて 下館

ヘソクロ（ヌキバ）

上総夷隅郡

イジクロ、イジワル

同上

フクロ

下総匝瑳郡

フクラ

相模三浦郡

即ち最後のフクラ、フクロの如きも、こうして並べて見て始めてほおぐろ類黒の意味であるかの想像も起るので、それがまた他の類似の系統を立てると、必ずしも最初からの理由であつたとも速断おおいが出来なくなる。将来沖繩県の人たちが、その学問を携おおいえて大に遠征しなければならぬゆえん所以である。

以上列記した雀の方言の中で、殊に単独では何のことか解らぬものは、東上総のイジク口とイジワルであるが、それは多分この小鳥が、人前も構わず口くちやか喧ましく囁りかわすからで、黒いということが元來感心せぬ形容であつたところから、一段とその誇張を促したものであろう。バンチャ・バンチクも人柄のよい老刀とじ自たちには気のどくな話だが、つまりは女性の中でも一番遠慮なしに、よく物をいう人だという心持が、その流行を助けたという点は、双方同一の傾向といつてよい。富山県でも南部の出町附近でまちでは、クソズメという名さえ行われている。そんなにまで馬鹿にせずともよかろうにと、雀を見るたびに私は笑止に感じる。

それからこれに伴のうて先まず思い浮ぶことは、雀の特徴を口達

者という点に見出そうとしたのは、決して内地の一部分のみではなかつたということである。九州以南でもいわゆる道の島々では、

ユムンドウリ、ユムンドウラ等 大島

ユンドウラ、ユンドウリ等 徳之島

ユンドウリヤ、イロドウラア等 喜界島

ユムドウイ等 沖永良部島

その他これに似通うた方言が分布している。久高くだかの島でもクラグワの他にまたユムルヤー、名瀬なげではまたヨメンドリともいう人があるそうであるが、その起原は正しく「読む鳥」、即ち「口の達者な鳥」に出たものである。ヨムという日本語は、漢字でいえば読よりも誦の方に当っていた。聴く人に聞かせるために声を揚

げて、会話以外の調子を以て述べ立てることであつた。軽蔑けいべつの心持はないまでも、この点を普通でないものと見ただけは確かである。前にもいう如く、小鳥をトリといい始めたのは古いことではないから、これはクラよりも後の改称であろうが、とにかく以前以前の島々の社会において、ヨムを以て職業にした人が何であつたかを考えたら、雀を婆様といつた地方の人の心持も、そう意外ではないと共に、他の一方にはそれが決してこの頃になつて、僅かな人の機智考案によつたものでないことも、追おいおい々にわかつて来るわけである。

その証拠として第二段に述べて見たいのは、雀または小鳥全体をクラと呼んでいた名残かとも認められるイタクラという一種の方言である。私が始めてこの一語を発見したのは、森彦太郎君の『南紀土俗資料』であつた。和歌山県の日高郡、殊に山路さんじと称する山中の村々では、スズメといえは我々のホオジロ（画眉鳥）のことで、鶯うぐいすをホケジロといい、雀は即ちイタクラと呼んでいた。それから後に気を付けて見ると、この名称は決してある山奥だけで突発したものでないことがわかつた。例えば

イタクロ

紀州かいそう海草郡

イタクラ

同 西牟婁郡にしむろ

イナグラ 同 南牟婁郡相野谷おのだに

イタクラスズメ 大和十津川等

イタツクロ 同 吉野郡北山

イタクラ 阿波祖谷山あわいややま

この終おわりの祖谷山は、美馬郡みまの土佐に接した山村で、偏鄙へんぴなためにかえつて有名な土地であるが、ここまで行渡っているのを見ると、あるいは一度中間の平地にも、この語を使った時代があつたのかも知れぬ。

それから沖縄県にはいるかどうかは知らぬが、雀の一種にニユウナイスズメというのがある。関東東北ではワタリスズメ、静岡県でタビスズメ、近畿地方でセンバスズメ、中国九州でホウライ

スズメ、またはムレスズメといい、『言海』には支那で黄雀こうじゃくというのほっがそれだとある。この方は頬ほっぺたに黒斑がないから、ニユナイのニユウは即ちこれを意味するかと思っている。大和でも柳やぎゅう生地方、及び四国西部の東宇和郡の山村などは、このニユウナイのことをイタクラスズメといっている。しかし東京を始めとして、二種の雀の区別を知らぬ土地は多いから、一方のイタクラを誤りともいわれない。つまり相応に古くから、雀をイタクラという日本語は存在し、後々他の名称に取って代られて、やや交通の不完全な山地にばかり元の名が残っただけである。

右の弘い地域にわたってイタクラという方言を知って、今一度考えて見たくなるのは東上総のイジクロ、それから変化したかと

思うイジワルという語である。人は折々古い物の名を保存しながら、その本意が少しく不明になると、いつとなくこれを自分の智識の領分に引張り込んで解こうとする傾きがあつて、そのためには僅かずつの語音変更は常に行われている。雀のイタクラなどもあるいはそのためにイジクロといいかえられたのかも知れず、またそのままにして置いても、板倉・稲倉に来て住む故に、こんな名が出来たものかと思つている人があろうも知れぬが、もしそう思つてゐるならば解釈だけの近代化である。

自分の考えた所では、イタクラの名の起りは道の島のユムンドリと、全然同じ心持から出たものと見て、さしつかえ差支がない。奥州の田舎に今も多く住む盲目の巫女ふじよ、土地によつてはゴゼといい、ワ

カといい、またはモリコともオカミサンともいう者を、南部と津軽の各郡ではイタコという。沢山の物語を暗記してこれを読誦するのが本職である故に、あるいはアイヌ語のイタク（語る）という動詞から、成長した語とも考えられるが、足利時代の終頃までは、関東はもちろん京都の周囲にさえ、やや似た境遇にある者でイタカという部曲かきべがあつたこと、それから推して行くと上代において板拳と書き、後々市女いちめまたは一の御子みこなどと呼ばれた、神に仕える一種の女性があつたのも、同じ系統のものらしく、あるいは我々の国語の方にも、今の琉球りゅうきゅうのユタなどを包括して、もとそういう語が存在したように思われる。

この事はもう久しい以前に、『人類学雑誌』に詳しく述べて置

いたが、現在でも自分の意見は変わらず、またこれに対しては別に反対の説を表示した人もなかった。すなわちこれを雀の場合に当てていうと、イタカまたはイタコの如くよく物いうクラだからイタクラと、これを名づけた人がかつてあるということに帰着する。

四

クラという名詞が、本来漢字の雀の如く、また北陸道のスズメと同じく、少なくとも内地においては弘く色々の小鳥を総括していたらしいことは、つばめ燕をツバクロまたはツバクラというだけでも一つの有力な証拠であるが、紀州の串くしもと本ではせきれい鶺鴒をチンチク

口、鹿児島県の一部では、雲雀ひばりをシヨクレもしくはシヨクリというとしてそれの方言集に見えている。この三語ともに、前半は啼声の形容であつたらうと思う。それから今一步類推を進めるならば、シジユユカラ（四十雀）などもいずれの辞書にも説明に困つてゐるが、単にシジユウと啼くクラというまでで、それによく似た五十雀ごじゆうから・山雀やまがら・小雀こがら、いずれも雀の字をガラと訓よんでいるのは、クラと原一つであると見て大抵たいてい誤りはあるまい。

そうすると自分が前に列挙した今の雀の方言の、オハグロ・クチグロ・フクロ・ヘソクロという類も、仮に口の脇の黒斑を見て、これに名づけたものとしても、既にこういう下染のあつた以上、なおさら覚えやすくまた学びやすかつた道理である。

そこで問題は既に一つの結論に到着した。私は最初からこの程度以上に、沖繩の言語研究には干渉せぬ考えであつたが、ただ一つだけ^{あらかじ}予め答えて置くべき小問題が残っている。それは沖繩にクラがあつて、スズメがどうしてないかということである。その答としては必要がなかつたと言つてもよし、流行しなかつたと言つてもよい。とにかく現在ないということは、必ずしも知らなかつたまたは最初からなかつたという証拠にはならぬと思う。

この点は雀を他の小鳥と差別するために、ノキバズメとかオハグロスズメとか呼んでいたものが、後に半分でも通用することが^{あきら}明かになると、一方は単にノキバまたはオハグロといい、他の一方では弘くスズメといつてゐるのと、同じ事情であらうと思う。

クラは発生の時代がスズメより古いか知らぬが、それを証明するにはまた別の方法が入用である。単に早く分立した南北の方言に、共通していたというのみを以て、そう推定するわけにも行くまいと思う。

そこで更さらに進んでスズメという名の起りを考えて見るに、これも啼き声の形容に始まったことは、大抵疑いがないようである。千葉県にも不思議な位雀の方言が多く、香取郡のある村では、別にまたジャツチクラともいうと、『香取郡誌』の方言の部に見えており、それから利根川を渡つて茨城県の東南部にも、同じ名前で行われていることは、明治四十年七月の『風俗画報』に見えている。自分はそれよりもまた二十年ほど前に、この大川のやや上

流の地に二年あまりいたが、確かに雀をジャツチとっていたばかりでなく、それがいかにも適切な名のようにも感じていた。

鳥の声などはいかようにも聴かれる上に、人が一たび名を付け聴きようを定めてしまうと、後にはかえってその方に引付けられることは、ふくろう梟の方言の諸国それぞれに異なるのを見てもわかる。

近代の都会の子供は、

雀はちゆうちゆう忠三郎

などと唱えて、大抵チュウと啼くことにしているが、自分の生れた播磨でははりまチュンチュン、福島県以北ではチンチンと聴くのが普通で、その形容がやがては小児の間に、雀の名詞として通用することにもなったので、ジャツチクラはまたその一つの例というま

でであった。現に同じ香取郡の一部から、隣のそうき匝瑳郡にかけて別にまたジチリユウ、もしくはジチリという名もあつたことが、鳥学会の方言集には見えている。なお地方のこれに似た例を挙げるならば、

チンチラ

羽後田沢湖付近

チンチ

信州さく佐久及すわ諏訪

チユウスケ

讚岐なかつたど仲多度郡

チンチン

肥前北松浦郡

ツンツン

同 大島

シユウメ

同 ごとうみいらく五島三井楽

シユイメ

同 かみきしく上岐宿

シーナギ

常陸いなしき稲敷郡

スズネメ

同 久慈くじ・多賀

などの如く、最初はただ小児等の不完全なる形容の差異が、地方地方に偶然の変化を与えたので、その中の一つが夙はやく文献の支援を受けて、標準語の地位を占め他を改訂する力を具そなえるにいたつて、ここに始めて永く活きる言葉と、次々に變つて行く言葉との二段の差別が生じたというのみで、それだけではまだ古き新しさの標準とするに足らず、一つのある処には他の一つがなかつたという証拠にもならぬかと思う。

五

現に沖縄の各地においても、内地と共通に現在の啼き声を以て、雀の名を作ろうとしている傾向は見出される。私の知っている二三の例をいえば、

チヨチヨグワ

くにがみ 国頭郡本部渡久地

チヨチヨイグワ

なご 同郡名護

チヨチヨログワ

なかがみ 中頭郡中城

マンチヨウジ

へんざ 平安座島

マシヤガマ

みやこ ひらら 宮古島平良

これ等ももちろんあどけない者の所業であつて、それは本当の語ではないという人がまだいるか知らぬが、その子供が親となり

祖父母となる頃までには、実はどうなつて行くかわからぬという理由は、人が動物の最も顯著なる特徴を捉えて、その名にしようという心持だけは、千年も二千年も一貫して聊いささかも變つておらず、絶えてはまた起りいずれこの辺のところばかりを、往いつたり來たりしているに違いないからである。

ただしそういう内にも聴き方かたには古今の差が生ずる。チュウとかチンとか啼くものと思つている今の人々には、ジャツチクラやジチリュウという語が異様に感じられると同じく、あの声がスズメとは聴えそうにもないということを疑う者は、もう再びこれを以て雀を形容しようとはせぬであらう。この点は狗いぬの聲こゑ雞にわとりの声を、異人種がどう聴くかということと比較して見ても解ることで、土

地と時代には定まった一つの耳の働きがあるから、これによつて判別すれば自然に新旧の異同も明かあきらになつて来るのである。そうするとスズメが今日の聴き方よりも一つ古いということが言える如く、クラはまたそれよりも更に前のものだったという推測も成立つかも知れぬ。

クラが雀の啼声から出た証拠は、幸いにして沖縄には残つていた。さきまこうえい佐喜真興英君の『南島説話』に、奥州北陸にも伝わっているところの炭焼長者の物語の一例を挙げて、雀が次のような歌を以て女房に未来の幸福を教えたという話を述べている。

クル、クル

くまねすだからん

やんばる山かい

炭やちぐらかい。

即ち南の島の昔話の雀は、ついこの頃までもクルクルと啼いていたので、それからクラという名前が始まったということが知れるのである。

内地の方でもこの鳥のけたたましく啼く時は、蛇が出たとか、大鳥が渡るとか、何か異常の場合であつた故に、これを一種の占せんんぼう方のように考える風は今も処々の田舎にあり、またあるいはあの囀りの言葉がもしわかるものならば、必ず意外の智慧ちえであつたらうという想像は、種々なる説話の上にも働いているのだが、クラがその根原をなすことまではもう記憶している者はなく、従つ

て別に新たなる聴きように基づいて、スズメ以後の多くの名を作ったのである。だからもし二三の内陸の山村に、偶然にこの古風が保存せられていることを知らなかったら、あるいはいつまでもチエンバレン氏等と共に、南北言語の一致を看過することになつたかも測られぬので、この意味からいうと私の発見も相応に重大なものであつた。

これに基づいてなお考えて行くべきことは、同じ一つの民族でも時により処につれて、かつてクルクルと聴いた声を、スズともチンチンともジャツチとも聴く位に、我々の形容な大ざっぱなままた精確でないものであつたのである。それは恐らく蓄音機の如く正しく伝えようというよりも、むしろ面白くまた快く聴取ろうと

いう要求の方が強かつたため、言わば音響に対する人の趣味の
 ようなものの変遷であつたのではないか。雀に比べると親しみは
 遙かにはる少なかつたが、村の林に來た小鳥はさまざまで、到底とうていそ
 の一つを以て代表させることは出来ぬはずであるにもかかわらず、
 現にクラでもスズメでも、今なお総称の如くに用いられる土地が
 多く、殊にこと我がしゅう執のない童兒の群にあつては、何度でも立戻つて
 こういう不精確に甘んじようという風のあつたことは、畢ひつきよう竟
 する所単語は符号であり、相手の了解する限度において、むしろ
 智巧よりも簡易とうとを尚んだためであつて、これが恐らくは譬たとえとか
 綽あだな名とか諺ことわざとか称する小さな文芸との、最もはつきりした一つの
 堺線であらうと思う。

ここでその話をするに脱線かも知れぬが、物を面白く言おうとする人の心持と、なるべく手軽に用を弁じようとする念慮とは、多くの場合において相闘っている。ある一つの語を選んでその他のものを棄てることが必要ならば、このように次から次へ、新たな語が起るわけではないようなものだが、実際は前にも多くの例を挙げた如く、いつの間にか土地土地の用語は変り、その中には確かに意外なる新作があつた。即ちただ交通の目的のみには、原形の保守はあるいは最上の便法であつても、人は一方に珍奇なるものを楽しみたいような余裕があつて、機会のあるごとに流行を容れたのである。別の言い現わし方を用いるならば、方言の起りは一種の技術であつた。従つて必ずしも外部から感化を受けずと

も、時の経過によつて昔あつたものを一変し、ちがつた言語と見えるまでに、外形を改めてしまふかもしれない。そうして細かな比較考慮によらなければ、その歴史は知ることがむつかしいのである。

とにかくに我々には古語というものは幾らもあるが、安心して最初の語と信じ得るものは一つもないと思う。いわんや古いから正しいとか善いとかいうに至つては、迷信以外の何物でもないのである。イタクラ・ツバクラのクラが昔の人の聴き方であつたとすれば、スズメやツバメのメもまたそうかも知れぬ。そんな声には聴えそうにもないというときは、ツバメもスズメも同様であるが、こちらは擬声と解するより以外に、別の意見もないらしいの

である。こうして二種の語が重複して存することは、一方の意味の既に不明となり、単なる符号として残留することを示すもので、それを比べて行くと追々に発生の順序も明かあきらになるのであろう。今ではまだクラとメといずれが前、もしくは二地に別存して、抵ていしよくそうこく触相剋する機会がなかつたか否かを、確たしかめる便宜を得ないと
いうのみである。

六

最後になお一つ言つて置きたいことは、人に親しいある種の物の名が、これだけ移り改まる性質を持っているからは、現在の分

布によつてその昔の領域を、狭く推定するのは危険だということである。

例えば利根川流域の僅かな平野の方言が省みられなかつたら、雀にクラという語の内地にもあつたことは知つても、それがあつて日本人全般に通用していたという想像は起らぬのみか、更に奇異なるイチクロという一語などは、いたつて近世の誤ごびゆう謬はなはとして黙笑に付し去られたかも知れぬのである。言語の学問の甚だ振はなはわなかつた原因は、結局採集の不完全が主たるものであつたとも考えられる。

宮良君みやながの『南島採訪語彙稿』を見ると、沖縄諸島にはクラ以下の前に掲げた三種の外ほかに、なお先島さきしまの方面には少なくとも三

通りの方言が注意せられている。黒島のフナドウリはあるいはクラから出たものであろうが、その隣島の小浜と西表では、カラヤヌトウラマまたカラヤヌグツクグワとっている。カラヤがもし瓦屋ならば、これは新らしい発生である。その次には石垣の本島から南へかけて、

ミストウンナ

石垣

ミシドウマ

あらぐすく
新城

ミスドウリ

はてるま
波照間

などの例である。これは内地でみそさざい鵜をミソツチヨまたはミソ

クグリというと同じく、あるいは現在では味噌とれんそう聯想して、そ

の由来を考えて見ようとする人もあるかも知れぬが、自分の推測

ではやはりスズメのメと一つ系統で、仮に啼き声から直接に出たと言われぬまでも、少くとも小鳥をメということと関係があらうと思う。

それからなお一つ第三の例としては、東では宮古島のパドウイまたはパドウー、西は与那国島よなぐにのハドウヤーがある。羽鳥の音であらうかと思われるが、果して土地の人はどう考えているか。とにかくに富山県の一部のバンドリスズメと似通っているのは偶然ではあるまい。藁わらみ藁のの一種をバンドリということは、北は越後、南は美濃あたりに及んでいて、必ずしも越中だけの現象ではないが、その命名の理由はまだ不明であった。あるいは鼯むぎさび鼠のの一種にバンドリというものがあつて、藁を着た形がこれと似ているか

らとも見られるが、その獣は何故なにゆえにそういうかは、やはりまた不明であつた。これはかえつて雀を羽鳥といった方が前であつて、それが蓑に行き鼯鼠に行つたものと、解した方が自然に聴えるのだが、現在の資料ばかりでは、まだそう断定するには少し早い。これが自分の南方諸島において、更に綿密なる方言調査の、進行せんことを希望する差さしあた当りの理由である。

談雀

雀の郷里

霜が深く田畠に食べ物なくなると、雀が追々おいおいと村里へ帰つて来る。自分はまだ一羽の雀にも見覚えはないが、これを帰つて来たというのには相応な理由があると思つている。庭の餌箱えさばこに粟あわを入れて見ていると、それを啄つみに来る雀にはどう見ても二つ

の種類がある。一組はいつも群をなして集まり、大よそ飯時ともいべきものがあるらしいに反して、一方には一羽か二羽、時々そのあいまに来て食べて行こうとするのがある。この二つの組が落合うと無論喧嘩けんかになる。多分は雄かと思うきつい雀があつて、そればかりが出て鬪うのだから数の問題ではない。他の大勢は声援はおろか、見物すらもしていかないにかかわらず、敗北するのは小さい組の者ときまつており、中には次の群の影を見ると、見切つてさつさと飛んで行くのもある。またこの方が一段きよときよとしており、他の組は幾分か落着いているようにも見えるが、これはあるいはそう思つて見るからかも知れぬ。しかし少なくとも私のこの小さな庭を、領分として住んでいる雀と、よそに根拠が

あつて何かの都合から、入ってくる雀とのあることだけはたしかである。

この領分がはじめどうしてきまるかということとは、問題にする必要もないかと思うが、私が見ている所では、やはり巢立つた場所の周囲が、自然にその雀の郷里になることは、人間も同じことかと思われる。普通は勝手な瓦かわらの隙間すきまなどに巢を掛け、それがまた並んでいるのを見究め難いが、私が自分の寝る室の窓の前に、柱のような木を一本栽うえ、それに巢箱を引掛けて三回ほど雛ひなを孵かえさせて見たところでは、子雀の時代にいつもこの巢箱の附近へ、集まつて来る者がちようど一腹の数ほどあつた。その中から次の家長が出るのか、あるいはまた丸々別の夫婦がその巢へ来るのか。

それが簡単にわかると面白いのだが、どうもまだ確かめる方法がない。しかし少なくとも道路に接した木の上などから、物におびえて逃げて来るのを見ていると、あるものは真直まっすぐに東の屋根の端に行き、また一部は西寄りの屋根を目がけて飛ぶ外ほかに、この木の巣箱のまわりへ来て一休みした上で、行動をきめようとする者がまた数羽はあるので、すなわち大きくなつてからも、また巣時でない群生活の時代にも、危険不安を感じることには思わず知らず、寄り付く場所が彼等にあつて、それがどうやら生れた家の附近らしいのである。だから雀に聴いて見ない以上確実なことも言えぬが、彼等の領土というのは郷里のことで、その中にもめいめいの生れ在所があり、何か特別の事態が起らぬ限り、近所に住む雀ど

もは親類、または同族であつたのだらうと思つている。

雀の顔

一期の子育てを終つてしまうと、雀の家庭は解散してしまふかどうかは常に問題になる。大きな群でばかり押廻おしまわしている様子を見れば、あの中には小さな結合などは存立し得ないように思われるが、それだけの事実ではまだ断定は出来ない。群は何かといふと一時的に崩れて行くが、そういう場合にもめつたに一羽きりにはならない。ただ二羽三羽と最後まで提携するのが、毎回同じか否かが突留められぬだけである。しかし私などが想像するよう

に、いつも古巢の方角に向つて、先^まず逃げて行こうとする習性が彼等にあるとすれば、やはり同じ巢に育つた者が利害は最も近く、共に暮らす時間も最も長いわけで、おのずからその中から配偶者もきまることと思う。一つの混乱のもととは落伍者^{らくごしや}の多いことで、相手を失つた独身の雀が、何とか身の振り方をつけようとしてうろうろとするのが、少なからず我々の観察を誤らしめるが、それでも気をつけていると色々の事実がわかつて来る。たとえば寒の中に、夜だけ巣箱に入つて寝る雀がある。そういうのは大^{たいてい}抵は二羽づれで、たった一羽というものはなく、三羽以上というものを見たことがない。京の深^{ふかくさ}草の雀のお宿などでは、もうわかり切つてゐることなのかも知れぬが、こういうのが春になると、やが

てその場処を家庭にしてしまうのではないかと思う。もちろんはじめから子なしの夫婦として住んでいるのではあるまいが、近くに親しい異性があれば、それと縁を組む気になるのはまあ自然であろう。子供の頃のことと覚えているのは、田舎で屋敷の隅に僅かな梨の棚があつた。どうしたわけでかその棚の一本の太い竹が節が抜いてあつた。秋の末にそれへ雀の入つて行くのを私が見つけて、一方に網袋をあてて追込んで見たら二羽とれた。巢があるだろうと思つて色々として覗いていたら、あるものかといつて笑われたことがある。少なくともある幸福な雀は、こうして冬になる前から共棲きようせいしているのであつた。

私がいつでも問題にしていたのは、どうしてこのようながやが

やとした群の中から、たった一羽の相手を見定めるのであろうか
ということであつた。背格好せかつこうといい着ている着物のがらまで、
これほどよく似た者がまちがえも騙だまされもせずに、ある者とは
親しくまたある者とはやや冷淡に、時々は鬪争までするというの
が不審に堪たえなかつた。しかし一心に同じ巢の雛を愛している場
合はもちろん、そうでなくとも彼等の行動には隠れたる指導があ
つて、しばしば一つの屋根にとまり、同じ梢こずえに集まつているとい
うことが、馴れない連中との見分けを容易にするらしい上に、群
の中でも個々の一羽の見覚えがついているのだということがこの
頃やや判わかつて来た。鶯うぐいすめじろや目白のような素人には何とも致し方な
い小鳥でも、詳しく見究めたら仲間うちだけで、通用している個

性というものはきつとあると思うが、雀に至つては外からでもほ
ぼ明あきらかな特徴がそれぞれに備わつてゐる。これが雀界の社会学の、
今に成立つだらうと思ふ一つの理由であつて、自分がもし今少し
の時間をもちまた眼が良かつたら、先ず第一に彼等の頬ほおの黒い斑
を、形と大きさによつて分類したことであろう。ごく大体の氣の
ついた点をいうと、雀の頬の黒い毛の部分は、よほど遠くからで
も見分けられるほどの、大小と輪りんかく廓の差があつて、周りが白だ
から殊ことにはつきりしている。これさえ覚えてしまえばたとえ何千
羽の群の中ちゅうにいても、友を見失うような懸念はないのである。私
の想像では、これがこの一種族の他に立たちまさ優つた強みであると共
に、人に名前があり住家があつて、いつでも再会し得るために別

れやすくなつた如く、幾分か彼等の行動を自由にし、かつ複雑ことにしているのではないかと思う。雀はきたない鳥だがその文化は他の動物よりも少し進んでいる、と思つてもよいような事実が次々に心づかれるのである。

雀の家庭

春さきこの鳥の言葉が急に多くなり、また活潑かっぱつになるのは誰でも気がつくが、これは彼等が人に近く、従つてまた慎重つつしがないためとも説明し得られるかも知らぬ。ただ雀は少なくとも境遇によつて、かなり色々と生活ぶりを変える鳥であることは、その挙

動を見ている者の感ぜずにはいられぬことで、それが淋さびしい深山の鳥、または獣などの数少ない群であつたら、恐らくこういう真ま似ねは出来まいと思うと、この無限の繁殖の理由が、先ず一つはわかつたような気がする。冬から続いて仲よくしている雀が、さつさと巢を造つてもう一番子を孵かえしたろうと思う頃まで、まだ相手がきまらず飛んであるく雀がある。口に一筋の建築材料をくわえて、同じ処で長い間同じ音を鳴き続けているのが、急に早調子になるから出て見ると、きつとその傍へ今一羽やつて来て、いかにもその声を聴くような様子をしている。古い日本語でカタラウとというのがこれかと察せられる。即すなわちここで一緒になつて、家を持つとうではないかという相談である。鳥の世界でも、やはり雄の方

が機嫌を取るらしい事実はある。たとえば百舌^{もず}などは夜の引明けに、小高い木の枝に二羽ならんでいて、その一羽だけが何度でも下に降りて、巢になりそうな叢^{くさむら}に飛んで行っては帰って来る。あ
る時はまた食物を拾って来ては食わせる。それを雛^{ひな}見たように両
翼を顫^{ふる}わせながら、口をあけて食べさせてもらうのが雌であった。
これと同じ挙動は他の小鳥にも、巢に就^つく前にしばしば見られる。
鶏などでも食物を見つけると、雄は食べずに相手を喚^よび集め、ま
たは土を搔^かき散らして食物があるという様子をして、だまして喚
びよせようとするものもある。だから雀の場合にも、藁^{わら}などをく
わえた不自由な口で、鳴いて相手を誘^{いざ}なうのは雄の方かも知れぬ
が、巢の計画には雌の方が熱心な小鳥も多いから、今はまだ何と

も言えないのである。

食物と住居の安全と、この二つが大切な相談の題目であることは想像し得られる。これについての意見が異なると、そう簡単には近よって来ぬのが常法で、これをただ雀の好き嫌いと解し、もしくは稀まれに雀望のない雀があるかのように、言った人もあるが私は賛成しない。ここでも個性というものが現われるとすれば、早く子を持ちたいという念願は殊に強く、そのためにやや大胆に過ぎた場処の選択をする者と、それに同意し兼ねる仲間が多いということは有り得るかと思う。山に住む鳥には食料は問題が小さく、巢の方に余分の注意を向けているらしい形跡が著しい。彼等の営巢風習には時代の変化が見られず、また地域の差異もずっと少な

くて、かなり嚴重に古い法則を守っている。それに反して雀はこの点が自由である。瓦葺かわらぶきが普及すれば瓦の間に、萱葺かやぶきが厚くなればこれに穴をあけて住み、人がいなかた昔はどうしていたろうかを、もう考えて見ることも出来ぬようになっていいる。雀の食物だつてそう乏しいわけでもないが、あたりが騒々しくておちおちと食べられぬ場合が多い上に、子育ての前後になると生きたものを捜さねばならぬので、一層その計画が立てにくく、勢いその方へ多く気を取られて、住居の問題をいい加減に解決するのではないかと思う。雀が巢の場所を定める方針の、出たらめであることは著名である。そうしてまた恐ろしく仕事が早い。私の家では二日置きに風呂を立てていた頃、毎度煙突の口に巢を食つた

雀が、落ちて死ぬのを憐あわれんだことがあった。北海道のある停車場では、腰こしあかつばめ赤燕の泥の巢の壊れたのに、せつせと草を運んでい
る雀を見たことがある。相州の海岸ではたしかにまた松の木の地
上三尺ばかりに、巢をかけ卵を産んだ雀を知っているのである。
こういう点から見ると何だか野蛮なようだが、大よそ今日知られ
ている小鳥の中で、彼ほど自在に生き方を変えて、環境に適應し
ようとする者はあるうとは思えない。外ほかの家畜が利用せられては
かりいるとは反対に、彼等はすなわ輒ち人を利用して、村
雀または里雀となっているのである。

雀の引越し

もしも雀が食料の獲得ということに重きを置くこともなく、ただ徒らいたずらに住居の選択にぞんざいであるというのだったら、これはいついつこう

一 向にだめな鳥ということになるが、それでこの通りほんじよう繁昌はんじよう

して行けようとは私には思われぬ。やはりこの二つは婚姻こんいん育児の条件ではあるが、鳥によりまたその境遇によつて、幾分かいずれかを軽く重く、見なければならぬ事情があつたものと思われぬ。妻を求める頃の挙動を見ても、食物は大抵大丈夫、住居はこの辺がよからうではないかと啼なくものと、虫の狩場はここときめた、巢は先ずここで我慢をしようとと相談を掛けるのと、二通りあることはほぼわかる。雀も決して住居の方に、鶏見たように

呑氣のんきでないことは、早く巢作るものが形けい勝しょうと安全とを先せん占せんし、よつぽど遅くなつてから、巢箱の店借たながりに来るのでも察せられる。既に多くの人に気づかれていることは、四十雀しじゅうからが家を捜しまわつて、巢箱の近くへ来てもまだ考えている。それを里雀が見かけると急いで先へ入り、またはまだ相手もきまらぬのに邪魔をしようとする。だから巢箱の穴を出来るだけ小さくして、始めから雀が断念するように、四十雀だけにしか入れぬようにしなければならぬのである。意地の悪いやつだと舌打ちする人もあるが、雀の立場からいえば気がもめるのであろう。しかし人を信用する経験も、山野の鳥よりは雀の方が多くもっている。これほど悪太郎の多い人間社会を信ずるといふのも軽慮のようだが、それでも

人里ではまだ危険の種類が少ない。そうして馴れて忘れてしまった危険も多いかと思う。私の家では落葉松からまつの高い幹に縛って置いた巣箱が三越製であつた。主人も考えが足りなくて、屋根の板の薄いのを気にしなかつたところ、二春まで続けて親子二代とも何かに喰われてしまった。多分は村の外の林に棲む梟すふくろのしわざだつたろう。屋根の板を剥はがし割つて夜の中に荒して行つたのである。大屋も店子たなこも共にこの危険には無智であつた。深山の鳥ならば恐らくは本能がこれを避けさせたことと思う。

しかもこの危険が、もし少しでも予知し得られるものだったら、選んだ後でも何かの処置を取つたであらうことは、幸いにしてこれを確かめる機会が私にはあつた。鳥類の不安の感じはかえつて

人間よりはずっと鋭敏なのである。ただ我々のような推理の力が
具そなわらぬために、梟にも襲われ煙突からも落ちるのみならず、む
だな恐怖によつて大きな損をするのである。この砧村きぬたの野の中に
住んだ当座、私は庭に僅かな芝生を設けて、春の緑を楽しんでい
たが、毎日のようにその中に雀の卵の破片を見かける。時には傷
のない卵もあり、または孵化ふかしたばかりの雛が、落ちていて蟻ありに
たかられていることもあつた。その頃は近所のそちこちに大工づ
かいの音がきこえ、トラックのやたらに飛びまわる時であつたか
ら、雀も落付きが悪くて外へ移ろうとするのだらうと思つた。故
川口孫治郎君が訪ねて来られた際に、この想像を私が話して見る
と、待つて下さいよと川口氏はいつた。雀には借家がありません

からねえ。急に引越して行く先がありますまいからねともいった。それもそうだとは思うが、この事実にはそれより以外の説明があり得ない。つまりこの現象はまだ鳥学界でも問題になっていないのである。もう少し見ていてやりましようともまた数年を重ねたが、ついで雀が雛または卵を抱えて、飛んで行くのを見たことはなかった。これは夜明けの最も気力の旺さかんな時刻とか、またはよくよく人影の見えぬときを見定めて、決行するものと考えられる。芝の上に卵や雛の落ちていることは、気をつけているためかいよいよ多くなる。それで一計を案じて窓の外の手の届く処に、ごく簡単な大ぶりな巣箱を引掛けた。最初はもちろん中に入ろうとしない。それでも春がたけてどうにもならぬという時分に、晩婚の雀

がこれへ来て家を持った。六七日の間はそつとして置いて、もうよかろうと脇の戸から、手を入れて見ると卵を生んでいる。やがて子が孵かえつてじいじいと幽かすかに啼き始めてから、毎朝手を入れて撫なでて見ることにしていた。さぞ雀のおつかさんが、煙草たばこくさい児こだといつていやがるでしょうと娘たちがいうので、なに小鳥には嗅きゆう覚かくがないということだなどと冗談をいつていると、たった三日か四日で、あの柔やわらかな何ともいえない肌ざわりのものが、突如として箱の中から消えてしまっている。さてこそと取下して見ると中は藻拔もぬけの殻からであった。独ひとりで飛んで行った氣づかいはないのである。行く先に頃合いの空家があるうとなかろうと、少しく不安を感じると食ってしまうという親さえあるのだ。とにかく

ここには置かれぬというだけでそつと抱え出し、何かに驚けば取落して行くものと見える。恐らく安全に育つということは、この成長状態では望めないであろう。つまらぬ試験をしたものだと今に気が咎^{とが}めている。それからまた気のついたことだが、家の近所で見る巢立雀の中には、人ならば七八つもちがうと思う年齢の差が見られる。一家の都合とか両親の気持とかでは、かなり思い切つて早い巢立ちをさせるらしいのである。いたずらつ児時代の記憶を喚起して見ても、瓦をめぐつて親かとまちがえるような大きな子雀を見たこともあれば、また椽^{えんさき}先などへ入つて来る時には、時々は腋^{わき}の下などの赤裸なものもいる。こういうのは出ても満足には成長せぬかも知れぬが、とにかく雀は住居に関心が淡いと言つ

ても、やはり一定の要求だけはあつて、それが充みたされぬと愛する者の生命を賭としても、立退いてしまわずにはいないのである。それ位ならもう少し巢を作る前に、周囲の条件を吟味すればいいのにとと思うが、やはり内側にそう十分な熟慮と、忍耐とをさせないような促迫があるらしいのである。自然を愛する人々の、もう一足だけ前に進んで、考えて見なければならぬ問題がここに残っている。私の家では餌箱に粟を絶やさず、虫などは幾らでも拾えるように庭を荒して、これで食物だけは保障してやったと思つてゐるが、そうすればまた粗末な巢でも急いで作つて、こうして中途に悲しい思いをするような、雀ばかりが多くなつて来るのである。

雀の国語

語学といっているような雀の語の研究は、我々には到底出来とうていない。いかに恵まれたる公治こうやちよう長であつても、雀と話をしようとする企ては成立たず、またそんな入用もないからである。文字を雀が用いていないということも、少なからず我々の観察を簡単にする。人間の国語でも、一応はこういう純な状態から学び始めた方がよいように、私はこの頃考え始めて来た。通弁を頼まずにはそれは無理のように見えるが、幸いなことには鳥の言葉は数がい たつて少ない。何度も聴いているうちには意味はやがて判るので、ただ判りましたということを示すことが、幾分か面倒なだ

けである。だから私は誰一人として信用する者が無いということ
 を、覚悟の上でこの報告をするのであるが、そういう中でも少し
 は同感の人もあるうかと思うことは、雀の国の言葉が比較的、
 どの鳥類よりも複雑だという一事である。すぐ近くへ来て啼く頬
 おしろ
 白やアオジまたはせきれい鵲せきれい鳩せきれいというような、一括して田舎ではスズ
 メと呼ぶものを比べて見ても、語数の多いことにかけては里雀に
 及ぶものはない。四十雀は幾分か啼声に変化が多く、山に入つて
 あれも四十雀かと、不思議に思うことがある位であり、コガワラ
 ヒワなども聴いているとさえす囀りに二色三色、地鳴きも場合によつて
 全く別なものを使うが、頬白にいたつては雄は半日でも同じ調子
 の高音をくり返し、雌はごく無口でただ時々地鳴きをする。あおじ藁雀

やジョウビタキは毎度のように来て、啼声はただ一種で囀りもしない。これに反して雀は饒じょうぜつ舌ぜつの評が高いだけに、それはそれは色々の語を持っている。正しい対訳が下しにくい故ゆえに、列挙もまた容易でないが、先ず誰でも知っていると思うのは、遠い処から何かあぶないことがあつて遁にげて来る場合、これは一語ずつ引離して、かなりはつきりと発音するので、いかにも我々の「やれうれしや」に似た感じを与える。次には婚約がいよいよ成つて、これから巢つに就こうとする際の悦びの声、こちらは細く美しくかつ連続して、これくらい顯著に幸福の感を表示するものはない。それからまた警戒の声でも、猫が木の下へ来た場合と子供などの近よる時とは、馴れてしまえば素人にでも差別がよくわかる。仲

間がこれを聴いて危険の性質を、即座に諒解することは言うまでもなからう。これと一羽が害に遭うて、騒ぎ立てる時とはまた声がちがっている。余りに人らしい解釈かも知れぬが、私などはこれを「同情に堪えぬ」と訳している。苦しいまたはかなしいを意味するらしい声は、喧嘩けんかをして地に落ちようとする時などに聴かれるが、これともちざお籬竿で刺された時とはよく似ていても、周囲にいる雀の態度は大分ちがうから、よく聴き分けたら多少の差があるのである。野原に出て行って稲架はさの間などで遊ぶ時の声と、夕方ねどこにしている木や竹たけやぶ藪に戻って、騒ぎ立てるものとはよほどよく似ている。これは多分取止めとりとのない昂奮であつて、会話というよりはむしろ運動の方に近いものと思われる。それと早

曉のぽつぽつと眼を覚ます際の言葉とは、同じ鳥の朝夕とは思われぬほどの相違があり、こちらは「ここにいる」、もしくは「皆はどうした」とかいう風にも聞き取られ、僅かな数で木にとまっていた時には、昼間でもこれとよく似た言葉を使うことがある。

囀ささずるということは今日の鳥屋の意味では、雀には全くないようにも思われるが、これは本来は雀などから始まった語らしいから、現在の用法が変つているのである。人間でいうならばよそ心鳥としては最も自然な無為の生活をしている際の、これぞという定まった目途もくともなしに、いつまでも同じ調子の言葉をくり返すということは、いかに気ぜわしない雀とても、丸々その楽しみを奪われてはいない。子供らが聴いて共鳴をするのもこの声に限られ

ているのは、隠れた意味のあることかと思う。雀は何と鳴くと彼等に尋ねて見ると、チュンと鳴くというのが即ち囀りであつた。これを平板にまたは尻しり揚あがりに、あるいは一つ置きにアクセントを取替えて、許されるなら晩までも、際限もなく唱えておろうとするのを見ると、この語には詩歌俳諧と同じく、差さ当あたつての目途はなく、聴いている仲間もこれを用向きだとは認めていなかつたのである。それをなんらかの大切な交通語の、間に取りまぜて使おうとする故に、外の者にはいよいよ解しにくく、また非常に騒々しいおしやべりとも評せられることは、ちようど我々が駄だ洒じ落やれを興じているところを、西洋人などが立聴やれきしたようなものであろう。南の島々では雀をユムンドリという者が多い。ユムンは

「よむ」であつて暗誦あんしよのことである。何だか物々しい意味がありそうで、それが判らぬためになおのこと、よくも覚えたものだという感じを人に与える。雀の語によつて霊界の神秘を知つたという昔話が、空想せられた動機もここにあるかと思う。沖繩の炭焼長者の女房などは、雀に山原やんばるの炭焼き谷に行けと教えられて、長者の始祖になつたといわれている。ここではクルクルというのが雀の囀ずりの声であつた。我々がチュンチュンと聴き、スズメと写していた音を、島ではクルクルと聴き、従つてまたこの鳥をクラと呼んでいるのであつた。

我々の片仮名かたかなで描き出そうとするから失敗するのだが、もともと雀の子音はいたつて数少なく、ことによつたら一つの音素が、

出しようによつてちがつて聴えるのかとも思う。それを色々と組合せて、少なくとも三十種に近い場合と心持とを表示し、更に自分の楽しみの鼻歌までこしらえているのは、全く雀の国独得の文化であつて、他の多くの鳥たちの企てられぬことであつた。きたない鳥だし尻尾などはたしかに無細工だが、言葉だけはたしかに進んでいる。それがまた必要によつて促されたものだとすると、彼等の社会なり生活境遇なりは、著しく複雑になつていたのである。これを具体的に知ろうとすれば、人に近く住むだけに方法は幾らでもあると思う。音の変りの少ない言葉を、音字で現わそうとするから無理がある。私は胡麻点ごまてん即ち○のような形のを、大小幾通りかこしらえ、また必要ならば点を白黒鼠色にし、それ

を斜めにしたり、たて豎にしたり、また中間のあけ方と数とを加減すれば、立派に雀和辞典は活版になし得るものと考えている。

青空文庫情報

底本：「野草雜記・野鳥雜記」岩波文庫、岩波書店

2011（平成23）年1月14日第1刷発行

底本の親本：「柳田國男全集 第十二卷」筑摩書房

1998（平成10）年

初出：野鳥雜記「アルト 第四～六号」紀伊国屋書店

1928（昭和3）年8月1日～10月1日

鳥の名と昔話「野鳥 第一卷第二号、第二卷第八号」梓書

房

1934（昭和9）年6月1日、1935（昭和10）年8月1日

梟の啼声「家の光 第三卷第八号」産業組合中央会

1927（昭和2）年8月1日

九州の鳥「九州民俗学 特輯号」九州民俗学会

1930（昭和5）年10月8日

翡翠の歎き「郊外 第六卷第六号」郊外社

1926（大正15）年5月1日

絵になる鳥「短歌月刊 第二卷第七号」文芸月刊社

1930（昭和5）年7月1日

鳥勸請の事「東京朝日新聞」東京朝日新聞社

1934（昭和9）年5月13～16日

初鳥のことなど「大阪朝日新聞」大阪朝日新聞発行所

1930（昭和5）年1月3日

鳶の別れ「経済往来 第一卷第四号」日本評論社

1926（大正15）年6月1日

村の鳥「きぬた」

1934（昭和9）年1月

六月の鳥「文体 第一号」文体社

1933（昭和8）年7月15日

須走から「野鳥 第一卷第四号」梓書房

1934（昭和9）年8月1日

雀をクラということ「南島研究 第二輯」南島研究会

1928（昭和3）年5月10日

談雀「俳句研究 第六卷第二号」改造社

1939（昭和14）年2月1日

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※「絵になる鳥」の初出時の表題は「野鳥雜記（1）絵になる鳥」です。

※「初鳥のことなど」の初出時の表題は「初からず」です。

※「鳶の別れ」の初出時の表題は「市隠談片」です。

※「須走から」の初出時の表題は「小河原鶉のこと」です。

※「野草雜記・野鳥雜記」は1940（昭和15）年に甲鳥書林から柳田國男の装丁により出版されましたので、表題を「野草雜記・野

鳥雜記」とし、副題を「野鳥雜記」としました。

入力：Nana ohbe

校正：川山隆

2013年5月5日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

野草雑記・野鳥雑記

野鳥雑記

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 柳田國男

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>